

之ニ付、格別寛大之 御趣意ヲ以、護衛隊御雇勤被 仰付候事。

○ 拾依二人扶持 三浦正之助 同斷 中山浩三郎 同斷 村松孝一郎

右、護衛隊御雇中、頭書之通被下置候事。以上甲斐
鎮撫日誌

○七月十二日舊甲府與力へ達書 護衛隊 山崎齋之助 満田利三郎

右、依 御沙汰歸武相願候處、猶當地罷在、是迄之通勤仕之儀再願之趣、甚以不都合之次第候得共、今般寛大之以 思召、朝臣被 仰付、前書之通被 仰出候事。甲斐鎮
撫日誌

○七月十七日達書

護衛隊差圖役被 仰付候事。

護衛隊差圖役被 仰付候事。

護衛隊頭取被 仰付候事。甲斐鎮
撫日誌

○ 護衛隊銃陣操練教授方、濱松藩へ被 仰付候間、提携教授可有之旨、鎮撫府 御沙汰候事。

○七月廿四日 濱松藩 長官中 護衛隊 頭取被 仰付候事。 鎮撫府 參 謂

山崎齋之助 満田利三郎 野田鐘作

山崎齋之助 満田利三郎

○護衛隊銃陣操練教授方、濱松藩へ被 仰付候間、各出精熟練可有之旨、鎮撫府 御沙汰候條、可被申渡候事。

○七月廿四日 濱松藩 長官中 護衛隊 差配 中以上甲斐
鎮撫日誌 參 謂

○鎮撫日誌ニ云、五月廿日、御不審之儀有之、肥後藩、松代藩、濱松藩ニテ召捕、夫々へ御預ケ相成、姓名左之通、
沼津藩へ預ケ、

柴田監物 矢田新十郎 豊前八右衛門

○以上十八人、處分ノ顛末ハ致フル所ナシ。

十五日、彰義隊ノ横暴日ニ益甚ク、官軍ヲ途ニ殺スニ至ル、是ニ於テ、大總督府、諸軍ニ令シテ

復古外記 東海道戰記 第二十七 明治元年五月十五日

之ヲ討ス、賊徒大ニ敗ル、輪王寺執當龍王院堯忍等、入道公現親王ヲ要シテ逃匿ス、親王遂ニ會津ニ奔ル。東征紀略、東征總督記

○征討ノ顛末ハ、東叡山戰記ニ詳ナリ。

○先鋒總督府、尾張藩兵ニ命シテ、牙營ヲ警守セシム。

其藩兵隊百五十人、當御本營御警衛且臨機爲應援、早急出張可有之旨、總督府御沙汰候事。

五月十五日

東海道總督府 參

尾州藩

謀

東海道先鋒記

德川義宣家譜

○先鋒副總督、甲府駐在諸藩兵ニ令シ、警急ノ際、號砲ヲ三發スルヲ以テ、直ニ牙營ニ參集セシム。

異變之節ハ、於御本營、大砲三發之合圖有之候條、急速支度 御本營へ可有整列旨、副總督 御沙汰候事。

五月十五日

東海道副總督府 參

謀

肥後藩 中津藩 松代藩 濱松藩

肥後藩

中津藩

松代藩

濱松藩

各長官中

沼津藩 掛川藩 高遠藩 高島藩

沼津藩

掛川藩

高遠藩

高島藩

各長官中

尚沼津藩之儀ハ、城内警衛可有之候事。甲斐鎮撫日誌 真田幸民以下各家家記

○豆相軍監、荻野山中藩ニ命シテ、豆相二州ノ形狀ヲ偵察セシム。

其御藩へ豆相兩州之探索被仰付候間、可然人撰ヲ以、一々賊徒之屯集潛伏致シ居候者、又ハ民心之向背等ニ至ル迄、得ト探索被致、早々可被申出候也。

五月十五日

大久保中務少輔殿

中藩記

豆相兩州 軍 監

謀

十六日、大總督府、徳川家達ニ令シテ、暫ク其隊兵ヲ解カシム。

徳川龜之助

其方旗下撤兵隊別手組、其外屯集之輩、先當分之間解兵家歸被仰付候條、此段可申達候事。

五月十六日

靜岡藩記

豆相兩州 軍 監

謀

○此程諸隊屯所引拂、家歸可申渡旨御達ニ付、其段早速申渡、爲引拂申候處、別紙相認候場所々々之儀ハ、諸向俗事取扱等之儀モ有之候ニ付、夫々少人數出勤爲仕候得共、聊御疑念之筋ハ無御座候儀ニ付、爲念此段申上候、以上。

辰五月

徳川龜之助家來 服部綾雄 大久保一翁 山岡鐵太郎

○別紙

覺

雉子橋外

一陸軍會計所 俗事取扱之者日々三拾人計相詰、尤長屋住居之者貳拾人計御座候、尤兵器ハ無御座候。

一橋外

一奥詰銃隊調所 俗事取扱之者拾四五人宛相詰候、尤兵器ハ無御座候。

濱町蠅殼丁

一狙擊隊調所 俗事取扱之者日々四五人相詰、且長屋住居之者凡三十人計御座候。

飯田町坂上

一留守居支配調所 支配向俗事取扱之者、日々百人計相詰申候、尤三拾人計泊リ仕候。

神田橋外

一騎兵所 右數多之馬ヲ飼置候ニ付、右兵士役々共、大凡四拾人計罷在候。

飯田町橋本坂下元

酒井左衛門尉屋敷 一作事方假役所 右へ作事方人足百人計竝右取締之役々七人計相詰罷在申候、尤其外作事方役人、凡六十人計日々通勤仕候。

小石川船河原横町

元本多日向守屋敷 一統隊調所 俗事取扱候者、日々拾四五人宛相詰申候、尤兵器ハ無御座候。

右之通爲念申上置候、以上。静岡藩記

○本條上申ノ日ヲ佚ス。

○先鋒副總督、松代藩ニ令シテ、更ニ兵隊一小ヲ甲府ニ出サシム。

其藩兼テ當地へ出兵有之候得共、尙一小隊人數、迅速可差出旨、副總督 御沙汰候事。

○本條幸民家記十七日ト爲ス、今日誌ニ從フ。

○松代藩甲斐鎮撫日誌

參

謀

復古外記 東海道戰記 第二十七 終

二十一年七月九日

掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

東海道戰記 第二十八

至同治元年五月二十七日

五月十七日、大總督府、松平忠敬、堀田正倫、徳川慶篤、松平直克、戸田忠友ニ命シテ、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野諸藩政令傳達ノ事ヲ管セシム。

松平下總守

右武藏國廻達頭被 仰付候事。

五月十七日 松平忠敬家記

○

右、兩總、房三ヶ國廻達頭被 仰付候事。

五月藩記

○

右、常陸國廻達頭被 仰付候事。徳川昭武家記

○

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月十七日

右、上野國廻達頭被 仰付候事。東征總督記
松平直方家記

○

右、下野國廻達頭被 仰付候事。

五月十七日 戸田忠友家記

戸田土佐守

○大總督府、書ヲ薩摩、長門、大垣、忍四藩兵ニ下シテ、白河城回復ノ功ヲ賞ス。

奥羽之賊徒猖獗、白川城之要地ニ盤踞シ、益兇暴ヲ恣ニシ、官軍ニ相抗シ候折柄、去ル朔日奮戰ヲ遂ケ、寡兵ヲ以テ忽チ賊徒ヲ掃攘シ、遂ニ城地ヲ乗取り、大ニ賊膽ヲ破リ候條、深感賞候、尙成功之次第ハ速ニ可達、奏聞候、此上愈抽忠誠、鞠躬盡力可有之候、仍テ感狀如件。

慶應四戊辰年五月

各通 薩州藩 長州藩 大總督花押

隊長 中江城日誌、慶應出軍雜記
戸田忠友、松平忠敬家記

大平八郎

○附六月十六日達書

白川復城之節、棚倉海道間道筋案内、且白阪宿人馬繼立無滯致周旋、前後骨折奇特之至ニ候、依テ手銃一挺下賜候事。

六月 鎮臺

○稻田邦植從軍事蹟ニ云、五月廿六日、奥州白川表ヘ出兵之薩州、長州、大垣、忍四藩ヘ御感狀下賜候ニ付、沼田實御使被仰付、軍曹之心得ヲ以罷越候様御達有之、人數五人召連罷越、夫々相達、六月八日罷歸申候。

○大總督府、安藝藩兵ノ忍ニ在ル者ヲ甲府ニ遣シ、先鋒副總督ニ屬シテ、東叡山ノ殘賊ヲ誅夷セシム。

右、武州忍表ヘ出張被 仰付置候處被 免、今般甲府表迄出張被 仰付候事。

五月十七日 藝州藩 參謀

淺江城日誌

○再達書

其藩急々甲府表迄出張被 仰付候條、彼地ニテ萬端東海道副總督府之指揮ニ隨ヒ、當府ニテ打洩シ候殘賊、速ニ掃除可致旨被 仰出候事。

五月十九日 大總督府參謀

淺江城日誌

○按スルニ、日誌、前條ヲ十八日ニ、後條ヲ十七日ニ收ム、今長勳家記ニ從フ。

○廣島藩紀事要領ニ云、銃兵二隊、五月二十四日甲府ニ至リ、該城ヲ守備ス。

○先鋒副總督、小島藩ニ令シテ、援兵一小ヲ甲府ニ出サシム。

○小島藩ヘ達書

甲府之儀ハ不容易要地ニ付、兼テ屯兵モ有之候得共、猶又其藩爲加援、急速一小隊人數差出、忠勤可被相勵旨、副總督府御沙汰候事。

五月十七日 藩井

○豆相軍監中井正勝、三雲種方、小田原、荻野山中二藩ニ令シテ、兇徒如シ其管内ニ入ラハ、速ニ之ヲ捕斬セシム、又軍監派遣ノ意ヲ豆相二州人民ニ諭告シ、各其堵ニ安セシム。

一何レノ地ニテモ賊徒來リ候節、兵隊繰出早々打取可申候事、

但、當府迄此旨可被申出候事、

一萬一其御領内町家、民家等ヘ、賊徒潜伏爲致、隱シ居候者、後日相聞候ニオイテハ、賊徒同罪ニ可被處候間、末々ニ至迄、屹度心得違無之様、可被相達候事、

一賊徒ハ不及申、アヤシキ者見當リ候節ハ、早速召捕、至當之處置可被致候事、

但、多數人不相成内、早々打捕可申候事、

一其御領内海岸村々ニオイテ、船所持イタシ候者、賊徒ハ勿論、旗下並浮浪舶商人等ニ至迄、何方ヘモ通船之儀、嚴重可被差留候事、

右之趣、夫々可被相達也。

五月十七日

大久保加賀守小田原 藩記

○一何レノ地ニテモ賊徒來リ候節、以下上文ニ同シ、但シ、第一項ノ但書及

ヒ其御領内海岸村々云々ノ一項ナシ。

豆相

軍

監

豆相 軍 監

大久保中務少輔殿 中野山 藩記

右之趣、末々之者ニ至迄、急度心得違等無之様、可被相達候也。

五月十七日

大久保中務少輔殿 御重役中野山 藩記

豆相 軍 監

大久保加賀守殿 御重役中小田原 藩記

豆相 軍 監

○豆相二州へ布告二通

今般朝廷ヨリ、伊豆、相模兩州へ軍監御遣ニ相成、當宿ヲ本陣ト相定メ、我等並ニ附屬之者共滯留致シ居候ニ付、下々無識之者ニ至リ候テハ、奈何之次第ヲモ不辨、種々恐惑ヲ生シ、或ハ妄ニ疑議シ、都テ人心ヲ搖動スル者モ可有之哉ト被察候、自然左様之儀有之候テハ、第一朝廷之厚キ御趣意ニ相悖リ、我々等奉命シテ出張シタル甲斐モ無之次第ニ候、當春徳川慶喜鳳輦ヲ襲ヒ奉ル之企ヲナシ、剩於伏見表錦旗ニ抗シ、逆情反形判然トシテ明白ニ候間、於朝廷モ不被爲得已御親征迄モ被仰出、官軍御下向ニ相成リ候儀ニテ、此全ク萬民之塗炭ヲ救ハセラレ度ト之深キ思召ニ候、然ル處慶喜ハ伏罪謹慎イタシ候ニ付、寛大之御所置被仰付候得共、徳川旗下之者、其外脱走人、強盜不逞之者共、所々ニ嘯集シ、民患チナシ候故、夫々御征討ニモ相成、巨魁之者共、往々誅戮ニ伏シ候得共、殘賊共猶徘徊シ、民物ヲ掠メ、財貨ヲ奪ヒ、下民之者トモ爲之ニ業ヲ廢スル者有之、且從前之苛政ニ苦シミ居候儀相聞ヘ、深ク叡慮ヲ被爲惱、軍監等ヲ御遣ニ相成候儀ニ候間、厚ク相心得、決シテ恐惑ヲ不生、妄ニ疑議ヲ不爲、各々安堵シ、其家業ヲ相勵可申候、若妄ニ恐惑ヲ起シ、敢テ疑議スル者ハ、此民心ヲ煽動スル之徒ニシテ、亂民同段ナレハ、屹度可有御沙汰候、猶亦下々難澀之向モ有之候ハ、早々當

府迄可申出候、夫々公明處置ヲナシ、救助可致候、亦上之御爲ニモ可相成存ヨリ等有之者ハ、貴賤ニ不拘、無遠慮可申聞候、且徳川家臣亡命之者、其外無宿惡盜共所々ニ屯集シ、民患ヲナシ、亦ハ潛伏匿居イタシ候者モ有之乎ニ候間、左様之者於有之ハ、見聞次第可申出候、夫々御褒美可有之候、若亦知リナカラ申出モイタサ、ル者ハ、賊ニ與スルニ同斷ナレハ、屹度御沙汰可有之候、此段厚ク可相心得者也。

辰五月

豆相兩州 軍 監

小田原藩記
荻野山中藩記

○一大總督府ヨリ小田原へ豆相軍監差出被置候條、此旨相心得、呼出等之節ハ速ニ可罷出候事、
一村々總代又名主名前書可差出候事、

一朝廷ヨリ之御觸達、堅可相守候、自然掛リ内ニ心得違之者有之ニオヰテハ、總代名主之可爲越度候事、
一脫走モノハ勿論、官軍タリトモ無心、押借等之儀申出候者有之候ハ、召捕可届出候、手向致シ候モノハ、依時宜切捨候テモ不苦候事、

一是迄之高札ハ皆以取迦候テ、軍監府へ可持出候、寅早取迦ニ相成候向ハ、其段可申出候事、

一鰥寡孤獨、多子病難之類、極貧之有無、書付ヲ以可申出候事、

一脫走体之者潜居罷在候ハ、早速可訴出候、訴人ヘハ、爲御褒美白銀貳拾枚以上被下ヘク候、若又隱置候儀露顯ニオヰテハ、其家財令沒取儀ハ勿論、組合尙又名主之者へ越度可申付候事、
一村々役々共、役人共ヨリ家人別ヲ、下男又ハ食客之類、令處之人別帳外之者ハ不殘、出所、名前ヲ認メ、何年何月ヨリ雇置候ト申儀可相届候、尤右等之者必追放致シ候儀ニテハ無之候、其旨可相心得候事、但無宿人足体之者ハ、其所々問屋役人ヨリ取調可届候事、

一賣人^{商カ}タリトモ、出所或ハ商賣向キ分明タラサルモノヘハ、宿ヲカシ申間敷候、且又出所差分候モノタリ共、一二宿目ヨリ以上ハ其所之役人承リ、届置候事、

一關東取締方附屬拵ト申、村方へ入込候モノ、假令 大總督府之命ヲ受タル由申聞候共、小田原出張軍監府ヨリ之導引無之候ハ、取敢申間敷候禁令觸達之旨申聞、其處へ留置、軍監局へ可相伺候、自然逆戻リ候躰之儀有之ニオヰテハ、召捕差出可申候事、

一自然脱走之類多勢群來制止難出來節ハ、其所名主ヨリ、直ニ可及注進候事、

一至急之儀、又ハ村々役々ニ致關係候儀ハ、直ニ仕立飛脚ヲ以申越候、其外相伴候儀致出來候節ハ、惣代之者ヨリ書狀ヲ以可申越候、爲其兼テ村々人足之繼立遲延不致様可申合置候、尤日々人足集置候ニハ不及候事、
右之條々相達候モノ也。

辰七月

小田原城出張 軍 監

小田原藩記

○本條布告ノ日ヲ佚ス。

○舊真岡_下野、代官山内某_{源七郎}等、陰ニ野奥ノ賊ニ通スルヲ以テ、總野軍監島義勇、肥前、土佐二藩兵ヲ遣シ、某等ヲ捕テ之ヲ斬リ、其廳ヲ焚ク。

一筆啓上仕候、本月十三日出之御懇書、翌十四日夜拜見、十五日早朝ヨリ宇都宮藩ヲ始、近隣之諸藩へ爲知、江戸ヨリ之落人打果候様申達シ、小藩之自立六ヶ敷向ヘハ、援兵差出候手配モ相附置候、森寺氏モ今朝ヨリ發程、白川へ促行ニ相成候等、昨日前田杏齋氏モ當所着相成、今日ハ日光山へ押ス、當國真岡之代官山内源七郎賊ヲ助ケ候段、前田氏屹度聞及ニ相成、早速誅伐候様懇談ニ相成候ニ付、尙又聞繕候處、彦藩之足立貰藏拵モ同様之說ニテ、先般太田原城ヲ賊攻候節モ、嚮導モ致サ

セ、賊へ官軍御用之名目ニテ、米穀等運ヒ、賊ニ差送リ相成候事實明白タル由ニ付、隙取り候得ハ、又小變動ヲ起シ候ニ付、昨夜中ヨリ弊國之兵四十人計ト、土州之兵二十人計ト相合セ、右之賊巢覆シ了候尙ニ御座候、委細ハ後便ニテ可申上候、弊藩之兵隊ヲ今市、土州之兵隊ハ太田原ト宇都宮等へ出張之筈ニ御座候、現地ニ罷出候テ、見調子候得ハ、江戸ニテ承候トハ大ニ相變リ、兵隊至テ手少ク、白河城モ六百人計之由ニ候處、仙臺其外之寄手等ヲ破リ、或ハ棚倉等攻破リ相成候得ハ、城ヲ守ル人數無之由、薩州之人等罷出、打明ケ話有之候、弊藩之大隊モ追テ國元ヨリ廻候筈ニ候得共、遠國ニテ未タ不行届、到着次第ニハ如何共可仕ト奉存候、將又江戸賊兵共御打拂之儀、未タ御確報無御座、日夜胸中往來仕候、定テ御愉快之儀ト奉遠察候、此段爲可申上如此御座候、恐惶謹言。

五月十七日

島團右衛門
義勇城小笠原唯八様 土方大一郎様
江藤新平様 新田三郎様玉案下 御次第不序東征總督記

○書中、所謂十三日ノ書柬ハ之ヲ佚ス。

○本日上申書
真岡陣屋代官山内源七郎、陽ニ恭順之姿ヲ顯シ候ニ付、格段寛大之思召ヲ以、舊ニ依テ代官勤被仰付置候處、其掛リ之手附ニテ、先般大田原ヘ會津賊兵之嚮導等致シ候儀、普衆人之所知、其上官軍ヘ護送スル之名義ニテ、會賊ヘ米穀等内分差送リ、不遠内黨類ヲモ相集候由ニ付、其儘ニイタシ置候ハ、賊勢益可致增長候ニ付、今十七日四ツ半時、左之通爲取計候儀ニ御座候。

真岡陣屋代官 山内源七郎

手附 三澤昇四郎 平田義助

松野裁右衛門

江並善太郎

右者打果シ、代官山内源七郎一人丈獄門ニ相掛、陣屋等焼捨、所之名主等呼出し、得ト申諭シ、人心安堵、家業尙又致出精候様申達タル儀ニ御座候、尤出張人數左之通、

五月

肥前 肥藩

江城日誌

其外兵隊凡二十人

土州 三原鬼彌太

肥前 重松善左衛門

其外兵隊凡四十人

江城日誌

右爲可申上如斯御座候、以上。

他悉ク肥藩ニ付シテ歸ル。

十八日、水戸藩、書ヲ大總督府ニ上リテ、藩士官軍ノ殺ス所ト爲リシ狀ヲ申ス、督府乃チ諸軍ニ令シテ、其濫殺ヲ戒ム。

○水戸藩上申書

復古外記 東海道戰記 第二十八

明治元年五月十八日

一五九

○山内豊範家記ニ云、五月十七日、下野國真岡ノ代官山内源七郎、賊軍ト串謀、官軍ノ患ヲ爲ス由、軍監島團右衛門原註、肥前宇都宮城ニアリ、誅伏ノ議ヲ發シ、兵ヲ我藩ニ乞フ、乃チ宇都宮在陣一番隊長日比虎作、小監察三原鬼彌太、並ニ肥藩二小隊ト共ニ真岡ニ向フ、肥兵裏門ヨリシ、我兵表門ヨリス、源七郎以下若干人ヲ斬リ、陣屋ヲ放火シ、源七郎處持ノ武器、其ノ

水戸 目付方下役 根本徳三郎

矢島金之介

右者、今十七日五ツ半時頃、本郷六町目加賀屋敷前通ニ於テ、巡邏躰之族へ行違候由之處、如何之行遠ニ有之哉、右兩人被致殺害候事。

五月十七日 東征總督記

○諸軍へ達書
別紙届書前條ヲ指ス之通相達出來、無罪之者ヲ切害スルニ至候ニ付、以後猥リニ打捨被差留候事。

五月十八日

大總督府 下 參謀

東征總督記

根本徳三郎、矢島金之助、無罪ニ切害被致候段、混雜中トハ乍申、御不憫ニ被思食、依之、香華料トシテ御軍用金之内金三十兩被下置候旨被仰出、誠以至仁之御恩命、冥加之至、難有奉感戴候、速ニ水戸表へ申遣候條、追テ中納言ヨリ御禮可申上候得共、先ツ不取敢此段御禮奉申上候。

五月

水戸中納言家來 名越十藏

東征總督記

○先鋒總督、書ヲ副總督ニ致シテ、東叡山賊徒掃蕩ノ事ヲ報シ、且殘賊甲斐地方ニ逃匿スルノ聞アルヲ以テ、益其守備ヲ嚴ニセシム、副總督乃チ肥後、松代以下八藩兵ニ令シテ、府内ノ警守ヲ申嚴シ、掛川藩兵ヲシテ、八王寺驛ヲ扼守セシム。

○先鋒總督府、副總督府ニ遣ル書

霖雨日々濛々候處、彌御壯健御滞營珍重存候、抑一昨十五日、彌上野彰義隊御進討、曉天桔梗前下馬先ヘ、諸藩勢揃仕、卯刻各進軍ニテ、黒門前ヘハ、薩、肥後、因州勢、谷中邊ヘハ長州、藤堂、大村、備、佐土原各一時ニ攻撃、加州邸ヘ肥前大砲隊、神原邸ヘ肥後大砲隊相准ミ、臼砲打掛け、山内へ放火、何レモ奮戦、申半刻計賊徒悉敗散、官軍全勝、即日成功、誠以恐懼之事ニ候、但黒門内外ニテ防戦候ハ、會賊之由、原註二百餘程手痛ク相支候由、薩勢頗苦戦、攻アクミ候處、藤堂仁右衛門、物見勢脇道ヨリ切込候テ、薩州ニ應シ候ニ付、薩勢モ續テ一時切込、夫ヨリ吉祥閣已下堂舍不殘放火、賊軍一支モ不仕、一時ニ敗走、誠ニ以愉快之事ニ候、谷中之攻口モ餘程六ツ箇敷場所ニテ、賊徒林藪之間ヨリ狙撃仕、長州勢、餘程苦戦ニテ攻破リ、大村勢ダンゴ坂ト申所ヘ攻掛リ候處、是モ場所悪ク、夫ヨリ根津權現ノ方へ廻リ攻込候、大ニ勝利之由ニ候、今ニハシメヌ事ナカラ、長勢、薩勢ノ盡力、實以抜群之事ニ候、先々是ニテ先日來因循屈居候士氣立、皇軍之御威光相立、實ニ恐懼ノ事ニ候、又輪門ニハ申刻没落、小塚原ノ方へ彰義隊少々附添脱走之由、其他殘黨所々流落、或ハ潜伏、但シ多分ハ千住ノ方へ脱走ノ由、輪門モ小塚原ヨリ奥州街道へ出、一先會勢合隊、夫ヨリ甲州ノ方へ立越シ、再舉ノ心組ノ由承候間、實否慥ニ分リカタク候得共、夫等ノ含モ可有之ト存候間、口々警衛防戦ノ御軍略專一ト存候、尤右戦争之始末早速可申入ノ處、實ニ多忙遷延ニ相成恐入候、仍先乍荒増勿々如此候、大々急大亂書高免賴入候也。

五月十七日 甲斐鎮撫日誌

江戸上野山内屯集之彰義隊兇徒及暴動候ニ付、不得止事、當十五日、官軍四方ヨリ砲撃候處、賊徒追々及散走候、就テハ當地進入且潛伏モ難計候間、巡邏等嚴重相心得、不審之者有之候ハ、速ニ可取押旨、副總督府御沙汰候事。

但、當地出兵之藩々、繁々練兵可有之、追テ副總督府御覽可被仰出候事。

五月十八日

東海道副總督府 參

一六一

謀印

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月十八日

一六一

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月十八日

一六二

肥後藩 中津藩 松代藩 沼津藩
濱松藩 高遠藩 掛川藩 高島藩
各長官中 内藤頼直家記

○當城外郭愛宕町御門ヨリ、東南西新青沼町御門迄警衛、

右同斷愛宕町御門ヨリ、北西新青沼町御門迄警衛、

右非常之節兩藩申談、兵隊分配、可有嚴衛旨、副總督 御沙汰候事。

但、平常持場ト相心得、萬端可被心附、且加援等之儀ハ臨機可申達候事。

五月十八日

東海道副總督府

參

謀

沼津藩 中津藩 濱甲斐
藩甲斐 柳原前光事 藤原忠敬家記 撫日誌

○鎮撫日誌ニ云、五月十八日、高遠藩へ、當所東口町端レヘ見張所取立、嚴衛可有之旨、參謀ヨリ及口達候事。

江戸上野山内屯集之彰義隊兎徒及暴動候ニ付、不得止、當十五日、官軍四方ヨリ砲撃、賊遂ニ及敗走候、就テハ八王子邊ハ當國咽喉之地ニ付、襲來モ難計候間、其藩人數爲阨壓、迅速可被差出候、萬一襲來之節ハ打取、早々可被表功勳旨、副總督御沙汰候事。

五月十八日

東海道副總督府

參

謀印

掛川藩 甲斐 柳原前光事 撫日誌

今般、武州八王子表ヘ、掛川藩出兵ニ付、其方被差添候間、同藩隊長申談、萬端取締向差配、精々可有奮勵盡力旨、副總督府御沙汰候事。

五月十九日

東海道副總督府

參

謀

掛川藩 安田源之丞

肥後藩

安

田

源

之

丞

其藩、武州八王子表ヘ出兵ニ付、肥後藩安田源之丞被差添候間、萬端申談、差配可受旨、副總督 御沙汰候事。

五月十九日

東海道副總督府

參

謀

掛川藩 甲斐 柳原前光事 撫日誌

○眞田幸民家記ニ云、五月十七日、於甲府、東海道副總督府參謀ヨリ左之通口達、
當國谷村陣屋ヘ其藩人數差出、守衛可致旨、

右ニ付、翌十八日分隊同所ヘ出張、其段參謀ヘ相居。

○豆相軍監中井正勝、三雲種方、小田原藩兵一小ヲ荻野山中ニ發遣シ、大久保教義ヲシテ之ヲ督シ、以テ賊徒ヲ誅夷セシム、又教義ニ命シテ、兵人十五ヲ伊豆大場村君澤ニ出サシム。

其御藩兵隊一小隊、大砲一門、荻野山中ヘ出張被仰付候間、明朝早々操出シ可被申候、尤着陣之上ハ、大久保中務少輔殿指揮ヲ受、進退可被致候事。

五月十八日

豆相軍

監

大久保加賀守殿 御重役中藩小田原記

○今度、大久保加賀守殿兵隊一小隊、大砲一門、其御領地へ出張被仰付、近日着陣致候上ハ、萬端指揮被致、賊徒打取方不都合之儀無之様可被致、此段致御達候也。

五月十八日

豆相

監

大久保中務少輔殿荻野山中藩記

○大久保教義家記ニ云、五月十八日、駿州領地松長村地方役所詰之者ヘ、豆相御軍監附屬ヨリ被相達、豆州君澤郡大場村御固場へ有合之人數可差出旨ニ付、不取敢物頭へ平士差添、足輕十五人差出候。

○是ヨリ先、先鋒副總督佐貫城阿部正恒ノ治所ヲ收メ、佐倉藩ニ命シテ之ヲ保管セシム、是日、東叡山ノ殘賊、佐貫城ヲ襲フ、佐倉藩兵邀へ擊テ之ヲ郤ク。

○二十一日佐倉藩上申書

兼テ上總國佐貫御預之處、去ル十七日駿河家來ヨリ申聞候ハ、先達テ於富津亂妨相勵、當時寺院ニ謹慎罷在候者ヘ、彰義隊ト唱候者ヨリ、駿河謹慎御免相成候様周旋可致候間、岩富村ト申所迄出迎吳候様申越候ニ付、如何仕哉之旨掛合有之候ニ付、謹慎中之義ニ付、罷出兼旨及挨拶候様及答候、然ル處、翌十八日朝六時頃、城下東の方牛房谷口ト申所ヨリ、多人數鎗鐵砲携、不意ニ押來、同所番所番人共及砲戰候處、右脇ニ有之候厩へ火ヲ掛け、直様宿陣所へ押來、諸隊及砲戰候内、平士役人相合宿陣所ヘモ火ヲ掛け、暫時及砲戰、其内南の方喰違ト申處ヨリ、當方大砲散彈打掛候處、賊徒散亂致シ逃去候ニ付、六半時頃兵隊引揚、尙右城内外嚴重守衛罷在候。

一右戦争之節、當方手負即死左之通、

平士	深手	向甚五兵衛	即死	小谷金十郎
大砲同心			即死	三浦藏司
先手同心	深手	三橋榮次郎		
厩中間	深手	壹人	燒死	馬五疋

右之通御座候、賊徒手負即死之義ハ未相分不申候、尤ミニ一銃壹挺分捕イタシ候、且又江戸戦争後脱走之徒、上總國木更津邊ニ屯集之趣ニ付、探索之上猶又可申上候得共、先不取敢右之趣御届申上置候様、在所表ヨリ申越候間、此段申上候、以上。

五月廿一日堀田正倫家記

十九日、鎮臺ヲ江戸ニ置キ、社寺、市政、民政三裁判所ヲ置キ、大總督熾仁親王ヲシテ之ヲ管セシメ、東海道總督橋本實梁、海軍先鋒大原俊實ヲ以テ鎮臺補ト爲シ、副總督岩倉具經仍之ニ副シ、北陸道總督高倉永祐ヲ越後口總督ト爲シ、東海道副總督柳原前光ヲ大總督府參謀ト爲シ、甲斐ヲ鎮撫セシメ、錦旗奉行穗波經度ヲ參謀ト爲シ、錦旗奉行河鰐實文ニ參謀加勢ヲ兼シメ、江戸府判事河田景與及ヒ東海道總督府監軍渡邊清、參謀加勢吉村叙翰ヲ下參謀ト爲シ、參謀林通顯ヲ軍監ト爲シ、甲斐鎮撫府參謀ヲ兼シム、是ニ於テ、諸道及ヒ海軍先鋒皆罷ミ、先鋒諸藩兵、直ニ大總督ノ麾下ニ隸ス。

○大總督府布告

町々名 主 共

今般、江戸鎮臺被差置候ニ付、寺社、町、勘定之三奉行被爲廢、別紙之通被仰出候條、諸事是迄之通可相心得事、但、寺社奉行所ハ社寺裁判所、町奉行所ハ市政裁判所、勘定奉行所ハ民政裁判所ト相唱可申事、右之通被仰出候間、不洩様可相觸事。

○別紙

鎮臺 有栖川大總督宮

輔 橋本少將 大原前侍從 西四辻大夫

判事 新田三郎 小笠原唯八 江藤新平

加勢 北島千太郎 西尾遠江介 橫川源藏

右之通被仰出候間、町中、家持、借屋等之者へ可相觸事。

五月東京

○案スルニ、本件太政官ノ宣達ナシ、又本月十二日既ニ江戸府ヲ置ク事、頗重複ニ屬スルニ似タリ、因リテ之ヲ熾仁親王ニ質スルニ、鎮臺ノ設置ハ關東監察使朝命ヲ齎シ來リ、之ヲ舉行セリ、故ニ別ニ宣達ナシト、蓋シ是時江戸府ヲ置クノ令ハ未タ達セス、故ニ齎此ニ至リシナラン、又創建ノ日諸書記スル所一ナラス、或ハ布告ノ日ニ從ヒ、或ハ各人宣旨拜受ノ日ニ從フ、今下ノ橋本實梁、大原重實等ノ宣達ニ據リ、定メテ本日ト爲ス。

○東征紀略ニ云、五月廿一日、江戸府鎮臺 大總督宮へ被仰出。

但、過日來三條殿ヨリ御内命有之候處御辭退、今日御受相成候事。

○本日達書

東海道總督被免、當分鎮臺補被仰出候事。藩記

橋本少將

海軍先鋒被免、當分鎮臺補被仰付候事。

五月十九

日

大原重

實事蹟

○西四辻公業事蹟ニ云、五月十九日、兼江戸鎮臺輔、同月兼民政裁判所總督。

○二十日達書四通

岩倉大

原前侍從

東山道副總督被免、奥羽征討白川口總督被仰付候事。江城日誌

岩倉具定履歴書

岩倉八千丸

高倉三位

北陸道先鋒總督被免、奥羽征討越後口總督被仰付、諸軍可有指揮旨、御沙汰候事。

五月

高倉永祐事蹟

穗波三位

大總督府參謀被 仰付候事。
但、錦旗奉行被免候事。江城
○

參謀 柳原侍從
柳原前光事蹟

東海道先鋒副總督被免、大總督府參謀被 仰付候事。
五月廿一日

○河鰐實文事蹟ニ云、慶應四年西丸滯城中、參謀加勢被 仰付候事。

○二十四日河田景與へ達書
大總督府下參謀被仰付候事。河田景與履歴書

○按スルニ、下ノ布告書ニ據レハ、渡邊清、吉村叙翰モ亦景與ト同一ノ宣達アリシナリ、今其原記ヲ佚ス。

○二十日布告

江戸鎮臺被 仰出候事。

寺社掛 橋本少將
町掛 大原前侍
勘定掛 西四辻大夫

大總督宮

江戸鎮臺輔被 仰出候事。

江戸鎮臺判事被 仰付候事。

北島千太郎 西尾遠江介 橫川源藏

江戸鎮臺判事加勢被 仰付候事。

岩倉大夫

東山道總督被免、奥羽征討白川口總督被 仰付候事。

右副總督被 仰付候事。

大總督府參謀被 仰付候事。

但、錦旗奉行被免候事。

右、同下參謀被 仰付候事。

右之通被 仰出候、夫々相達候事。江城日誌

○東山道總督府日記ニ云、五月十九日、諸道之總督被廢止候事、尤兵權返上也。

同二十二日、兩公子岩倉具定兄弟ヲ指ス改メ、奥羽征討總督三被 仰付候事。

但、兵馬ノ權并金穀等ハ、大總督府ノ命ニ從ヒ候テ、一道督府之權ニ非ス。

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月十九日

一七〇

○大原重寶事蹟ニ云、五月十九日免海軍先鋒、五藩兵隊皆大總督ニ隸ス。
○柳原前光事蹟ニ云、五月廿四日、前光去廿一日、被免東海道鎮撫使前鋒副總督職候、即日海陸軍大總督府參謀甲州鎮撫兼務被仰下、林玖十郎軍監兼甲州鎮撫府參謀被仰付候事。

○二十四日達書六通

各通 古河 越河 藩

右、東山道兵糧方被 仰付置候處被 免、歸邑被 仰付候事。

○五月

各通 田中善右衛門 田邊五郎右衛門

右、東山道兵糧方被 以下上文
ニ同シ、文

○五月

各通 河井元右衛門 永見善兵衛

右、東山道會計方被 仰付置候處被 免、大總督府會計方被 仰付候事。

○五月

各通

堀江勝兵衛 山本卯兵衛

右、東山道御爲替方被 仰付置候處被 免、大總督府御爲替方被 仰付候事。

○五月

各通

澤田武之助 林田才次郎

右、東山道金穀方被 仰付置候處被 免、大總督府金穀方被 仰付候事。

○五月

各通

桑山豐三郎

右、東山道金穀方 御用掛被 仰付置候處被 免、歸邑被 仰付候事。

○德川家達へ達書

府下取締之儀御委任被 仰付置候處、今度當分江戸鎮臺被差置候ニ付、寺社、町、勘定三奉行所竝諸記錄類、明廿日中悉ク引渡可申候事。

但、奉行之儀被止候、其以下役人之者、當分是迄之通出勤被 仰付候事。

○五月十九日

東京府史料

靜岡藩記

府下取締之儀候委任被仰付置候處、今度當分江戸鎮臺被差置候ニ付、寺社、町、勘定三奉行所竝諸記錄類、今廿日中ニ悉ク御引渡可申旨、御達之趣承知仕候、以上。

但、奉行ハ被止、其以下役人之者、當分是迄之通出勤被仰付候旨、是亦承知仕候、以上。

五月

徳川龜之助家臣

平岡丹波守

花押

大久保一翁

服部筑前守

同

河津伊豆守

山岡鐵太郎

同

岩田織部正

同

東征總督記

○東征紀略ニ云、五日廿一日、昨日來寺社奉行、勘定奉行、町奉行、諸奉行所記錄類御引上ケ、諸事御取調之事。

○市政日誌ニ云、五月廿日、町奉行所役々諸記錄其外取調、引渡手續出來之處、故障有之相延ル、

同日、町奉行石川河内守、北、北佐久間鑄五郎、南ハ役儀被差免、大目付ニ相成リ、残リ用向取扱、徳川龜之助ヨリ被申付、奉

行所御用取扱關口良輔、組頭上田作之丞、同勤方野口運之助ハ、役儀差免ニ相成ル、

廿一日、鎮臺府判事役原註、土方大一郎、江藤御使番等、町奉行所へ來リ、河内守、鑄五郎、其外役々立合、役所竝ニ諸記錄引渡相濟、調役兼帶與力以下直ニ徳川藩士ノ儘ニテ、是迄ノ通り勤續ノ儀、判事ヨリ口達、河内守、鑄五郎ハ役所引拂。

○土方久元事蹟ニ云、五月廿日、江戸鎮臺判事被仰付、次テ市政裁判所判事専任被仰付、同廿一日江戸町奉行ヲ罷ムルヲ以テ、之ニ赴キ、町奉行佐久間鑄五郎ヨリ、市政一切事務並簿書等ヲ收メ、其與力、同心ヲ説諭シ、其方向ヲ定メシメ、其歸順ヲ願フ者ハ各其吏務ヲ執ラシメ、罷歸ラント請フ者ハ之ヲ遣ル、是ヨリ同所ニ在テ市政事務ヲ掌ル。

○新田義雄事蹟ニ云、五月廿二日、日ノ誤、元幕府南北町奉行所ヲ受取、其後寺社奉行所ヲ受取、專ラ寺社ノ事務ヲ取扱フ。

○北島秀朝事蹟ニ云、此時江戸ニ民政ヲ掌ル者ナシ、白晝強盜公行、百萬ノ生民將サニ塗炭ニ墜ントシ、號泣ノ聲噪然トシテ市ニ満ツ、五月秀朝鎮臺府判事ニ任セラル、江藤新平、土方久元等ト共ニ、兩町奉行所ヲ革メ、市政裁判所ヲ置ク、此時初テ府内ニ邏兵ヲ設ケ、盜賊ヲ捕獲シ、訟ヲ聽キ、獄ヲ斷シ、以テ人民保護ノ端ヲ開ク、同月秀朝、江藤新平ト共ニ、幕府ノ司農、會計ノ二局、謂ル勘定奉行所ヲ革メテ、民政、會計ノ二局ヲ設置スヘキノ旨ヲ受ク、新平ハ病ヲ以テ暫ク勤務ヲ辭ス、故ニ秀朝一人、直ニ奉行所及ヒ評定所ニ至リ、命ヲ傳ヘ、大義ヲ論シ、一切ノ簿書ヲ出サシメ、以テ政務ノ權ヲ鎮臺府ニ歸ス、當時奉行ハ病ヲ以テ參衙セス、組頭役數名出テ命ヲ奉ス、秀朝帳簿ノ大要ヲ檢シ、更ニ之ヲ庫ニ藏メ、命ヲ鎮臺府ニ復シ、六月民政裁判所竝ニ會計局ヲ設置ス、爾後秀朝、江藤新平、島義勇等ト共ニ職ヲ會計、民政ノ二局ニ奉ス。

○西尾爲忠事蹟ニ云、五月廿二日、江城大總督府ニ於テ當分江戸府判事拜命、爾後分課市政ヲ掌リ、市政北裁判所原註、舊北ニ於テ事ヲ執ル、是時ニ當リ江城新ニ定リ、民心イマタ安カラス、盜賊頗ル多シ、故ニ綏撫防遏等ヲ以テ主務トス、六月廿日、鎮臺府ニ於テ鎮臺府判事拜命、爾後分課鞅掌事務等舊ノ如シ。

○徳川家達ヘ達書二通

町奉行組與力、同心之輩、自今鎮臺府附ニ被召出、祿高扶持米等是迄之通被下置候間、其段可相達候事。

五月

○因獄掛石出帶刀、自今 鎮臺府附へ被 召出、祿高等是迄之通被下置、支配之者共モ同様被 仰付候間、其段可相達候事。
以上靜藩岡記

○以上二條、竝ニ日ヲ佚ス、因テ此ニ收ム。

○二十二日布告書

今般、江戸鎮臺府被差置候ニ付、町奉行被爲廢候得共、市政裁判所へ相詰候役々之儀ハ、是迄之與力、同心竝支配向、當分之内
徳川家臣之儘ニテ事務取扱可申旨被 仰出候間、右之趣組々番外迄不洩様可申通事。
但、差紙之儀、別紙雛形之通相改候間、其旨可相心得候東京府記

○府記ニ差紙雛形ハ之ヲ略ストアリ。

○二十八日布告書二通

組々世話掛 名 主 共

今般、江戸鎮臺府被差置候ニ付、町奉行所ハ市政裁判所ト唱替、役々鎮臺府附ニ被 仰付、諸事前々之通被取計候間、其方
共掛リ役等申付置候者モ、是迄之通相心得可訴出、且差急キ候儀ニ無之、町人諸願、公事、訴訟等ハ、來月朔日ヨリ可承候間、無忌諱可訴
見込之趣等モ有之候ハ、無忌諱可申立、且支配内町人共ヘモ厚ク申聞、猶時節柄ニモ有之、一同難儀イタシ可罷在候間、渡
世イタシ安キ様厚ク世話イタシ、願事等ハ篤ト相糺シ、言路不塞様爲申立候様可致事。

町々 名 主 共

町々 名 主 共

今般、江戸鎮臺府被差置候ニ付、町奉行所ハ市政裁判所ト唱替、是迄役々之儀ハ鎮臺府附被 仰付、都テ前々之通事務取扱候間、町
町諸訴等從來町法之通相心得可訴出、且差急キ候儀ニ無之、町人諸願、公事、訴訟等ハ、來月朔日ヨリ可承候間、無忌諱可訴
出モノ也。

但、月番之儀モ南北ニテ、是迄之通隔月ニ相心得、來月ハ北裁判所ト可相心得候。
右之通、町中不洩様可觸知モノ也。以上東京府記

○二十七日市政裁判所稟請
今般、市政裁判所被建置候ニ付テハ、向後於市中亂妨之者有之候節ハ、士ト雖トモ 御作法通り、裁判所手先之者ヲ以取締
候心得ニ御座候、此段奉伺候、以上。

五月

○批紙

可爲伺之通事。江城

○

時下益御清康奉賀候、陳ハ今般小子不存寄大總督府參謀被 仰付、恐入不少候得共御請申上候、兩貴君ニモ被蒙 仰恐賀
候、御承知通リ愚昧之前光、萬縷御指揮願上候、將又別紙御受書伺定條々等差出候間、宜御取成願上候、小子進退之處、何分
ニモ當地屯在諸兵指揮、一國鎮壓之儀、偏爲國家再三願上候、將又鎮撫使如舊哉否之儀奉伺候、先ハ樞要計如是候、紛々之
際亂筆萬海恕是祈候、百拜。

五月廿六日於甲府認

穗波三位
河鰐大夫

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月十九日

○別紙二通

海陸軍大總督府參謀被仰付、東海道先鋒副總督被免候旨畏謹奉候也。

五月廿一日

前

光

○一東海道前鋒副總督被免、海陸軍大總督府參謀被仰下候旨、謹奉候、但、鎮撫副總督ハ何共御沙汰無之候、如何可相心得候哉奉伺候、

一鎮撫副督如舊儀ニ御座候得ハ、總督ハ誰へ被仰付候哉奉伺候、

一當地之處實以不可忽ニ付、東方平定之法到徹底候迄之處、前光儀屯留、一國之處置存分王化宣布、鞠躬盡力仕、且ハ東海道筋之聲援鎮壓致度候事、再三奉懇願候。

右條々伺度候、宜預御沙汰候也。

五月廿五日

大總督府 參謀御中督

東征總記

○一今廿八日、兩使竝貴翰到著令拜見候、暑氣炎蒸候處、愈御勇剛恭賀存候、抑御伺之儀御尤ト存候、鎮撫副督之儀ハ被免候、大總督府參謀ニテ甲州鎮撫御出張之事ニ候。

一東方平定之法到徹底候迄、御存分 王化宣布御盡力之事御願及言上候處、深感賞候、略、

一御進退之儀御尋承候、尤東方鎮定ニ到リ候迄、精々御鎮壓可有之候、

右之條御答可申入旨、大總督王被命候、定テ御苦心之儀令察候、折角御盡力專要ニ存候、仍御答迄如是候也。

五月廿八日

大總督府 參

謀

○兼テ御渡置有之候當府御印章袖印、今日中返上可有之旨 御沙汰候事。

五月二十日

東海道總督府 參

謀

但、各藩兵隊他國へ出張有之向ハ、早々申達、取寄返上可有之事。

紀州 尾州 薩州 伊州 長州 備前 肥後 大村 佐土原 龜山
半原 吉田等東海道先鋒記

○大總督府、肥後藩兵ノ櫻田、市ヶ谷、喰違、赤坂、虎ノ門警守ヲ罷メ、命シテ白河口ニ赴援セシメ、紀伊藩兵ヲシテ櫻田門ヲ守ラシメ、因幡藩兵ノ和田倉警守ヲ罷メ、大久保忠告ノ兵ヲ以テ之ニ代フ。

肥後藩

右、櫻田、市ヶ谷、喰違、赤坂、虎ノ門邊警衛應援悉ク被免候事。
五月十九日東征總記

○細川護久家記ニ云、五月十九日、奥州白川ノ戰、官軍利アラサルヲ以テ、速ニ出兵應援スヘキノ命アリ。

○按スルニ、肥兵遂ニ白河口ニ赴クヲ果サス、二十四日ニ至リテ之ヲ罷ム、參看スヘシ。

○右、櫻田警衛被仰付候事。

五月十九日

因州藩

右、和田倉門警衛被仰付置候處、被免候事。

五月十九日

以上東征總督記

○

右、和田倉門警衛被仰付候事。

五月十九日

以上東征總督記

○是ヨリ先、石川總管、亂ヲ水戸ニ避ク、是ニ至リ、其治所下館ニ歸リ、管内ヲ鎮輯ス、因テ書

ヲ大總督府ニ上リテ、其狀ヲ申ス。

私在所常州下館城下へ、去ル四月中、徳川勢ト相唱、凡千人餘押來候處、城内人數纔百人餘ニテ、衆寡不敵、如何共致方無之、一時之權ヲ以急難相免候處、猶亦後勢押來候赴ニ付、前件之少人數故、防戰之術計無御座候付、無據同月廿日在所發足、水戸表ヘ罷越、其節可然御差圖被成下候様奉歎願置候處、當時騒擾之折柄、自然領民共人氣致動搖候ニ付、致歸城候様頻ニ申聞候、且在所近村ニ一揆集合致、暴行候由、旁以領内之儀モ苦勞仕候間、鎮撫仕度奉存候、依之、昨十八日水戸表發足、今十九日在所表ヘ歸着仕候、此段御届申上候、以上。

五月十九日 在所附

石川若狭守

下館藩記

○林忠崇等、沼津藩ヲ脱シテ箱根ニ走ル、沼津軍監和田勇、沼津藩兵ヲ發シテ之ヲ討セシメ、急ヲ豆相軍監中井正勝、三雲種方ニ報シテ援ヲ乞フ、正勝等乃チ小田原藩兵ヲ發シテ赴援セシム、既ニシテ忠崇等進テ箱根ヲ侵ス、小田原藩兵叛テ之ニ應ス、賊遂ニ箱根ニ據リ、明日正勝ヲ殺シ、種方ヲ逐フ、是日、賊勇ヲ其寓ニ襲フ、勇僅ニ身ヲ以テ免カレ、走テ沼津城ニ投ス。

先般、出羽守ヘ御預相成候林昌之助並遊擊隊之者共、領分駿州上香貫村靈山寺並農家へ謹慎爲致置候之處、去ル十九日暴雨、殊ニ連日之淫雨ニテ、狩野川筋滿水之折柄、農家ニ差置候人見勝太郎、其外之者共八拾人許、天變ニ乘シ、昧爽ニ宿所之者へ嚴重口留致シ、渡守ヲ捕ヘ、越シ立申付候ニ付、斯ル洪水ニ出船致シ候ハ、殆ト身命ニモ拘リ可申ト、達テ相歎候處、切害可申勢、危難難逃場合ニテ、兼テ嚴重申付之廉ヲ相背、間道ヨリ竊ニ越立候之趣、關門へ申出候ニ付、靈山寺ニ差置候隊長へ詰合之者ヨリ所爲糺中、別紙寫之通、人見勝太郎ヨリ參軍ニ目宛之書置、宿所ヨリ差出候處、右様暴行之者有之候テハ、一隊之素意齟齬致シ、如何ニモ恐入候旨ニテ、不敢隊中和田助三郎ト申モノ引留可申ト、罷出候跡、猶引續外隊長之者一同申聞候ハ、隊中規則相犯候者ニ付、殘兵引連打取可申、就テハ貳百人餘之者共、渡船申付吳候様賴有之候得共、如何ニモ欺候様相聞候ニ付、再脫之者ハ當方ニテ打取可申候間、殘人數相渡シ候儀ハ不相成旨、堅ク及斷候處、左候ハ、重役ヘ面會致シ度趣申聞候ニ付、満水ヲ凌、沼津表へ申來候、依之、前書之始末御軍監和田藤之助殿へ相届、速ニ出兵打取可申段申上候處、一ト先殘黨之分、鎮靜方說諭可致旨被仰聞候ニ付、役人共出張及談判候處、隊長申聞候ニハ、謹慎之者共猥ニ再脫致シ候テハ、何共恐入候間、引戻方精々盡力致シ、其上ニモ相拒候ハ、速ニ討取可申候間、一同追欠申度旨ニ候得共、其實信用不相成、旁種々說諭オヨヒ候之處、只管夫而已申募、條理不相立候ニ付、他領之渡船ハ江川太郎左衛門殿手代ヨリ爲切流、關門其外賄向爲扱置候吏員迄、一時ニ爲引拂、農民共立退等申渡、漸ク渡船取計立歸、此上ハ無二念討取之外無之段、御軍

監前御同人へ申上、渡船ハ勿論、漁船ニ至迄不殘城下へ引付置、直様ニ小隊及大砲二門、其他役々之者出張、川前へ手配致シ、御指揮相待候内、水勢益盛ニ可相成哉ニ付、最前三島驛へ向、脱走之賊兵追打可致ト存候處、素ヨリ寡少之兵隊、他境迄押出シ、萬々一後口ヨリ殘賊之爲ニ相挾レ候テハ、失策ニ陷可申旨、御軍監御差圖ニテ、彌殘賊之居所動靜相探リ候上、人數爲進、接戦可致様被仰聞候、尤探索斥候之儀ハ差出置候得共、前書出水ニテ往還筋及郊野一圓ニ泛濫致シ、人跡ハ勿論、船路モ相絶候様相成、殆苦慮罷在候折柄、何様取計候哉、他領戸倉村邊越立候テ、東海道三島驛へ追々落行候趣、翌廿日報告有之、尤前顯之通、稀成洪水故、海上廻り越シ、無餘儀遲延之報告ニ及ヒ、不計時機相外レ候得共、右之兵隊、三島驛迄御指揮ニ應シ、追々爲相連固メ居候處、其夜箱根山中戦爭相始候趣仄聞仕候ニ付、早速操出シ可申處、何分險隘之地理、殊ニ後援モ無之、孤獨之兵可施策略モ無之、尤隣領小田原勢ニテ、必定相支可申、然ル時ハ下山候ヲ相待、打取候ヨリ外圖案無之、暫陣候。略。

五月廿二日

水野出羽守家來 柴田令輔

○別紙
既二期限モ打過、殊都下之形勢傳聞之儀モ有之、寂早御地ニ因循在陣モ難致場合、各方ヘ不待御相談、小子一斷ヲ以、吾一軍隊、今十九日昧爽、海道筋へ出兵仕候間、此段爲念及御斷置候跡、兵隊之處ハ各方御見込ヲ以、可然御取計可被下候、勿々頓首。

五月十九日

勝太郎拜

兵一郎様
斧吉様

外御人衆

二白、過日ヨリ各方御議談モ有之處、突然不待御相談出兵候段、一應失敬候得トモ、時勢不得止次第、宜御推察可被下候、

以上。

壹軍隊長

參軍衆 軍目衆 差上置 水野忠
敬家記

○小田原藩へ達書三通

沼津表軍監和田藤之助ヨリ、賊徒撫方加援之儀申來候ニ付、小銃四小隊、大砲二門、今日ヨリ出立被仰付候、尤萬端沼津表軍監指揮次第、進退攻撃可有之、此旨御達致候也。

五月十九日

豆相軍

監

一兵四小隊、大砲二門共、明朝迄ニ山中宿へ着陣致居、沼津表軍監ヨリ報知次第、攻撃可被致候事、但、一小隊ハ三島宿關門警衛可被致候事、

一小銃彈薬、一人ニ付三百發之見込ヲ以、可罷出候事。

○沼津表へ燥出之兵隊、今日晝後迄ニハ是非御出張相成、明朝迄ニハ山中宿迄練込不相成候テハ、萬々一、右賊徒動搖致シ候節ハ、其機ニ應シ兼候哉モ難計、左様相成候テハ、實ニ當藩之起廢ニモ拘、旁不都合相成候テハ、決テ被對朝廷御實效モ相立カタク候付、此旨得ト御決定相成、急速御出兵可被致、此段御沙汰致シ候也。

五月十九日

猶、明朝御出兵候哉ニモ薄々承知候ニ付、此旨爲念御心得迄、如此御座候以上。

小田原藩 吉野大炊介殿

大急

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月十九日

一八一

○此間御達致シ候四ヶ寺へ、兵隊備置ニ相成候處、今日沼津表賊徒三島邊へ來候趣相聞候ニ付テハ、右四ヶ寺詰居候兵隊、練出ニ相成候事故、右代り之者、兵隊早々爲相詰、不時之備手拔無之様可被致候、此段御達致候也。

五月十九日

大久保加賀守殿 重役御中以上小田原藩記

軍

監

○二十日同上達書三通

○幽嶺ヘ林昌之助始メ其外賊徒共多人數來候趣ニ付テハ、三雲爲一郎ヨリ之報告次第、明朝迄其御兵隊二小隊出張之可致御沙汰モ難計候ニ付、其節ハ直ニ出兵相成候様、前以御用意可被致候、此段及御沙汰置候也。

五月廿日

大久保加賀守殿重役御中

豆相 軍

監

○豆州西浦、内浦之内ニ、其御藩領地且末藩大久保兵庫、大久保銑三郎領分有之由、此邊ハ要害之地ニモ相聞ヘ候間、防備筋ハ不及申、過日來及御沙汰置候條件、一々手拔無之、嚴重申付可被置候事。

五月廿日

大久保加賀守殿重役御中

軍

監

○於幽嶺戰手合有之旨、勝敗之儀ハ不相分候得共、右報知有之段、御安心之儀ト被察候、於拙者モ致大慶候、右ニ付テハ當所手配之儀、御手拔ハ有之間敷候得共、猶御全備有之候様致度候事。

五月廿日

中井範五郎

大久保加賀守殿以上小田原記

○大久保忠良家記ニ云、五月十九日脱走之賊徒、箱根關門ヘ襲來致候ニ付、御軍監ヨリ指圖有之、出兵致及防戰、同夜ニ至彌攻擊、双方死傷モ有之、脱走引色ニ相成、出張之御軍監三雲爲一郎殿小田原ヘ引退候折柄、一時之策略ヲ以、渡邊了叟ヨリ脱走ト和解可致趣申越、出張之者和議致候ニ付、其機ニ乘シ關内ヘ押入候砌、同廿日晚、御軍監中井範五郎殿登山致、權現坂迄罷登候節、群集之脱走ニ行逢、脱走之内富樺記一郎ト申者之從僕、範五郎殿ヲ致殺害候趣ニ御座候、夫ヨリ追々城下ヘ押入候形勢ニ付、又候不慮之儀出來可申哉モ難計、家來共取計ニテ三雲爲一郎殿ヘ内通致、海船差出、小田原出帆被致候、然處、脱走之者城下ヘ闖入、同廿二日遊擊隊長人見勝太郎、伊庭八郎城内ヘ罷越、渡邊了叟、小川左十郎應接致、先般林昌之助申入候旨趣申募、就テハ一藩之士氣一定不仕、賊徒打拂候情實ニ至兼、兩三日躊躇罷在候。

○山内豊範家記ニ云、五月廿日、賊徒林昌之助等謹慎ヲ破り、沼津ヲ脱シ、幽嶺ニ據ル、小田原亦賊ト通シ、軍監中井範五郎ヲ殺ス、我藩士ノ松下家ニ借ス處ノ吉井顯藏亦死之。

○松下重光從軍事蹟ニ云、四月廿五日、三島驛屯衛ヲ命セラル、五月廿日、賊兵暴行スルノ急報アリ、土佐ノ臣吉井顯藏、當家ニ屬ス人員拾壹人ヲ付シ、佐土原ノ軍監三雲爲一郎ノ令ヲ受ケ、小田原ノ兵ト力ヲ戮シ、幽嶺ニ於テ防禦ノ計ヲ爲ス、時ニ賊徒衆ヲ盡シ闇入ス、自申牌至戌牌マテ奮戦ス、賊徒遂ニ敗レ崩散ス、顯藏等振旅シテ權現街ノ陣營ニ反ル、此夜子ノ牌、小田原兵反覆シテ敵ニ援シ、我陣ヲ圍ム、防戦スト雖モ衆寡不敵、遂ニ死スル者八人、傷ヲ受クルモノ吉井顯藏及村上庄司、森本彌七凡三人、彌七戦場ヲ遁レ、江戸ニ歸リ、其狀ヲ告ク、顯藏及庄司、巖阻潛伏、翌旦ニ至ル、時ニ風雨烈、微行シテ小田原關門ニ至ル、番兵顯藏ノ首ヲ斬、庄司ヲ獄ニ繋ク、追テ官軍至リ、其按察ヲ受ク、獄ヲ出テ本營ニ歸ル。

○荻野山中藩記ニ云、五月廿一日、藩士小田原豆相御軍監府詰小野木守三、右御軍監中井範五郎殿ヘ附屬、於箱根山中戰死仕候。

○林忠弘私記ニ云、五月五日沼津在香貫村靈山寺ニ着シ、是ヨリ滯陣、同十九日拂曉、第一軍隊長人見勝太郎、己カ隊ヲ引

キ、拔駆シテ香貫出發、河原註、河名遺忘、洪水ヲ侵シ、函嶺へ進襲スル由、已ノ刻比報知アリ、各隊集議ノ上、拔駆ハ軍律ニ違フトイヘトモ、一軍敗失アラハ是全軍ノ敵也トテ、即チ總軍蹕ヲ追テ出發ス、第二軍伊庭八郎拾三人、前田條三郎^{原註}擊隊、遊拾六人、並^{府勤番}、第三軍崎脱藩貳拾三人、第四軍我藩凡六拾壹人、第五軍館山脱藩拾四人、飯野脱藩拾九人、並ニ參軍、軍目、輜重共貳拾五人、此外既ニ出發シタル第一軍人見勝太郎拾五人、勝山脱藩三拾壹人、前橋脱藩貳拾三人、通計貳百七拾五人也、已ノ半刻、第二軍以下香貫ヲ繰出シ、河ヲ越、三島驛ニテ兵糧ヲ用ヒ、函嶺ノ險ニ登ルコト畧壹里餘ニシテ、軍目澤六郎^{原註}、遊早追ニテ下り來リ、ハヤ關門ニテ兵端ヲ開キシ由報知アリ、夫ヨリ山中村へ到リ、此所ヲ本營ト定メ、夫々應援ノ手配ニ及フ、我藩ニハ伊能矢柄ヲ長トシテ、拾九名ノ者共爲援兵出發、

人見勝太郎關門ニ到リ、江戸表ニ用事アリテ關門通行スルノ由断ニ及ヒケルニ、小田原藩兵關門ヲ閉テ之ヲ拒ム、應接再三ニイタルトモ遂ニ之ヲ許サス、人見氏大聲ニテ、サラハ兵力ヲ以テ通行スヘシトテ、驛ノ西入口ニ疊ヲ以、假ニ胸壁ヲ構ヘ、發砲シケレハ、敵ハ高札場ノ邊ヨリ砲發シ、暫時打合ケルカ、人家ニ火ヲ掛け、關門内へ引退キ、固ク守テ發砲ス、我藩拾九名ノ者共、函嶺ニイタリシニ、敵ハ關門ニ於テ防戰堅固ナリ、味方ノ兵手痛ク攻メ立テ、雌雄イマタ決セサレハ、我兵入替リ攻撃シツルニ、イツレモ砲戰ノコトナレハ、互ニ牛角ノ勢ニテ、何時ハツヘキニモアラホハ、此上ハ奇兵ヲ以テ破ルヘシトテ、關門ニ向ヘル兵ヲ正兵トシテ、其儘砲戰セシメ、別ニ前田條三郎ヲ長トシテ、遊擊隊竝我兵數名接戰ノ覺悟ニテ、敵大砲ヲ發セントテ、關門ヲ開クヲ待チ、拔連ヲ關門ニ切入ルヘシトテ、裏路ヨリ關門際ナル郵亭ニ潛伏シ、ハヤ關内ニ攻入ントテ相待ツ處ニ、寅ノ刻過ル比、敵ヨリ大音ニテ應接スヘキコトアリ、暫時發砲ヲ止メタマヘトアリケレハ、乃チ令ヲ傳ヘテ發砲ヲ止メ、前田條三郎單身ニテ關門ニ入ル、

此時衆之ヲ止メテ曰、敵ノ虛實難計、壹人ニテハ心モトナシ、前田曰、彼若シ異心アラハ僕壹人死スルノミ、雖衆何ノ益アラン、僕死セハ君等舉テ突入シ、彼ヲ壓セハ僕ニオイテ怨ナシ、

關兵ノ長前田ニ謂テ曰、吾輩是迄大總督ノ軍監所ニ在ルテ以テ、吾輩不得止空砲ヲ發セシカトモ、固ヨリ我藩ノ本意ニア

ラス、今其軍監ヲ放逐セリ、カ、ル上ハ君等ニ同心シ、徳川氏ヲ恢復セン、前田曰、然ラハ關門ヲ我輩へ渡シタマフヘキヤ、彼曰、同意之上ハ何ノイナムコトヤアラン、前田即チ歸テ我兵ニ此趣ヲ告ク、我兵拾九名ノ者、進テ關門ヲ受取り、急使ヲ以テ山中ノ本營ニ報告ス、是即チ翌廿日ノ辰ノ刻頃ナリ、

五月廿日、巳ノ刻比、全軍山中ヲ發シ、午ノ刻過ル比、函嶺關門ニ著ス、一巡シテ驛舍ニ宿陣ス、是ヨリ我兵一手ニテ關門ヲ守衛ス、小田原藩酒井伴六初兩三人相共ニ守衛ス、同廿一日ヨリ同廿五日至ル、

大總督軍監中井範五郎、戰爭ノ比、關門ニ在リシカ、廿日ノ曉、援兵ヲ促サントテ、早追ニテ小田原ニ到ルノ途中、新谷ノ邊ニテ人見勝太郎隊下ノ者之ヲ斬殺ス、

去ル十九日戰爭之頃、小田原藩ヨリ驛舍ニ放火セシヲ、我兵遊擊隊ト共ニ消防セシニヨリ、驛民之ヲ喜ヒ、謝恩ノタメ餅數器ヲ贈越、

小田原藩ヨリ一小隊、應援トシテ差越ス、

榎本和泉守ヨリ七竅銃ヲ贈越ス、

先鋒之遊擊隊湯本邊ニ出兵ス、

伊庭八郎小田原城内へ行、

人見勝太郎、海上ヨリ開陽艦ニ行、應援ヲ乞。

○水野忠敬家記ニ云、五月十九日、下本所看屋直右衛門方へ押込、和田藤之助殿被召連候僕一人ヲ切害ニ及候後、届出候間、人數差向取糾シ候處、左之通始末書差出申候、其節藤之助殿ニハ裏口ヨリ立退キ、出羽守家來黒澤彌兵衛方へ罷越候、且又御同人附屬宮原鑑造儀ハ、表之方ヨリ逃れ、城下東見附へ相越候付、城内へ宿所相設ケ、守衛致シ置、猶嚴重取寄爲見廻候得共、何レヘ散亂致シ候哉、賊一人モ相見ヘ不申、且又前條藤之助殿僕之儀ハ、城下真樂寺へ假埋致シ置申候、

乍憚以書付始末御届申上候、

御城下下本町肴屋直右衛門申上候、去ル十二日御宿方ヨリ御用宿ニテ、私方へ被仰付候、御軍監和田藤之助様御始上下四人、内御一人様ハ、昨十八日、小田原表へ早追ニテ御出立ニ相成候、然ル處、今朝明六ツ半時頃、御領主様御家中梅田氏ト申仁之由ニテ、右御用宿御役人へ御用向有之趣、取次吳候様被申候ニ付、其段早速下女ユキト申者、御座敷へ取次候處、今一應姓名承リ吳候様、和田様御申答ニ付、再應御名前承り候處、右同斷梅田ト相名乗、其儘取次之下女跡へ引續キ、御侍體之御方凡五六人程、土足ニヲ御座鋪へ踏込、右御家來御一人へ何角嚴重之御掛合モ有之様子見請候間、私始メ家内之モノ驚入逃去申候、近所松芳屋再助方表ヘノ居候處、拔身ニテ三人程私ヲ追掛け來リ被申聞候ハ、此所へ一人逃來リ候哉、又ハ相隠シ候ニオキヲハ切捨可申杯、嚴重申候得共、全ク存シ不申向申候ニ付、又候私宅へ引歸リ中候様子、其内和田様ハ裏之方路次明キ居候ヲ幸ヒ、御立退被成候様子、外壹人ハ表の方へ拔身ニテ白襦袴之儘御立退被成候ニ付、前押込之御仁、寂早何レヘカ散亂之様子見受候付、一ト先ツ安心ニ相心得、私一同立歸リ、尙又近所之者共其騒キニ付、追々立寄、所々取調候處、前書和田様御家來一人次之間ニ伏居、所々疵ヲ負相果候儀ニ御座候、依之、右之段乍憚以書付始末御届申上候、以上。

慶應四年五月十九日

下本町 耘屋直右衛門
町頭 重 兵 衛

宿方 御役人衆中

右役人奥書附、

○大村純熙家記ニ云、江戸へ出張罷在候丹後守兵士之内、和田藤之助ト申者、駿州沼津軍監蒙仰候付、同藩宮原謙造、山田慎造、並藤之助陪從彌十ト申者附屬、五月同所へ出張仕居候處、同十九日夜、林昌之助以下之賊徒數十人、旅宿へ襲來致シ候付、藤之助、謙造、慎造三人ハ同所ヲ切抜、沼津城へ立退、彌十八其場ニ戰死仕候、藤之助、謙造ハ甲府へ罷越、慎造ハ右之暴舉ニ付、報知且募共之爲メ豆相軍監中井範五郎、三雲爲一郎方へ罷越、兩人へ相謀同月廿一日蓋二十日ノ誤、範五郎一同箱根へ馳登リ候處、昌之助其外脱走之賊徒、同所關門へ押寄候付、慎闘終ニ戰死仕候。

二十日、行政官、書ヲ大總督府ニ致シテ、酒井忠祿若狭守、小濱藩主以下十四人謹慎赦宥、及ヒ在京舊旗下士、祿邑復舊等ノ事ヲ報ス。

皇上彌御安泰被爲遊、恐賀之至奉存候、然ハ別紙之通、名前諸侯謹慎被免、並元旗下在京歸順之面々、本領安堵被仰付候ニ付、兩條御通達ニ及候事。略、

一元旗下江川太郎左衛門、田上寛藏、其御表ニ於テ、御用相勤候趣、是迄元旗下歸順之面々、未御所置不相定候ニ付テハ、御用相勤候分モ、別段御沙汰無之儀ト被察候處、今般元旗下御所置相定候上ハ、右兩人ハ素ヨリ、凡テ元旗下ニテ縣令等相勤候向々、役名被仰付候様有之度候事。

右之趣爲可申入、如斯御座候、恐惶謹言。

五月二十日

大總督府御中

行政官辨

事

別紙謹慎御免、

酒井若狭守	同	右京大夫	本莊彈正忠	同	伯耆守	稻垣平右衛門
内藤備後守	松平式部	同	隱岐守	松井周防守	大給縫殿頭	
小笠原佐渡守	稻葉備後守	大給	左衛門尉	京極主膳正	立花出雲守	
榊原式部大輔	水野出羽守	東征總記				

○越後口總督高倉永祐、新潟裁判所總督兼鎮撫副總督四條隆平、書ヲ大總督府ニ致シ、本月八

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月二十日

一八七

日ヲ以テ、高田ニ抵リシヲ告ク、是日、督府復書シテ之ヲ慰問シ、速ニ戡定ノ功ヲ奏セシム。令拜啓候、霖雨之節、彌御安全珍重存候、陳ハ先月廿九日、品川出帆、當月四日於箱館港、薪水爲積入一泊、同七日夕、北越今町港へ着船、翌日高田表へ着陣仕候折柄、當表過日來戰爭中、官軍勝利ヲ得候、則其次第書、薩長參謀ヨリ京師ヘ注進之寫、討死、手負等之書附、今般大監察使ヘ差出置候、先當着爲御屆如此候也。

五月九日

隆平祐

大總督宮 參謀御中督東征總記

○去ル九日御發書、同十九日到着、令拜見候、霖雨之節、彌御勇健御在陣、珍重存候、抑先月廿九日品川御出帆、當月四日於箱館港御一泊、同七日北越今町港へ御着船、翌日高田表御著陣之由、尙其表戰爭官軍得勝利候趣及言上候、並討死、手負等書付寫、大監察使ヘ御差出之由承候、彼是御苦慮之儀、令遠察候、揚櫻尾崎戰爭之間有之、去ル十日ヨリ連日戰爭有之候由、何分右樞要之地、實ニ御奮勵御盡力、臨機御進退肝要候、於當府モ、上野山内屯集之賊徒、去十五日御追討ニ相成、不出一日賊徒敗散、討取數百難勝計候、御互ニ恐懼奉存候、乍去諸所少々ツ、敗兵屯集之間モ有之、日々掃攘之爲出兵被仰付、追々御鎮壓ニ相成候折柄、奥羽征討之儀、實ニ當今御一大事之事ニ候ノ條、此機會ヲ不失、一時ニ奥羽之賊御討伐、賊徒掃攘ニ不相成候テハ不容易候間、實御大任之儀御苦心千萬之儀、宮ニモ深御察シ被成候得共、一際御盡力之程御沙汰候間、過日御返事旁荒々申入候、仍如此候也。

五月廿日

大總督府

參

謀

四條大夫

殺北陸道先鋒記

○大總督府、沼津軍監和田勇ニ令シテ、速ニ林忠崇等ヲ處分セシム。

以手紙申入候、然ハ上野山内賊徒爲討伐、去ル十五日曉天ヨリ進撃、夕七ツ半時滅賊ニ及ヒ、山内悉ク兵火ト相成リ、御同慶之至候、陳ハ其地林昌之助、其外之人數、于今不始末之處、當今又々人數增加候哉ニ傳承候條、速ニ道付ケ有之度存候、萬一人數ニテ手餘リ候ハ、別紙藩々之兵隊、東海道通り不日東下ニ付、其地通行之砌被仰合、早々始末片付候様致度、其段申達候、以上。

五月

和田藤之助

下參謀

別紙、近日京師ヨリ東下之人數、左之通、

柳川人數 筑前人數

三州刈谷人數 大洲加藤人數

唐津人數 阿州家老

○按スルニ、此時忠崇等、沼津ヲ脱スルノ報未タ江戸ニ到ラス、故ニ此令アリシナリ。

○大總督府、備前藩兵ニ命シテ、赤坂門ヲ警守セシメ、彦根藩兵ノ築地應援ヲ罷ム、又土佐藩兵ノ宇都宮ニ在ル者ニ令シテ、白河口ニ赴援セシム。

備前藩五十人

赤阪門警衛被仰付事。

五月廿日

彦根藩

右、築地邊援兵被仰置候處、被免候事。

五月廿日總督記

○山内豊範家記ニ云、五月十八日、全軍宇城ニ入ル、同廿日、總督府ヨリ白川應援ノ命アリ、乃チ三番、一番、十四番、十六番、並ニ砲半隊、大監察伴權太夫監之、小監察森田金三郎副之、先ツ發シ大田原ニ向フ、二番隊、齊武隊、斷金隊相續テ發ス、同廿七日、板垣總督、五番、八番、九番、十番、十二番ノ五小隊、並ニ砲隊ヲ率ヒ、宇都宮ヲ發シ白川ニ向フ。

○是ヨリ先、結城藩主水野勝知、治所ヲ去リテ彰義隊ニ投シ、密ニ徳川氏ヲ扶持センコトヲ謀ル、既ニシテ上野ヲ脱シ、二本松藩邸ニ潜匿ス、是日、大總督府之ヲ捕ヘ、津藩ニ付シテ之ヲ保管セシム、又肥後藩ノ關宿藩士杉山某軒保管ヲ罷メ、津藩ヲ以テ之ニ代フ、尋テ某疾ニ罹ルヲ以テ、津藩ニ就テ藩地ニ歸療センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

右、水野日向並關宿藩杉山對軒、御不審之趣有之候付、當分之間預置候旨、被仰出候事。

五月廿日

伊州藩

大總督府

下參謀

藤堂高潔家記

○按スルニ、肥後藩ノ杉山某、保管ヲ罷ムル達書アルベシ、今見ル所ナシ。

○水野忠愛家譜ニ云、日向守勝知、四月結城ヲ脱走シ、下總國久保田河岸ヨリ乗船、上總國成東村ヘ潜伏シ、又成東ヲ發程、上野山内ヘ潜匿ス、五月十五日、上野屯集之彰義隊御追討ヲ傳聞シテ、前夜東臺ヲ脱シテ、和歌山藩中井某ヘ潜伏、夫ヨリ丹羽長裕邸ニ行キ、悔悟謹慎シテ天譴ヲ待ツ、同月廿日御召捕、藤堂高猷邸陣營ヘ御預ケ。

○按スルニ、九月十五日ニ至リ、勝知ヲ鶴牧藩ニ保管シ、津藩ノ保管ヲ罷ム、參看スヘシ。

○久世廣業家記ニ云、五月廿一日、杉山對軒儀伊州藩ヘ御預替相成候由、尤其段何方ヨリモ御達ハ無御座候事、對軒儀伊州藩ヘ御預中、病氣ニ付、在所表ヘ下宿療養仕度候間、參謀衆迄歎願仕吳候之様、對軒ヨリ隨從之者ヲ以、龜井清左衛門出府中旅宿ヘ申來候間、右ハ過日以來出格御寛大之御取扱ニ有之趣、參謀吉村長兵衛殿ヨリ承知仕居候ニ付、未間合モ無之處、又々勝手ケ間敷儀ヲ歎願杯ハ、實以恐入候次第故、追テハ鬼モ角モ、當節ハ難取計、木下源助於テモ同様相心得居候ニ付、其旨相斷置候處、源助儀ハ當時在所表ニ罷在候ヲ、一應之掛合モ無之、對軒一己之存意ヲ以、左之書面相認、七月三日伊州藩藤井九郎兵衛ヲ以差出候處、同月五日御聞届相濟候由、

歸療願謀書本文、

杉山對軒儀、尊藩ヘ御預被仰付、謹慎罷在候處、先達テ中瘡疾ニテ難儀仕、追々快方罷成、其後脚腫氣有之、着座等甚難儀罷在候處、六七日前ヨリ胸膈鬱閉仕、氣分別テ不相勝、種々加養モ仕候得共、鬼角同篇ニテ難儀仕候趣申越、此上追々腫氣等相增候テハ、甚以困苦仕候間、可相成儀ニ御座候ハ、只今之内在所表ヘ差遣、篤ト療養差加申度、尤全快仕候得ハ早速罷出、謹慎爲仕候間、出格之以御憐愍病氣全快迄、願之通御聞濟被下置候ハ、重疊難有仕合奉存候、此段私始在所謹慎之者共奉歎頤度、幾重ニモ尊藩之御執成、伏テ奉希候、頓首謹言。

七月

木下源助

右之次第、龜井清左衛門於テモ、木下源助ヨリ差出候儀ハ無之苦ト甚不審ニ存、即刻大久保申太郎ナル者ヲ以、關宿表ヘ申來、源助於テモ一向不相心得、甚驚入候次第、即刻乘船ニテ東京ヘ罷出候處、最早對軒儀同地出立歸郷仕、行違相成申候、依

之、右不都合之次第ハ伊州藩藤井九郎兵衛方へ及談判候事。

○大總督府、宇都宮藩屢戰鬪ヲ經、且城邑兵火ニ罹リシヲ以テ、小銃百口ヲ賜フ。

過日來度々戦爭盡力有之、殊ニ居城焼失、定テ諸器械之不足モ可有之ト被思召、小銃百挺下賜り候事。

五月

宇都宮藩

謀
江城日誌
東征總督記

大總督府 參
寺島秀之助

○五月十七日御認之御書面ニ、分捕鐵砲四拾挺、宇都宮藩へ被下候テハ如何哉之御問書有之、右ハ既ニ宇都宮藩へ別紙前條ヲ之通御沙汰相成候ニ付、其許四拾挺之分、直様宇都宮へ御渡シ被成度、残リ六拾挺ハ於爰許渡シ方可致候、此段得貴意置候以上。

五月廿一日

島團右衛門 松東征總督記

○諸軍往々官軍ノ標章ヲ帶ヒス、且不良ノ舉動アルヲ以テ、大總督府、令シテ之ヲ戒飭ス、又其私ニ市街ヲ往來シ、及ヒ市中ニ屯宿スルヲ禁ス。

近來官軍肩印不附徘徊致シ候輩モ有之哉ニ相聞、紛敷候條、以來肩印無之者往來候ハ、相糺候様諸警衛之向へ被仰付置候條、未々迄不洩様相達可被置候、萬一戰爭之砌紛失致候向ハ、其段申出、御印頂戴可被致、爲心得此段相達候以上。

五月廿日

御使番

十六藩 會計局 三隊 蒼龍隊津和野

○諸藩兵隊、當分之間、見附内外之市街、私ニ他行堅ク被差止候、尤隊用之儀ハ可爲勝手、萬一微行之者於有之ハ、市中巡邏之兵隊ヨリ可届出旨、被仰出候事、

但、諸藩兵隊之者、町家ニ屯集、或ハ止宿等、一切被禁候事。

五月廿日 日津和野藩記

○兼テ御達モ有之候處、折々不心得之輩、市中ニテ亂妨之所業相勸候哉ニ相聞ヘ、甚以不相濟事ニ付、以後竊ニ爲見糺、目付役被差廻候條、此段達置候事。

五月廿一日

大總督府 下 參 謀

津和野、飯田藩記
東征總督記

○大總督府、旅費ヲ更定ス。

路料金一日一人前金壹兩ト被定候處、今般御仕方替ニ付、一日壹人分金貳步ト被定候事。

五月廿日

大總督府 下 參 謀

津和野、飯田藩記
東征總督記

○大總督府、金五千兩ヲ増上寺ニ借ル。

一金五千兩

右、軍務多事中ニ付拂底候條、無據暫借慥ニ請取候事。

復古外記 東海道戰記 第二十八 明治元年五月二十日

復古外記 東海道戦記 第二十八 明治元年五月二十日

辰五月廿日

増上寺役者中東征總記

大總督府

下

參

謀印

一九四

復古外記 東海道戦記 第二十八 終

二十一年七月九日

掌記 豊原 資清 築輯

復古外記 稿本

東海道戦記 第二十九

自明治元年五月二十一日
至同月二十四日

五月二十一日、是ヨリ先、朝廷甲府城代水野忠敬ノ臣隸、賊ニ通スルノ聞アルヲ以テ、令シテ其老臣ヲ京師ニ召ス、忠敬乃チ書ヲ大總督府ニ上リテ、其狀ヲ稟シ、假ヲ得テ歸藩シ、功ヲ立て以テ勤王ノ實ヲ表セント請フ、是日、督府、忠敬ノ城代ヲ罷メ、速ニ歸藩シテ傍近諸藩ト俱ニ其守備ヲ修メ、以テ東叡山ノ殘賊ニ備ヘシメ、眞田幸民ヲ以テ甲府城代ト爲ス。

京都詰家來之者へ、別紙御書付御渡ニ付、以急使差越、拜見仕候處、誠ニ以驚愕之次第、何共奉恐入候儀ニ御座候、就テハ重臣壹人急速上京ハ可爲仕候得共、斯蒙御不審候テハ、原註、中略、暫時御暇被下置候ハ、小藩微力ニハ御座候得共、精々盡力仕、實效相立候之様奉懇願希望候、此段奉伺 御内慮度奉存候、以上。

水野出羽守

○別十三日京師達書

其方儀、兼テ東山道先鋒總督ヨリ甲府城被預置候付テハ、嚴重守衛可致之處、去月廿日頃、元徳川龜之助家來遊擊隊等貳百人餘、兵器ヲ携ヘ、相州小田原邊ヨリ追々甲府へ人込、市中徘徊致シ候處、一切取締不致而已ナラス、却テ其方家來共志ヲ

復古外記 東海道戦記 第二十九 明治元年五月二十一日

一九五

水野出羽守

通シ候哉ニ相聞ヘ、方今關東邊兇徒蜂起、不容易形勢ニ付テハ、深ク被爲惱、宸襟候折柄、前件 朝命ヲ背キ、反賊ニ與シ候形蹟、全ク於無相違ハ、甚以不謂事ニ候、此段御取糺被 仰付候條、重役之者壹人早急可致上京旨 御沙汰候事。

五月 水野忠
敬家記

○本條、申請ノ日ヲ佚ス。

○忠敬家記ニ云、右御聞届無之旨ニ付、猶重臣ヲ以、再三懇願ニ及候得共、御採用無之。

○

上野山内敗走之賊徒所々屯集、未至平定、駿州之儀ハ要衝之地面候條、甲府城代被免、速ニ歸邑被 仰付、府中城ニテ領内口々警衛之儀、近隣諸藩申合、嚴重可相守旨 御沙汰候事。

五月 廿一
江城 日誌

○二十八日ニ至リ、甲斐鎮撫府、書ヲ下シテ忠敬ノ林忠崇等ヲ逸セシ罪ヲ責ム、参考スヘシ。

○

水野出羽守
眞田信濃守

甲府城代職被 仰付候事。

五月 廿一
江城 日誌
眞田幸民家記

○按スルニ、幸民遂ニ任ニ赴クヲ果サス、六月二十九日ニ至リ之ヲ罷ム、其條ヲ參看スヘシ。又幸民家記ニ、史官幸民、城代拜任ノ顛末ヲ質問セシ答申書ヲ載セリ、今之ヲ左ニ摘錄シテ參考ニ供ス。

去ル戊辰ノ年、信濃守儀甲府御城代被 仰付候節之始末、委細御尋問之趣穿鑿仕候處、一體其砌、江城日誌ヘハ、五月廿一日信濃守甲府御城代被 仰付之趣相見ヘ候得共、當人ヘハ一向御沙汰無御座候ニ付、公用人ヨリ軍務官ヘ不審之廉内伺致

○諸道總督ヲ罷メシヲ以テ、大總督府、諸藩ニ令シテ、嗣後水陸往來、皆本府ノ印鑑ヲ帶ヒシム。

○諸藩へ達書

シ候處、大村大輔殿面會ニテ、先達テ甲府御城代被 仰付候處、未タ御達ニ不相成由ハ如何之譯歟、定テ近來於途中郵便(脱カ)ヲ殺シ、其荷ヲ奪候事モ有之候間、若クハ右等之爲ニ行違候事ニモ可有之旨ニテ、遂ニ六月廿九日ニ至リ、矢張月日ハ五月廿一日ニテ、左之御書付、上ノ達書ヲ指ス西城へ公用人御呼出ニテ御渡シニ相成申候。

○

五月 廿一
日誌

大總督府 下 參 謂

鍋島直天家記

○二十二日上申書

今度陸路竝船路川筋之儀、大總督府印鑑一通ニテ致通行候様被 仰出候得共、下總、野二州ヨリ諸方へ罷越候節ハ、當府ヨリ印鑑被差出候事。

右兩州ヨリ致通行度存候向々ハ、鎮撫府印鑑差出候間、此旨藩々ヲ始無洩被相觸置可被下候、以上。

肥前侍從内 吉村謙助

津和野藩記

○二十六日總野鎮撫府、管内諸藩へ達書

別紙上ノ達書ヲ指ス之通、大總督府ヨリ被相達候ニ付、下總、野二州ヨリ諸方へ罷越候節ハ、當府ヨリ印鑑被差出候事。

五月 古河佐倉藩記

○大總督府、越後口總督府ニ牒シテ、東叡山賊徒掃蕩ノ狀ヲ告ケ、且速ニ越地戡定ノ功ヲ奏セシム。

復古外記 東海道戰記 第二十九 明治元年五月二十一日

一九七

飛檄ヲ以申入候、然ハ越後路追々御進軍、諸藩連日激戦之由、定テ疲勞察入候、當府於テモ、去ル十五日上野山内屯集之彰義隊討伐被仰付、曉天ヨリ薄暮迄憤戦、遂ニ滅賊、山内悉ク兵火ト相成リ、大ニ安心致シ候、就テハ奥羽邊へ追々人數モ可差出舍ニ有之候處、御方ニ於テハ、地之利ニ據リ候事トハ察候得共、戰地ト御本營トハ餘程隔絶之様子、自然兵氣振不振ニ關係候テハ甚恐入候事故、疎ナカラ申入候、此上御賢察チ以、十分御指揮相成候様、御進軍有之度企望之至候、何分速ニ御成功之程御盡力、爲邦家申達候、以上。

五月廿一日

北陸道 參謀御中督東征總記

○大總督府、肥後藩兵ノ鎮臺補橋本實梁、警守及ヒ三番町歩兵保管ヲ罷メ、津藩兵ヲ以テ之ニ代フ。

右、三番町歩兵被預置候處、伊州藩ヘ預替被 仰付候事。

五月廿一日

大總督府	下	參	謀
肥	後	藩	

右、三番町歩兵、肥後藩ヘ被預置候處、其藩ヘ預替被 仰付候事。

五月廿一日

大總督府	下	參	謀
伊	州	藩	

右、橋本卿御守衛被 仰付候事。

五月廿一日

大總督府	下	參	謀
堺	田	相	模

○橋本實梁家記ニ云、五月二十一日、今度肥後藩奥州白川口ヘ討手被 仰付、御本陣御警衛被免代ヲ伊州藩ヘ御警衛被

仰付候事。

○賊徒房、總地方ニ出沒スルヲ以テ、大總督府、佐倉藩ニ令シ、前橋藩ト協議シテ、速ニ之ヲ誅夷セシム。

頃日總、房邊ヘ殘賊出沒、民心ヲ惱シ候段、不容易義ニ付、速ニ出兵、前橋藩申合、靈賊候様盡力可致旨被 仰出候事。

五月廿一日

大總督府	下	參	謀
堺	田	相	模

○正倫家記ニ云、五月廿一日、大總督、我藩ニ令シテ曰、頃日總、房間殘賊出沒シ、民心ヲ惱ス、當ニ速ニ兵ヲ出シ、前橋藩ト相謀リ、共ニ兎賊ヲ殲スヘシト、是ニ於テ前橋藩ト謀リ、大ニ兩總間ニ索ム、賊皆逃ル、蓋皆奥羽ニ走ルト云、僅ニ一人ヲ下總ノ西小笠村ニ誅スルノミ。

○佐倉藩記ニ云、五月廿日、上總木更津ヘ兵隊貳百八拾五人出張、同晦日、右兵隊在所佐倉表ヘ引揚申候。

○土佐藩士羽山某吾、佛國人ト横濱ニ爭鬪ス、神奈川裁判所其罪ヲ判シ、某ニ命シテ歸藩謹慎セシム、因テ書ヲ大總督府ニ致シテ、其狀ヲ報ス。

去十六日、横濱辨天通ニ於テ、佛國人へ土州藩行達及喧嘩候趣、彼ヨリ訴出、同國コンシユルヘ引合、双方突合吟味之上、裁斷イタシ候一件書面寫四通、爲御承知差進申候、以上。

五月廿一日

井關齋右衛門
寺島陶藏

大總督府下參謀御中

○書面四通

辰五月十七日、外國人御國人へ對シ行違出來候儀ニ付、判事寺島陶藏ヨリ佛國公使へ引合、双方證據人相糺候趣大意、

佛國士

一昨日原註、我五九ツ時比、辨天通ニテ自國人、御國帶刀人へ突當リ間違相成候始末、突合吟味之タメ、當人並證據人召連申候間、委細ハ右之モノヨリ御聞取可被下候。

陶藏

一承知可承候。

佛人

一書肆之見世先ニ四五人ニテイミ、書畫ヲ眺居候處、後ロヨリ帶刀人參リ、肩へ突當リ申候、其節召仕之小遣原註、御モ傍ニ罷在候。

同人

一帶刀人三人之内、突當リ候モノハ身構ヘイタシ、刀ヘ手ヲ掛け、凡壹尺計抜カケ、直ニ鞘ニ納メ、抜キ放シハ不申候得共、掛念ニ付、右手ニ杖ヲ握リ、左手ニピストルヲ持、身構イタシ候。

土藩

一右之肩先へ佛人之左之肩先ヲ突當候ニ付、二三歩退キ、鐵中心之杖ニテ後口ヨリ腰部ヲ打候ニ付、佩刀ヲ左之手ニテ左之方ヘ片奇セ、小刀之方ハ右之手ニテ腹ヘ引付、尤柄ヘ手ヲ掛け候覺無之、當表之儀、外國人接交之御揚所柄之儀、兼々厚ク申付モ有之候ニ付、拔刀ニイタス所存無之、既ニ右足之股根ヘ掌ヲ附居申候。

土藩證人

一右之通ト覺申候。

但、右場所之様目擊イタシ候外國人小遣、御國人ヲモ始末相糺候處、日本士官刀ヘ手ヲ掛け迄ハ見受申候得共、其後之始末並拔劍之否、碇ト心得不申旨申立候事。

○上佐藩、神奈川裁判所へ申請書

山内土佐守家來 羽山省吾
山内土佐守内 賑察使 高屋左兵衛

五月廿日

○本日神奈川裁判所達書

右之モノ儀、横濱關内オイテ佛蘭西人ニ行逢、喧嘩ニ及候始末、彼ヨリ訴出、當今之御場合、外國人ヘ對シ喧嘩相發シ、朝廷ヘ御面倒相掛け候段不埒ニ付、大總督府へ伺之上、横濱ヨリ脫劍爲致、國許ヘ差返シ、一ヶ月謹慎申付候事、

辰五月

○以手紙致啓上候、然ハ去十六日辨天通り於テ、貴國人へ土州藩羽山省吾儀行達及喧嘩ニ、當今國事多端ニテ、右體不都合之

次第相生シ候段ハ、取締不行届ニ有之、就テハ省吾罰方之義ハ、別紙前條ヲ指ス、之通り今廿一日申渡シ、同日第二時横濱ヨリ送リ出候間、案内申入次第、見届之モノ御差出可有之候、尤向後右様之儀無之様、精々處置可致候、右之趣得貴意候、以上。

辰五月廿一日

佛國公使

ウートレイ閣下以上東征總督記
大久保忠告筆記

東久世中將花押

○甲斐鎮撫府、肥後藩兵ノ甲府屯戍ヲ罷メ、之ヲ江戸ニ班ス。

今般申立之趣モ有之候ニ付、當府屯在被免候旨、副總督 御沙汰候事。

五月廿一日

肥後藩長官 中甲斐鎮

東海道副總督府 參

謀

○林忠崇等、小田原藩兵ト合シ、將ニ進テ沼津ニ逼ラントスルノ聞アルヲ以テ、沼津藩兵ヲ木瀬川ニ出シテ之ニ備ヘ、急ヲ傍近諸藩及ヒ佐土原藩兵ノ、江尻驛ニ次スル者ニ報シテ援ヲ乞フ、尋テ佐土原藩兵、進テ沼津ニ至ル。

○水野忠敬家記ニ云、五月二十日、遊擊隊戸倉村越立三島宿へ脱走ノ由注進有之、急速出兵、同所迄進軍、同二十一日、小田原藩遊擊隊ト合併致シ、襲來之趣探索之者ヨリ申出候ニ付、木瀬川之切所ニテ防戦之積、人數同所へ繰上候、右事件ニ付、近方ハ已ニ援兵ヲ乞候得共、猶東下之官軍、富士川支有之、以西之分へ間道爲相廻、援兵爲申込候。

江尻宿ニ於テ、佐土原藩、廿五日大井川間道越立、金谷宿ニテ筑州藩、柳川藩、廿六日掛川宿ニ滯陣之唐津藩隊長ニ日阪ニテ行逢、掛川宿ニテ阿州藩等、何モ援兵之儀承知、速ニ進軍之旨返答有之、尤駿府ニ於テ藩々遂軍議、進軍可致ニ付、脱徒之儀暫時程克取計置候様、柳川藩ヨリ申聞之。

廿二日、小田原藩並遊擊隊合兵ニ付、當藩戮力之儀談判有之候ニ付、合兵之儀ハ難相成旨返答ニ及候事。

○島津忠寛家記ニ云、閏四月廿七日、京師進發ノ四番銃隊、霖雨之折柄諸川水溢、滯陣多ク、漸ク江尻驛ヘ到レハ、富士川水漲リ渡ル能ハス、故ニ又滯陣、五月廿四日沼津藩士兩名來テ、脱走ノ徒箱根ニ據ル、然ルニ藩力微ナルヲ以テ獨討スル能ハス、因テ以テ援兵ヲ乞フ、輒チ承諾シ、洪水ノ故ヲ以テ海ニ航シ、直チニ沼津ニ達センコトヲ謀ル、既ニシテ富士川水稍減スルヲ以テ、翌廿五日、江尻ヲ發シ吉原驛ニ到ル、同廿六日、進テ沼津ヘ陣ス。

○田沼意齊家記ニ云、林昌之助等之賊徒強暴、既ニ近頃田中藩へ追討被仰付候趣、同藩ヨリ報知有之、就テハ弊藩之儀、大井川要地ニ接居候領地且海岸等モ有之、旁以防禦之手配申付候處、猶又沼津藩ヨリ援兵之儀頼越、是又出兵之手配申付、既ニ出兵可及之處、林昌之助等之賊、御追討一戰ニ打負、乗船何レ歟脱走致シ候趣、再應田中藩ヨリ報知有之ニ付、猶海岸防禦精々指揮仕置。

二十二日、大總督府、津藩兵ノ和泉橋警守ヲ罷メ、岡田善長ノ兵ヲ以テ之ニ代フ。

○東征總督記ニ云、五月二十二日、伊州藩和泉橋警衛被免候事。

○

岡田鑑之助
一手へ

和泉橋門警衛被仰付候事。

五月廿二日 東征總

督記

○是ヨリ先、朝廷、郡上藩青山幸宜ノ治所ニ命シテ、飛驒ヲ警守セシム、是ニ至リ、藩兵ノ江戸ニ在ル者、書ヲ大總督府ニ上リ、賊徒飛驒ニ侵入スルノ虞アルヲ以テ、歸藩シテ警備ヲ嚴ニセント請

フ、獎勵シテ之ヲ遣ル。

弊藩、當正月飛州鎮撫使先鋒被仰付、人數出兵仕候處、猶又同所取締竝濃州笠松表取締ヲモ被命候上、東山道へ出兵被仰付、右ニ付兩所取締御免、引續是迄隨從仕候處、今度、右場所御用濟ニ相成、猶此上相應ニ御用奉蒙仰、拋身命報國仕度奉存候、然處、兼テ日夜肺肝ヲ碎キ心配仕候義ハ、飛州ニテ御座候處、先頃又候同所取締被仰出、一小隊程爲斥候差出置候趣之處、右國四圍義々タル絕壁而已ニテ、濃、信、越ニ攝シテ一小國ニ御座候處、國中ニ一諸侯モ無御座、况ヤ近隣諸侯之城下ヘ何レモ廿里隔絶、道路嶮岨ニシテ、四境ニ是迄、平素近モ十八ヶ所モ小關門ヲ備ヘ罷在候位之場所ニテ、殊ニ信州路ヘ踰ヘ候通路幾筋モ有之、東國敗走之徒、其要害堅固ニシテ備無キヲ知リ、且濃、信之諸侯モ夫々出兵被仰付居候義ニ付、他日其虛ニ乘シ、飛州高山ヲ屠リ根據トシ、近隣ニ跋扈仕候節ハ、弊邑儀隣境順路ニ付、不意ニ襲來候モ難計、且前件申上候通、何地ヘモ廿里内外隔地、殊ニ嶮岨ニシテ援兵モ早卒ニ參兼候ニ付、飛州表兼テ一際嚴重ニ警衛不仕テハ、實ニ心配仕候得共、弊邑濃北邊野之小孤城ニテ、何分行届兼、無諸侯之國ヲ境ニシ、百有餘里ヲ隔絶仕、實以途ヲ失ヒ、當惑仕候ニ付、心附候儘荒増申上候、已上。

五月廿一日

郡上隊長 坂田又右左門

青山幸宜家記

○追々賊徒甲州路へ赴候哉ニモ粗承知仕候、然處、昨日委細申上候通之次第柄ニ付テハ、若甲州路ヨリ信州路へ脱走仕候テハ、不日飛州へ近寄可申ト甚心配仕候尤國元ヨリ申越、其上ニテ相願罷越候テハ、隔地之儀故彼要地ニ據候テハ、防禦方行届兼可申ト心配仕候間、何卒出兵御免、同所警衛嚴重ニ仕候様被仰付被下置候様仕度奉願候、已上。

五月廿二日

郡上藩 坂田又右衛門

赤松熊之丞

○批紙

早々歸邑、領内嚴重防禦被仰付候事。青山幸宜家記

○幸宜家記ニ云、五月廿二日、大總督府御使番詰所ヘ右之通差出候處、御附紙ヲ以被御出候段、御達有之、穗波三位殿ヨリ隊長之者被召呼、御懇之御意被仰出、在所表ニ於テ一際盡力致候様被仰達之、大總督府ヨリ、長々出兵盡力致シ、御満足被思召候段、上意之趣被仰渡之。

○越後口總督高倉永祐、新潟裁判所總督兼鎮撫副總督四條隆平、書ヲ大總督府ニ致シテ、長岡城回復ノ狀ヲ報ス。

梅雨之節、益御勇猛恐悅奉存候、抑於北越小千谷、長岡道、去十日ヨリ攻撃、薩、長兩藩、加州、高田、信州、尾州等進擊候處、賊軍強勢ニテ苦戦打續候得共、去十九日長州勢、千曲川打越乗入、諸藩進撃ニテ、同日已刻長岡落城、町在共燒亡仕候、殘賊七八里跡へ退去ニ及候由ニ御座候、右戦爭、連日霖雨、晝夜對陣發砲ニ付、諸隊殊之外難灑仕候次第、勝敗不分明ニ付、別段不申進候、渡舟之甲乙並討死手負等ハ追テ取調可申進、先以賊城落去之儀、不取敢申上候問、事情御亮察可被下存候也。

五月廿二日

隆平

祐

○大總督府 參謀御中督征總

去ル廿二日之御書拜見候、彌御安全御在陣珍重存候、抑北越小千谷口、長岡道、去十日ヨリ攻撃、薩、長兩藩、加州、高田、信州、尾州等進擊候處、賊軍強勢ニテ苦戦打續候由、乍併去十九日、長州勢千曲川打越、引續キ諸藩進撃ニテ、同日已刻後長岡落城、市在燒亡、賊徒八里計退去候由、御報知委細及言上候、先々官軍大勝利之由、御互ニ恐悅、於兩督府ハ定テ御苦慮之程

令恐懼候、尙精々御盡力專要ニ存候。略、

五月廿九日認

大總督府 參 謂

高倉三位殿
四條大夫 及北陸道先鋒記

○甲斐鎮撫府、甲府町奉行兼代官中山某誠一郎ノ町奉行ヲ罷メ、名倉信敦予何人、演松藩士ヲ以テ町差配ト爲ス。

先般町奉行被仰付置候間、萬端取締、天朝御新政之德澤貫徹候様、奮勵可有之事。

五月廿二日

東海道副總督府 參 謂

中山誠一郎殿

○

今般甲府町差配申付候間、萬端取締、天朝御新政之德澤貫徹候様、奮勵可有之事。

五月廿二日

東海道副總督 甲斐鎮撫日誌

○附錄一條

中村柳三郎 久保田敬太郎 吉田元八郎 生島市作 奥野淺五郎

久保島應藏

山田米之助

三津只次郎

久保島榮次郎

右之者共、是迄之通、町差配組下被仰付候間、可有精勤旨 御沙汰候事。

五月廿二日

東海道副總督府 參 謂

甲斐鎮撫日誌

○箱根ノ賊勢猖獗ナルヲ以テ、參河裁判所總督平松時厚、駿府駐在諸藩兵ヲ戒飭シテ之ニ備へ、書ヲ甲斐鎮撫府ニ致シテ其狀ヲ報ス、是日、鎮撫府、岡崎、田中二藩兵ノ駿府ニ在ル者ニ令シテ、賊如シ駿府ニ向ハ、速ニ之ヲ誅夷セシム、尋テ時厚モ亦沼津藩ニ令シテ、嚴ニ賊兵ノ西侵ヲ防遏セシメ、岡崎藩ヲシテ藩兵ヲ豫備シ、緩急駿府ニ赴援セシム。

○平松時厚、柳原前光ニ遺ル書

先般、駿州沼津領ニ於テ謹慎罷在候脫走之賊徒カ別紙風説書宿送之通、小田原人數ト集合シ、三島驛へ侵入、既ニ沼津城へ襲迫之勢有之候由相聞ヘ候ニ付、過日モ申上置候通、精々手配致置候得共、猶又右之次第故、當方之内、軍事熟練之者、駿州表へ差遣、當國各藩ヘモ指揮致シ、防禦之配運申付置候、猶手許ヨリ斥候差出候間、依報知神速出兵可致旨申付候、於其表モ疾々御承知トハ存候得共、自然甲州路へ出候儀モ難計候間、御心得迄ニ爲念申入候、畧之。平松時厚事蹟

○本書日ヲ佚ス、書中、所謂別紙モ、亦見ル所ナシ。

遊擊隊ヲ始林昌之助等之賊徒共、沼津表ニテ謹慎不相守、何方へ歟亂行致候趣ニ付、萬一駿府方角へ罷越候ハ、無ニ念、

田中藩ト戮力シ、速ニ討滅可致旨、副總督被仰出候事。

但、襲來之摸様在之候ハ、早急當 御本營へ可有報知候、應援等ハ十分御軍配ニ相成候間、安意決志一途ニ成功可致候事。

復古外記 東海道戰記 第二十九 明治元年五月二十二日

二〇七

五月廿二日

東海道副總督府

參

謀

○田中藩ノ達書ハ、田中藩ト戮力シヲ岡崎藩ト戮力シニ作ル。

○本多忠直家記ニ云、五日二十九日、甲府表ニテ、副總督府へ左之注進書差出、方今遊擊隊ヲ始林昌之助等之賊徒共、謹慎不相守、何方へ歟亂行致候趣、御達有之候ニ付、則御請書奉差上置、夫々無油斷手配致シ、尤探索方嚴重申付置候處、箱根關門邊ニ於テ戰ニモ及候趣之處、小田原ヨリモ出兵、官軍方御人數モ追々御繰出ニテ、賊徒共速ニ御打取相成候由相聞申候、乍去此上殘徒何方へ立廻リ罷越候哉モ難計、時宜ニ寄、出兵御守衛人數之内ヲモ、田中藩其外申談、討滅可仕心得ニ御坐候、先ハ探索之摸様不取敢御注進奉申上候、以上。

○二十九日三河裁判所總督達書二通

水野出羽守

今般、其藩ニ於テ預リ置候賊徒林昌之助以下再脱イタシ、三島、箱根等ヲ暴破ニ及ヒ、徑ニ險阻ニ據テ官軍ニ抗シ候趣、兇逆不可容儀ニ候、同所之儀ハ東海第一之要路ニ候處、賊徒共占據イタシ候テハ東西之聲氣モ不通、其害實ニ尠カラサル儀ニ候間、不日官軍進討可致候得共、自然反侵之勢有之候ハ、精々防禦之方ヲ盡シ、一步モ西進爲致間敷、城前再脱爲致候儀ハ、於其藩失虞之責固ヨリ不可辭儀ニ候得ハ、旁以一段勉勵、過失ヲ相償候様焦彈可有之事。

五月

總

水野忠敬家記

○忠敬家記ニ、五月二十九日、三河裁判所ヨリ宿次ヲ以テ、六月一日沼津ヘ達ストアリ。

○岡崎藩ヘ達書

此度、駿府邊賊徒襲來候之趣、不容易事件ニ聞候、就テハ何時出兵申付候モ難計候間、兵隊備置、沙汰次第不移時日、神速彼地へ出張、自然賊徒侵入候ハ、防禦粉骨勉勵可有之候事。

但、三小隊可備置候事。

五月

總

本多忠直家記

○神奈川裁判所副總督鍋島直大、下總、下野鎮撫ノ命ヲ拜セシヲ以テ、江戸ニ抵リ、總野鎮撫府ヲ古河ニ開キ、老臣ヲ遣シテ其事ヲ管セシム、尋テ鎮撫府ヲ宇都宮ニ移ス。

私儀野州爲鎮撫、今九日横濱表發足仕儀ニ御座候、此段御届申上候、以上。

五月九日

肥州侍從

私儀最前御届申上置候通、去ル九日横濱發足之末、今日爰許到着仕候、此段御届申上候、以上。

○本日上申書

肥前侍從

侍從儀、今度下總、野二州鎮撫方被仰付、即今ヨリ土井大炊頭殿城下下總古河へ官府相建、重臣之者差遣、鎮撫方取掛申儀御座候、仍テ右二州之藩々其外へ、此旨御傳達可被下置候、以上。

肥前侍從内

吉村謙助

以上鍋島直大家記

○直大家記ニ云、右之末、此方ヨリ御布告相成候様御沙汰ニ付、出役之者へ申越候事。

復古外記 東海道戰記 第二十九 明治元年五月二十二日

二〇九

○侍從儀、今般總州於古河鎮撫府相開、役々拵又兵隊差遣候ニ付、御旗御下渡被下度奉願候、以上。

五月廿三日

肥前侍從内

吉村謙助

鍋島直大家記

○直大家記ニ云、右之末、御旗一流被相渡候。

○直大家譜ニ云、五月三日、下總野邊賊徒出沒、官軍ニ抗シ候ニ付、大總督府ヨリ鎮撫ノ事ヲ命セラル、依テ同十一日、兵ヲ督シテ江戸ニ進ミ、下總古河へ官府ヲ建、六月三日官府ヲ野州宇都宮ニ移ス。

○二十七日鎮撫府、房、總諸藩ヘ達書
兩總、房三ヶ國觸頭之儀、佐倉藩ヘ被仰付置候得共、今度於古河驛鎮撫府被相開候付テハ、同府ヨリ廻達之儀、古河藩ヨリ相觸候様、被仰付候事。

五月

下總野鎮撫府

執

古河小見川藩記
久松勝慈家記

○二十八日鎮撫府、下總下野諸藩ヘ達書
今度侍從儀、別紙之通蒙仰、於古河驛鎮撫府被相開、先以役々致出張候間、下總、野兩州藩々ヨリ諸御用爲聞、次一人宛當驛差出相成候様之事。

五月古河藩記

○別紙ハ十八日、鍋島直大ヘ下總、下野鎮撫ヲ命スル達書ヲ指ス、既ニ三日ノ條ニ載スルヲ以テ、之ヲ略ス。

○大總督府ヘ上申書

今般總州於古河鎮撫府相開候處、不辨利之筋有之、野州宇都宮へ相移申候、此段御届申上候、以上。

六月三日

肥州藩

吉村謙助

鍋島直大家記

○六月四日下總、下野諸藩ヘ回達書
下總、野鎮撫府古河驛へ被相開候處、今般宇都宮へ被相轉候事。

六月

鎮撫府

執

古河藩記

○六月七日同上回達書
御高札之儀、今般太政官ヨリ被相達候處、城下井宿驛等、于今揭示不相成向モ有之哉ニ相聞、不宜儀ニ付、急速揭示相成候様之事。

六月

鎮撫府

執

古河藩記

○六月九日同上回達書
強盜体之者於有之ハ、寢寄之藩々ヨリ聞付次第、自領、他領之無差別、速追捕相成候様之事。

六月

鎮撫府

執

古河藩記

○賊復タ木更津地方ニ嘯聚スルヲ以テ、佐倉藩兵ヲ發シテ之ヲ討ス、賊風ヲ聞テ先逃ル。

去月廿四日御届申上置候、上總國木更津邊へ賊徒出沒、民心ヲ惱候ニ付、相模守在所佐倉表ヨリ、同廿日增人數差出、翌廿一日夜、兼テ佐貫出張之人數ト登戸村ニテ合併、乗船ニテ同廿二日曉木更津討入之手筈ニ候處、風竝不宜、奈良輪村手前へ着船頃、汐時惡敷、ハシケ船ニテ追々上陸手間取、晝九時頃同所ニテ手分發足、敵地之様子探索之處、農民ヲ集メ防戰之手

當罷在候趣ニ付、口々ヨリ大小砲攻撃之處、應砲モ無之、町方之者共荷物等取片付、狼狽罷在候躰ニ付、放火之儀見合、一同進入、軒別探索爲仕候處、右廿二日朝四時頃、夫々俄ニ姿ヲ替逃去候旨申聞候ニ付、是迄屯集罷在候寺院並所々探索之處、大小砲其外器械等、別紙之通見出候ニ付取揚申候、其節怪敷躰之者四人生捕、及吟味候處、内壹人ハ元江戸無宿ニテ、當時根本竹次郎ト相名乗、賊徒ニ組シ、暴行致シ、剩去月十八日晚、佐貫城へ襲來、發砲或ハ廄屋敷等燒拂候旨及白狀候ニ付切捨申候、跡三人之義ハ子細モ無之者ニ付差免遣ス由、其後木更津滯陣罷在、近傍探索仕候處、賊徒潛伏之様子モ無之付、追佐貫城へ人數不殘進入、尙双方探索罷在候旨、在所表ヨリ申越候、此段御届申上候、以上。

六月四日

堀田相模守家來

野村彌五右衛門

堀田正倫家記

○別紙、器械目録ハ之ヲ略ス。

二十三日、豆相軍監三雲種方、小田原ヨリ至リ、大久保忠禮賊ニ黨セシ状ヲ大總督府ニ上申ス、督府乃チ參謀穗波經度ヲ以テ問罪使ト爲シ、下參謀河田景與ヲ其參謀ト爲シ、種方及ヒ長門、因幡、津、備前四藩兵ヲ率ヰテ小田原ニ赴カシム、尋テ忠禮ノ江戸邸ヲ沒シ、新見藩ヲシテ之ヲ保管セシム。

○江城日誌ニ云、五月廿二日、三雲爲一郎小田原ヨリ歸り、言上之次第、私共兩人軍監トシテ小田原へ被差向候處、去廿九日、水野出羽守へ御預之林昌之助其外脱走之賊徒、關門へ押寄候ニ付、中井範五郎儀ハ大久保加賀守人數引纏ヒ、箱根關門へ出張イタシ、私儀ハ小田原ニ残リ居候處、加賀守家來箱根ヨリ立歸リ、私ヘ申聞候ニハ、只今箱根關門ニテ戰爭之砌、中井範五郎並家來之者ハ、加賀守人數ニテ討取候間、此所ニ御滯留候テハ何

時之討取モ難計候間、早々當所立退候様申聞候ニ付、前後之始末何共不相分候得共、加賀守家來之申次第、非禮反逆之條、加賀守賊徒ニ與シ、軍監中井範五郎ヲ殺害ニ及ヒ候事無相違奉存候ニ付、拙者儀ハ直様當府へ歸申候、此段言上仕候事。

○

相州箱根邊賊徒蜂起ニ付、唯今ヨリ小田原表へ出張被仰付候條、速ニ鑿賊候様盡力可致旨

御沙汰候事。

五月廿二日津和野藩記

○本日達書四通

備前藩	大砲兵
因州藩	百人
伊州藩	百人 白砲二挺

右、相州箱根邊賊徒蜂起ニ付、唯今ヨリ小田原表へ出張被仰付候條、藩々申合、速ニ鑿賊候様盡力可致旨

御沙汰候事。

穗波三位

大久保加賀守問罪師爲總督出張被仰付候事。

五月江城日誌

穗波經度履歷書

○河田景與へ達書

小田原藩へ問罪之師被差向候ニ付、出張被仰付候事。河田景與

復古外記 東海道戰記 第二十九 明治元年五月二十三日

二二三

大久保加賀守

右ハ先般林昌之助以下之賊徒爲鎮壓被差遣候軍監中井範五郎ヲ殺害シ、三雲爲一郎ヲ追返シ候段、其罪顯然不可容、依之、問罪之師被差向候事。

五月江城日誌

○荒井關門警守ノ吉田藩兵へ達書

頃日林昌之助始脫走之賊徒、箱根山ニ據り、關門ヲ奪取、往返之諸人ヲ切害シ候段相聞候付、賊兵追伐並小田原藩問罪トシテ、今日ヨリ諸藩被差向、速ニ討伐被仰付候條、其旨爲心得相達置候事。

五月廿三日江城日誌

○東征紀略ニ云、五月二十三日、過日軍監中井範五郎、三雲爲一郎、小田原ヘ被差遣候處、大久保加賀守儀、賊徒ニ與シ、中井範五郎ヲ殺害候旨、三雲爲一郎歸陣言上、

右ニ付爲問罪使穗波三位殿發足被仰付、外ニ參謀河田佐久馬、軍監三雲爲一郎被遣、兵隊ハ因州、長州、備州、伊州也、

右ニ付爲問罪使穗波三位殿發足被仰付、外ニ參謀河田佐久馬、軍監三雲爲一郎被遣、兵隊ハ因州、長州、備州、伊州也、

○河田景與事蹟ニ云、五月二十三日、小田原藩へ間罪師、長州、備州、因州、伊州之四藩兵隊御差向ニ付、參謀トシテ出張。

○戊巳征戰紀略ニ云、五月廿三日、殘賊林昌之助等、小田原藩ト結合シ、箱根ノ嶮ニ據り、軍監ヲ殺害スルニ因テ、之ヲ討スルカ爲メ、我兵二中隊及ヒ因州、備前、伊州ノ兵ト、大磯驛ニ至ル。

○池田輝知家記ニ云、初メ上總請西ノ主林昌之助其他、遊擊隊等ノ賊徒、沼津ヲ脱シ、函嶺ニ據リ、屬官兵ヲ暗殺シ、人民ヲ惱亂シ、暴虐到ラサルナシ、加之、大久保加賀守不軌ヲ懷クノ聞アリ、是ヨリ先、我藩中井範五郎、佐土原藩三雲爲一郎、軍監命セラレ、豆、相兩州監察トンテ差向ラル、此時既ニ小田原ニ在リ、五月廿日、右ノ賊徒トモ函嶺關門ニ迫リ、小田原兵邀

戰防禦ノ趣報知有之、中井範五郎即夜出張候處、豈圖シ、小田原藩賊徒ニ煽動脅迫セラレ、竟ニ渠ニ與シ、右範五郎ヲ函嶺

中途ニ斬害ス、三雲爲一郎ハ小田原ニ留リ居候處、同藩ヨリ右範五郎ヲ討取候ニ付テハ、當地在留候ヘハ、如何様ノ舉動ニ可及モ難計、早々退去可然由、潛ニ通スル者アリ、是ニ於テ同所ヲ脱シ、海ニ航シ、江戸表ニ歸リ、大總督府へ其情狀具ニ及言上候處、直ニ問罪師差向ケラレ、我藩及長州、備州、伊州藩へ出兵ノ命アリ、廿三日破卯、我藩宮脇縫殿助、原註、銚士一隊、近藤類藏、原註、砲濱谷甚左衛門、本内金左衛門、建部半之丞、井上靜雄、原註、四山國隊、原註、一池田相模守人數トモ出發、四藩總轄トシテ下參謀河田左久馬、軍監三雲爲一郎出張。

○藤堂高潔家記ニ云、五月廿二日、箱根邊ヘ賊徒蜂起ニ付、小田原表へ進軍御沙汰ニ付、同廿三日東京發足進軍。

○岡山藩記ニ云、五月二十三日、小田原城段々御不審之義有之模様ニ付、御誅伐ニ相成候旨、内々 御沙汰有之候、就右繰出シ、戸塚宿へ進軍。

○小田原藩へ達書

大總督府御使 太田鈴太郎

主人大久保加賀守致反逆候ニ付、江戸屋敷被召上候、就テハ只今居殘人數可被處罪科之處、格別以御寛度、歸國被差免候ニ付、即刻引拂可申候。

五月二十七日東征總督記

○東征總督記ニ云、五月二十七日、大久保加賀守江戸屋敷居殘人數引拂申由ニ付、太田鈴太郎、池田藩同道ニテ、右屋敷ヘ罷越候事。

○池田政保家記ニ云、五月二十七日、大久保加賀反逆、同人屋鋪被召上、居殘家來寛大ノ御旨趣ニテ、兩刀御取揚ヶ歸國被仰付、右ニ付御達有之、芝屋敷ヘ兵隊差向、土藏等夫々封印致シ、關備前守殿家來ヘ引渡シ、兵隊引揚申候。

○關長克家記ニ云、五月二十七日、於江戸、夜酉ノ下刻頃、大總督府御使番ヨリ、御用之儀有之候間、大久保加賀上屋敷迄急速出方可仕旨御達ニ付、即刻今村續罷出候處、御使番太田鈴太郎殿ヨリ、御口達左之通、

大久保加賀事、對シ 朝廷叛逆之色相顯レ候ニ付、追討之御人數御差向相成、屋敷々々被召上、居残リ候家來之者共ハ、寛大之御處置ヲ以テ、在所表へ立退之儀申達、尤帶刀等ハ取上ケ爲引拂候、右ニ付當屋敷全明屋鋪相成候ニ付、今日ヨリ近方之譯ヲ以御預ケ被仰付候間、早々人數差出受取候様被仰渡候ニ付、奉畏候段御受仕、後刻人數差出候旨申上引取。

右御達ニ付、戊ノ下刻頃、今村續人數召連、御預屋敷へ罷出、御使番太田鉢太郎殿ヨリ屋敷御引渡相成、其節裏門、通用門鑰二ツ御渡相成、夫ヨリ御人數御引揚ニ相成候事。

但、土藏々々へ御封印付相成候間、右御封印等不審之儀モ有之候ハ、早々御届可申上旨御達有之候。

○神奈川裁判所總督東久世通禧、書ヲ大總督府ニ致シテ、横濱警守ノ紀伊藩兵、怯惰其任ニ堪ヘサルヲ以テ、速ニ精兵ヲ發シテ之ニ代ラシメント請フ、督府乃チ大屋某、斧二郎、族籍未詳 安永弘行、又吉、肥前藩士ヲ以テ軍監卜爲シ、往テ紀伊藩兵ヲ監セシム。

一翰呈上仕候、梅霖難霽、日々漠然候、彌御清適珍重奉存候、然ハ横濱表爲警衛、紀州藩二百人、先般ヨリ交替ニ相成候處、誠ニ以弱兵ニテ、處々ニ關門帶刀人通行指留候威力無之、兎角印鑑ナク帶刀人關門内へ入込、既ニ先達テ土州藩士佛蘭西人ト喧嘩ニ及、幸ニ怪我無之相濟候得共、殺害等有之候テハ、亦々大變ニ立至リ可申、肥前精兵御用立候替リニ弱兵ニテハ横濱表鎮撫威力無之甚以困入候、外國交際ハ當節誠ニ御急務之儀故、右取締之爲ニ候得ハ、何卒權力威勢有之人數貳百人、急々御差シ越シ可被下候、紀州藩ハ右到着次第歸府可申付候、仍此段申入度、早々御取計可被成下候、以上。

五月廿二日

西四辻大夫 盈督東征總記

○安永弘行ヘ達書

横濱軍監被仰付候事。

通

禧

鎮臺府

安永弘行履歴書

○本條、履歴書日ヲ佚ス、今下條ノ書束ニ據リ、定メテ本日ト爲ス、又大屋某ノ達書ハ見ル所ナシ、蓋シ弘行ト同一ナリシナラン。

○

以手紙申入候、然ハ横濱出張之紀州藩、意弱兵ニテ諸關門取締モ難相成段承知致シ候、就テハ兵隊軍監トシテ、大屋斧二郎、安永又吉差遣候、且官軍諸藩之儀ハ、兼テ無印鑑禁シ有之候處、尙又改テ達シ置候。略

五月廿三日

神奈川裁判所 判事御中督東征總記

○附錄一條

以手紙申入候、然ハ横濱へ出張之兵隊ハ、太政官御定通り、金穀萬端御仕向相成候様御取計可有之ニ付、其段申達候、已上。

五月

神奈川裁判所 判事御中督東征總記

○本條日ヲ佚ス。

○大總督府、稻田邦植ノ兵ノ城中警守ヲ罷メ、吉田、岩村二藩兵ヲ以テ之ニ代ヘ、邦植ノ兵ヲ遣シテ、關口水道町鑄造場ノ銃器ヲ收ム、又兇徒再ヒ八幡近傍ヲ劫掠スルヲ以テ、邦植ノ兵ヲ發シテ之ヲ鎮撫シ、肥前藩軍艦孟春ヲ遣シテ、仙臺、盛岡二藩ノ汽船ノ浦賀港ニ在ル者ヲ收ム。

右、中之口御門警衛被 免候事。

五月

吉田藩 二三人ツ、

右、中之口御門警衛被 仰付候事。

五月廿三日以上東征 總督記

稻田藩

御城内中仕切警衛被 免候事。

五月廿四日

大給能登守

右、御城内中仕切警衛被 仰付候事。

五月廿四日以上東征 總督記

○稻田邦植從軍事蹟ニ云、五月廿三日、關口水道町鑄造場ニ器械埋有之趣ニ付、爲取調人數指出、度々應接ニ相及、左之通器械爲差出申候。

一小銃入長持 六十四棹
一大砲彈藥車臺 一

一鑄形竝小道具入箱 十八
一大砲引繩 三
一胴亂竝負革入長持 五十一掉

大給能登守
一手

一ツリ革 五箱
右器械方御役場ヘ引渡候事。

又云、五月廿三日、不總八幡邊賊徒暴行之趣ニ付、右取締トシテ出張被仰付、中山勝、人數十六人召連罷越、六月四日罷歸候。

○中卒田倉之助事蹟ニ云、五月、大總督府ヨリ、相州浦賀碇泊ノ仙臺船飛龍丸、孟春艦ヲ以テ取押候様奉命、同廿三日同所乘廻候處、不計左ノ船々碇泊ニ付、何レモ船長ヲ呼出、說諭ヲ以乗組其儘取揚申候。

仙臺船 飛龍丸 同 宮城丸 南部船 飛隼丸

○大總督府、諸軍ニ令シテ、私ニ横濱ニ赴クヲ禁ス。

○諸軍ヘ達書

官軍之輩往々無印鑑ニテ横濱ヘ往返之輩有之由相聞ヘ候、御多端之折柄、外國人ヘ行違之筋出來候テハ、御手障リニモ相成候間、當分之内、官軍之輩横濱行堅ク被禁候之事。

但、無據用向有之輩ハ、隊長ヨリ願出之上、印鑑ヲ以通行可致事。

五月廿三日津和野藩 大久保忠告筆記

○甲斐鎮撫府、沼津、高遠二藩兵ヲ箱根ニ發遣シ、沼津軍監和田勇ノ指揮ヲ奉シテ、賊徒ヲ誅夷セシメ、中津、高島二藩兵ヲシテ甲府城及ヒ原村ヲ警守セシム、因テ沼津藩重臣ヲ召シテ之ヲ獎勵ス、明日、更ニ參謀助役伏谷惇ニ命シ、松代、濱松二藩兵ヲ率ヰテ、箱根ニ赴カシメ、沼津藩及ヒ江川英武、久世某^{三四郎}ヲシテ、其糧餉丁馬ヲ辨給セシム、尋テ八王寺驛警守ノ掛川藩兵ヲ戒メテ、其守備ヲ嚴ニセシメ、小島藩ニ令シテ、賊如シ管内ニ入ラハ、傍近舊旗下士ヲ糾合

シテ、之ヲ剿除セシム。

右兩藩、相州箱根邊屯集之賊徒爲追討致差出候間、申談、速ニ攻擊、可抽忠勤旨、副總督 御沙汰候事。但、兼テ沼津表へ差出シ致置候監軍和田藤之助差圖可受候事。

五月廿三日

東海道副總督府 參 謀
忠敬、内藤頼直家記
甲斐鎮撫日誌、水野

○

沼津藩 丸山 寛太郎
服部 辨内

遊擊隊竝ニ林昌之助等之賊徒舉動之振撼ニ於テハ、其藩是迄不一度、二度三度失體、不都合之至、屹度御糺モ可有之ニ候得共、先穩便ニ被差置候、是迄甚御因循ニ相聞候處、御兩人儀ハ正義憤振之旨相聞ニ付、於此度ハ屹度舉藩憤振シテ、勤王之實行相立、速ニ賊徒討滅可有之、若因循ニ被相流候テハ、其藩社稷之爲不宜、屹度思召モ可有之ニ付、御勵憤盡力有之度、此段内々申入候。

五月廿三日

東海道 參 謀
甲斐鎮撫日誌
軍 監

○内藤頼直家記ニ云、右首條ノ達ニ付、今晩巡邏竝見張ニ不致候間、見張ハ濱松藩へ引渡候様御達有之候、同廿四日甲府出立、山崎迄罷越候處、參謀附屬佐藤直次郎罷越、左之通、

廿五日立

一小隊 松代藩 二小隊 濱松藩

○右ヘ萬端申談、沼津藩へハ申談ニ不及候旨。

伏谷 又左衛門殿 和田藤之助殿 松下加兵衛殿

○

中津藩

東海道副總督 參 謀

甲斐鎮撫日誌

○中津藩記ニ云、右御達ニ付、上小田原出張、一小隊原へ繰出ス、上小田原へハ甲府表一小隊繰出候、同日中津藩應援、高島藩へ被仰付候旨、同藩ヨリ申聞候。

○高島藩記ニ云、五月廿三日、甲府城外郭愛宕町御門ヨリ、東南西青沼町御門迄御警衛相勤候様、尤是迄中津藩へモ被仰付居候間、兩藩申談、應援嚴重巡邏相勤候様、御演達ヲ以被仰渡候。

○

一小隊 各通 松代藩

三小隊 濱松藩

其藩一小隊、相州箱根邊屯集之賊徒遊擊隊、竝ニ林昌之助等追討被仰付候條、出張之藩々戮力シ、速ニ討滅、可抽忠勤旨、副總督 御沙汰候事。

五月二十四日

東海道副總督府 參

甲斐鎮撫日誌
眞田幸民家記

○濱松藩ノ達書ハ、一小隊ヲ三小隊ニ作ル。

復古外記 東海道戰記 第二十九 明治元年五月二十三日

○柳原前光輒誌ニ云、五月廿五日、林昌之助黨猖獗ニ付、參謀助役伏谷又左衛門、沼津二小隊、高遠、真田等一小隊宛、濱松二小隊半等引率、誅滅申付、今日出陣。

○真田幸民家記ニ云、五月廿五日、於甲府、昨廿四日相州宮根邊之賊徒追討被仰渡候ニ付、則小隊司令士寺内刑部、人數引連、副總督府御本營へ罷出、拜謁之上御口達之通、

相州宮根邊屯集之賊徒林昌之助等追討トシテ出張申付候ニ付テハ、參謀伏谷又左衛門差遣候間、右指揮ヲ受、精々盡力候様、

右ニ付、即日出發、同國敵澤ヨリ乗船、同廿七日駿州沼津城下到着。

○井上正直家記ニ云、頃日來、總、房之脫徒沼津屯集、謹慎之者共再脱、幽嶺へ登リ、猖獗之間有之、五月二十四日弊藩兵隊之内、三小隊迅速出張、誅伐候様被命之、伏谷又左衛門兵隊ヲ引率シ、翌二十五日甲府ヲ發シ、箱根ニ赴ク、在府之兵隊御中軍是迄之通。

○八王寺警守掛川藩兵へ達書

沼津表脫走之兇賊ヨリ、此許千人隊之内へ一味ヲ乞候哉モ難計事ニ付、見張番巡邏彌以嚴重、怪敷姿之者ハ直ニ掲捕、糺明可有之、左様御示候事。

五月廿六日

掛川御藩柴山

松代藩

佐土原藩

濱松藩

安田源之丞印

○

右、今般宮根屯集之賊徒追討被仰付之出兵ニ付、兵食、人馬繼立方無支様可被取計候事。

辰五月廿七日

東海道副總督府

參

謀

沼津藩甲斐鑑

○

江川太郎左衛門

右、幽根山ヘ諸藩出張ニ付、沼津藩久世三四郎家來申談、兵食、人馬、賄世話方可相心得候事。甲斐鑑 撫日誌

○本條達書ノ日ヲ佚ス、按スルニ、久世某モ亦英武ト同一ノ達書アリシナラン、今見ル所ナシ。

○

秋山主水 石川又四郎 横原越中守 長崎熊之丞 細井安五郎

兼テ御達ニ相成候通、方今相州邊不穩之形勢ニ付、萬一其藩近方ヘ賊徒罷越候ハ、右之面々其藩ヨリ出兵申達、協力罄殺可有之旨、副總督被仰出候事。

五月晦日

東海道副總督府

謀

小島藩甲斐鑑

二十四日、輔相三條實美ノ監察使ヲ罷メテ、關八州鎮將ヲ兼ネ、三等陸軍將烏丸光德宰相、時ニ在京師ニ在リ、

ヲ以テ江戸府知事ト爲シ、鎮臺補大原俊實、大總督府參謀西四辻公業ニ關八州監察使ヲ兼ネシム、公業之ヲ辭ス。

輔相兼關八州鎮將被仰出候事。

五月二十四日職務追退錄

○

復古外記 東海道戰記 第二十九 明治元年五月二十四日

二二三

江戸府知事被仰出候事。

五月廿四日職務進退錄 烏丸光德事蹟

各通 大原少將 西四辻少將

關八州監察使被仰出候事。

五月二十四日職務進退錄、大原重實、西四辻公業事蹟

○公業履歴書ニ云、五月二十四日、依願監察使兼勤被免候事。

○徳川家達ヲ駿河ニ封シ、遠江、陸奥ノ地ヲ併セテ、七拾萬石ヲ賜フ、尋テ參河ヲ以テ陸奥ニ代フ、又一橋茂榮、田安慶頼ヲ藩屏ニ列シ、徳川氏臣隸ノ官位ヲ停ム。

徳川龜之助

駿河國府中之城主ニ被仰付、領知高七十萬石下賜候旨被仰出候事。

但、駿河國一圓、其餘ハ遠江、陸奥兩國ニ於テ下賜候事。

五月

今般、家名相續被仰出候ニ付、爲御禮上京可致候事。

○

徳川龜之助

五月以上江城日誌

○

今般、駿河國府中城主被仰付、冥加至極難有仕合奉存候、既ニ奉命仕候上ハ、御當地荏苒仕候モ恐入候次第ニ付、可成丈手繩仕、彼地ヘ罷越申候、就テハ府中城御請取方委細之手續等ハ、幹事役並勘定奉行之者差出可申候間、參謀衆ヨリ御差圖可被下置候様奉願候、以上。

五月

後見 徳川龜之助

松平確堂

靜岡藩記

○按スルニ、六月十三日ニ至リ、大總督府駿府城代本多正訥ニ命シテ、駿府城ヲ家達ニ交付セシム、參看スヘシ、又家達、八月九日ヲ以テ封ニ就ク。

○九月四日達書

徳川龜之助

其方領知七十萬石、駿河國一圓、其餘於遠江、陸奥兩國下賜候旨被仰出置候處、陸奥國ハ目今未至平定候ニ付、今般改テ別紙之通、駿河國一圓、其餘遠江、參河兩國之内ニ於テ、都合七十萬石下賜候旨被仰出候事。

辰九月

駿河、遠江國之内御渡相成候高、

高二十三萬六千三百六十石餘 是ハ先達テ御渡相濟候分

同十六萬四千五百七十八石餘 是ハ此度高附目錄御渡相成候分

合高四十萬九百三十八石餘

此度御渡可相成取調高

同十七萬九千五百二十一石餘

同三十五十七石餘

合高十八萬二千五百七十八石餘

同二萬九千百十四石餘

同八萬七千三百六十七石餘

合高十一萬六千四百八十二石餘

總高合七十萬石

以上。鎮將府日誌

○

自今藩屏之列ニ被加候旨被 仰出候事。

○ 五月

各通 一橋 大納言
田安中納言

遠江國 諸侯領
駿河國 久能山神領
同國 旗下知行料

三河國

御

旗

下

知

行

今般、藩屏之列ニ被加候旨付、爲 御禮上京可致候事。

五 月以上。江城日誌、德川茂榮、德川慶賴家記

○按スルニ、家達以下三人、皆故アリテ入観ヲ果サス、又八月十一日ニ至リ、鎮將府、茂榮、慶賴ノ新ニ藩屏ニ列シ 兵備充實セサルヲ以テ、命シテ宗家ノ舊臣ヲ收養セシム、事ハ本記ニ詳ナリ。

○

徳川家臣之輩、自今官位之儀被差止候事。

五 月江城日誌

○附 六月二十三日申請書

今般、私儀藩屏列ニ被 仰付候ニ付テハ、是迄之住居ニテハ何分内外差支之儀モ御座候ニ付、追テ城地被下置候迄、酒井若狭守儀由緒モ御座候間、御當地同人牛込屋鋪借請、家族一同住居仕度奉存候、依之奉伺候、以上。

○ 六月

田安中納言

○二十五日批紙

書面伺之通被 仰付候事。賴家記

○大總督府、肥後藩兵ノ白河口發遣ヲ罷メ、命シテ和泉橋、筋違門、昌平橋ヲ警守セシメ、津藩兵ノ和泉橋、筋違門、昌平橋警守ヲ罷メ、之ヲ白河口ニ發遣シ、飯田藩兵ニ銀座ヲ、加納藩兵ニ上野山内ヲ守ラシム、津藩之ヲ辭ス。

和泉橋、筋違門、昌平橋警衛被 仰付候事。

五 月廿四日 東征總督記

復古外記 東海道戰記 第二十九 明治元年五月二十四日

肥 後 藩

二三七

○細川護久家記ニ云、五月廿四日、白川出張免セラレ、府下和泉橋、筋達、昌平橋警衛命セラル。

○

筋達御門、昌平橋警衛被 免候事。

五 月 廿 四 日

堀親廣
東征總記

伊 州 藩

堀

美濃守

一手

右、銀座警衛被 仰付候事。

五 月 廿 四 日

堀親廣
家記

永井肥前寺 一手

右、明廿五日ヨリ上野山内取締警衛被 仰付候條、早朝ヨリ出張可致候事、
但、市街ヨリ拾ヒ物差出次第可受取事。江城日誌

○

今日御渡ニ相成候御達章之趣、謹テ奉敬承候處、兼テ被 仰付候和泉橋、筋達御門、昌平橋等之御警衛 御免被成下、難有奉存候、然ル處、白川口爲應援、兵隊差出候様御達章之趣、是又難有、不整之兵隊右迄ニ御召仕被成下候段ハ、寡君和泉守上ニ置候テモ、嘸早難有可奉存ト、爰許於私共テモ如何計難有奉存候、就テハ速ニ御請モ可申上苦ニ御座候處、御承知モ被成下候通、初發道中名古屋表ニテ、先鋒御總督御兩卿様御守衛被仰付、江戸表迄御供申上、其後モ暫ク御警衛申上候内、結城邊騒擾之義相聞、右應援半隊出張被 仰付、關宿迄罷越候處、同所鎮撫方被 仰付、暫ク滯在之處、殘リ半隊モ御警衛 御

免ニテ、同所へ連合可仕 御沙汰ニ付、千住邊迄罷出候處、木更津表之賊兵猖獗、追々市川邊迄モ相迫リ候付、御取留ニ相成、連合ニ至不申候折柄、終ニ官軍へ抗衛仕御討伐ニ相成申候、右之趣關宿表ヘモ相聞候付、元同隊之義、殊ニ難戰之趣ニモ相聞候付、直様救應之義相願、迅速旋軍相供ニ賊兵追討、兩總、野並房州迄モ分隊等仕、夫々相務候事ニ御座候、就中半隊ハ舊臘ヨリ京師へ相詰、其後山崎表へ相廻リ、當正月三日以來之戰爭ニモ相勦、別テ疲勞之兵隊ニ付、過日相願減兵之義御聞届ニモ相成候事ニ付、速ニ歸國可仕之處、房州へ相廻リ候兵隊モ歸着相後候故、餘リ御手薄ニ相成候テハ奉恐入、旁暫ク相見合居候折柄、前三ヶ所之御固被 仰付、關宿表爲鎮撫相殘置候兵隊モ未タ其儘相務居候義、加之長々之霖雨ニテ、今ニ其儘罷在候得共、前條ニモ申上候通、最早歸國願濟ミ、兵隊不日罷登候義御届申上度ト存居候折柄、尙又橋本卿御警衛モ被仰付難有相勤候處、水野日向竝關宿藩士杉山對軒モ御預ケ被成下候故、夫々精誠ハ相務度心底ハ申上候迄モ無之、必死ト盡力仕候得共、元來弊藩之兵隊ハ、過半農兵ヨリ取立有之候故、出兵時節ニ寄、甚不都合之義有之、是迄凡百日程ニテ交代爲致濟來候故、先日來ハ毎々下方ヨリ歎願書等差出候得共、今暫ク勉勵仕候様重々申諭、今日迄ハ相務來候、既ニ國表發途ニ先立、兵政改革之義布告仕候得共、未タ相整不申候内、關東 御親征ニ付、國力相應之兵隊差出候様御沙汰ニ付、元ヨリ寡君上ニハ聊ニテモ勤王之道ニ相當リ候義ハ相盡度存心ニ有之候故、此度之兵隊ハ國力不相應ニハ御座候得共、何卒トニ付、則精誠勉強之義申諭爲相務候事ニ御座候、何分下輩之者之義、道義而已ニ心懸候譯ニモ參兼候折柄、軍用金等ニモ必至ト差迫リ、殊ニ數度之戰爭ニテ彈薬迄モ手薄ニ相成、頭々之上ニテハ此上何卒鞠窮盡力仕赤心ニテ、自鞭勵之存心ニハ重々有之候得共、何ヲ申モ配下輩之者ニ於候テハ、左様ニモ參兼、殆ト困窮焦苦之至ニ奉存候、右之情實申上候モ山海奉恐入候得トモ、彼は包藏仕候藏力テ下情上達不仕候テハ、折角 王政御一新、飽迄モ御垂憐之御趣意ニモ相背候テハ、尙以奉恐入候事故、不憚忌諱奉歎願候間、何卒前條之苦情御斟取、今般之出張 御赦免被成下候ハ、兵隊一統實ニ蘇生トモ可申、

頭々ニ於テモ自後之鞭策ニ易行如何計難有可奉存候、右迄奉歎願候得共、是非出兵不仕候テハ難相叶義ニ御座候ハ、既ニ國元ヘモ交代用意之儀ハ申遣有之、其砌橋本卿ヘハ内願モ申上置有之候事故、右交代之上出兵被仰付候ハ、精誠ハ御請可申上候ト奉存候、吳々モ過當之歎願恐悚不過之奉存候得共、不惡御憐評被成下候ハ、萬々難有奉存候、以上。

辰五月

伊州藩總帥

藤堂仁右衛門

藤堂高潔家記

○本條、批紙ヲ佚ス、蓋シ之ヲ聽セシナリ、又白河口發遣ノ達書ハ見ル所ナシ。

○松平賴位、書ヲ大總督府ニ上リテ、勤王貳ナキヲ陳ス。

昨年以來、王政御一新追々被仰出之御事件、謹テ伏承奉畏候、扱弊藩之儀ハ、兼テ御承知被下置候通、去ル甲子之年宗家國難之砌、微臣賴位禁錮、愚息大炊頭事、於水戸表ニ不慮自盡至リ、既ニ領知沒收セラレ候之處、今茲戊辰仲春、辱モ從天朝領地復舊被仰出、感戴至極無此上、難有仕合奉存候、依テ速上京仕、奉報天恩之萬分一度志願ニ御座候得共、于今萬事不整、譖代之家臣近ハ甲子之厄後、別テ人少相成、旁暫時不心成遷罷在候次第ニテ、聊報效猶豫仕候心底ニハ、乍恐天地神明ニ相誓毛頭無御座候、依之、片時モ早に上京報效仕度、日夜家來扶助方始、武器兵馬之手當、領民撫恤向等、精々取懸リ、且追々被仰出候、朝命等、家臣並領分中ヘモ夫々說得仕、大義之方嚮ヲ知ラシメ、不日御仁慈之御德化ニ風靡爲仕置、萬一非常之節出兵救援等之手當指支無之様仕度奉存候之外、異念無御座候、將又去月中弊藩家來上總國大多喜御本營へ被召出、御達之趣逐一奉歎服候、微軀之小臣乍恐散慮遵奉歸順之赤心、前顯之次第具狀、謹テ御請奉申上候、宜御執奏奉願候、誠惶誠恐謹言。

慶應四年辰五日廿四日

松平主税頭

賴位花押

大總督府下參謀方 御役人衆中松平賴

○按スルニ、閏四月二十日、先鋒副總督、宍戸藩ノ老臣ヲ大多喜ニ召シテ、其向背ヲ問フ吏ハ、房總戰記ニ詳ナリ。

復古外記 東海道戰記 第二十九 終

二十一年七月九日

掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十五日

二三二

東海道戰記 第三十

自明治元年五月二十五日至同月二十五日

五月二十五日、大總督府下參謀寺島直方ヲ京師ニ遣シテ、江戸地方平定ノ狀ヲ奏シ、且更ニ薩、長兵ヲ發遣セんコトヲ請フ。

○寺島秋介履歴書ニ云、五月廿五日口達、關東一先平定ニ付、爲御届上京可致事。

同日口達、

奥羽口出張トシテ、薩、長兩藩兵二大隊、至急繰出シ候様、上京ノ上可申合旨被仰付候事。

監察使
大總督府

○大總督府、木呂子某_{善兵衛、館林藩士}ヲ以テ、徵士軍監補ト爲ス。

徵士軍監補被仰付候事。

五月江城日誌

○大總督府、舊高家交代寄合以下ノ江戸ニ在リテ歸順セシ者ヲ朝臣ニ列シ、其祿ヲ復ス。

○三日達書

旗本歸順之輩、自今朝臣ニ被仰付候間、此段相達候事。

五月江城日誌

○

右之通被仰出候間、此旨可申入旨、大總督宮被命候、仍申入候也。

大總督府 參

五月三日

橋本少將殿

追テ、各藩ヘモ可被達候事。東海道先鋒記

○先鋒記ニ云、五月三日、從大總督宮御達章如右、右御達章之趣、先鋒之諸隊ヘ被仰達候事。

○

旗下歸順之輩、自今朝臣被仰付候ニ付、是迄歸順之者、姓名取調可被差出候事。

大總督府

五月三日

橋本少將殿

大原侍從殿 岩倉大夫殿 岩倉八千九殿

東海道先鋒記

○姓名簿ハ之ヲ佚ス。

○旗下歸順之輩、自今朝臣ニ被仰付候趣被仰渡、承知仕候以上。

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十五日

二三三

田安中納言

五月三日

慶賴判

德川慶賴家記

○慶賴ノ達書ハ之ヲ佚ス。

○在府高家へ達書

在府高家之輩、明廿五日辰刻登 营可致事。

五月廿四

日德川慶

○本日達書

品川侍從 今川侍從 前田侍從 同 愿十郎 六角主稅

名代弟 六角由太郎

右、自今 朝臣ニ被 仰出候事。

五月江城 日誌

○本條、日誌二十七日ニ收ム、今慶賴家記ニ從フ。

○東征紀略ニ云、五月廿五日、高家自今 朝臣被 仰付。

○

高千石

高千石

高千四百石

高五千石

高六百石

今川侍從 前田侍從 前田愿十郎 大保保與七郎 坪内嘉兵衛

高三百石 高二千石 高六千六百七十石餘 高三千石 高千百三十石

品川侍從 六角主稅 岡田鑒之助 勝田鋼吉 座光寺盈太郎

右、本祿如舊下賜候事。

五月三十

日江城

○原文祿額ヲ載セス、今之ヲ補フ、按スルニ、本件隨テ歸順スレハ、隨テ宣達シ、其事數月ニ彌ル、今鎮臺日誌、鎮將府日

誌等ニ散見スルモノヲ采輯シテ、其姓名ヲ下ニ掲ク、又二十七日、徳川氏家臣存錄申請ノ事アリ、參看スヘシ。

高六千五百石	曾我主水	高五千五百石	酒井采女
高五千六石九斗	久世三四郎	高五千石	藤堂秉之丞
高五千石	大久保兵庫	高五千石	内藤駒次郎
高五千石	水野式部	高四千五百石	菅谷主税介
高四千石	久永相模守	高四千石	松平采女
高三千五百石	石川又四郎	高三千七百石	杉浦桂之進
高三千石	本多駒之助	高三千石	松下嘉兵衛
高二千石	有馬鉄三郎	高二千石	間部内膳正
高二千石	織田織之助	高二千石	戸田中務
高一千八百石	井戸金平	高一千五百石	織田主水
高一千五百石	安藤左京	高一千五百石	諫訪萬吉郎
高一千五百石	加藤彌二郎	高一千五百石	永田勝左衛門
高一千五百石	上杉源四郎	高一千五百石	上杉源四郎

高千四百二十五石	吉良源六郎	高千三百石	加藤右近
高千二百石	三井萬三郎	高千百石	玉虫八右衛門
高千石	由良侍從	高千石	進佐渡守
高千石	諭訪甲斐守	高千石	本多吉彌
高千石	大久保鉢三郎	高六百石	大澤采女助
高五百石	武田侍從	高五百石	有馬次郎
高五百石	細井安次郎	高五百石	兒島孫七郎
高三百石	長崎熊之丞	高三百石	井出鉢次郎
高百二十石	新田滿次郎	高三百俵	布施十兵衛
高七十俵	安藤傳藏		

○大總督府、龜山藩兵ノ虎之門警守ヲ罷メ、岡田善長ノ兵ヲ以テ之ニ代ヘ、善長ノ和泉橋警守ヲ罷ム。

右、虎之門警衛被免候事。

五月廿五日

龜山藩一手

和泉橋警衛被免、虎之門警衛被仰付候事。

○

岡田鑿之助一手

五月廿五日以上東征

○問罪使總督穗波經度、出テ横濱ニ次シ、其參謀河田景與ヲシテ、長門、因幡、津、備前四藩兵ヲ率キテ小田原ニ赴カシム、大久保忠禮、城及ヒ兵器ヲ致シ、寺院ニ屏居シテ罪ヲ待ツ、景與乃チ其罪狀ヲ詰問ス、忠禮答辨書ヲ上リ、且賊ヲ討シテ以テ自效セント請フ、之ヲ聽ス、是日、大總督府、重ネテ下參謀渡邊清ヲシテ、津、大村、佐土原三藩兵ヲ率キテ、海路小田原ニ赴カシム、既ニシテ忠禮伏罪ノ報到ル、因テ其行ヲ止ム。

○東征總督記ニ云、五月廿四日、今朝穗波卿横濱ヘ御出ニ付、太田鉢太郎付添出張之事。

○二十三日大久保忠禮へ達書二通

大久保加賀守

軍監中井範五郎ヲ殺害ニ及ヒ候始末、並軍監三雲爲一郎ヲ追返シ、非禮之所置如何之心得ニ有之候哉、先般林昌之助以下脱走之節、對朝廷不埒之次第、屹度御沙汰ニ可被及之處、寛大之御趣意ヲ以、其分ニ被差置候、就テハ此度翻然可抽忠勤之處、無其儀如何之事ニ候哉、屹度及詰問候間、明ニ返答可有之事。

五月

來ル廿五日午時、於大磯宿問罪之返答ニ可及事。

問罪使 穂波三位 參謀 河田左久馬 軍監 三雲爲一郎
問罪師 因州兵隊 長州兵隊 備前兵隊 伊州兵隊

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十五日

二三七

右、今廿三日發足ニテ、廿五日午時大磯着陣之事。江城日誌

大久保忠良家記

○私御問罪之師、御總督穗波三位殿御出張被仰付候段、御沙汰之趣恐入奉畏候、以上。

五月廿五日

大久保加賀守

大久保忠良家記

○忠禮答辨書

一御軍監中井範五郎殿ヲ及殺害候始末御尋之事、

此儀、去月廿日、於箱根遊擊隊脱走之者ト及一戰候後、翌廿一日朝、右脱走之者範五郎殿ト行逢、致殺害候段承知仕候ニ付、種々致穿鑿候得共、名前不相知、然ル處右ハ遊擊隊之内、富樺記一郎ト申者之從僕何某、字權現坂ト申處ニテ致殺害候儀ニ有之段、兼テ登筋ヘ差出置候家來之内承込、一昨廿九日引取申候、

一御軍監三雲爲一郎殿ヲ追返シ、非禮之處置如何之心得ニ候哉ト、御尋之事、

此儀、中井範五郎殿權現坂ニ於テ被遇殺害候趣相聞候ニ付テハ、爲一郎殿ニモ又候意外之儀御座候テハ、以之外之事ニ付、家來共之計ヒニテ、用心被致候様内通ニ及候ニ付テハ、海船差出吳候様被相望候間、其筋ヘ申付、爲差出候儀ニテ、從此方往返等致候儀ニテハ決シテ無御座候、尤右騒擾中、何者カ致發砲候者有之候ニ付、嚴敷取調申付置候處、渡邊了叟儀及指圖候趣相聞、誠以奉恐入候。

一先般林昌之助以下脱走之節、奉對朝廷不持之次第、急度御沙汰ニ可被及候處、寛大之御趣意ヲ以其分ニ被差置候、就テハ此度翻然可抽忠勤候處、無其儀如何之事ニ御座候哉、御尋之事、

此儀、去廿日遊擊隊脱走之者共、沼津表ヨリ箱根路ヘ向居候間、御軍監之御沙汰ヲ以、早速人數差出シ、廿日夕刻ヨリ夜ニ掛及戰鬪、双方ヘモ手負餘程有之候得共、脱走共ハ從來主家ヘ對シ、名義ヲ相立度心組ニ相見ヘ候者有之、右ヲ討

家記

保忠良

取候ハ、兎角難忍様心取違致居候者モ有之候處ヨリ、人心一途ニ居難ク、兵勢振兼、且小田原表ニモ同様之者有之哉ニテ、兩地之士氣何分纏り兼、重役共モ彼是苦心罷在候折柄、了叟儀差急キ箱根出張之隊長吉野大炊介ヘ一時之策略ヲ以姑ク和解之儀申遣、同人儀ハ私申付候儀ト相心得、一旦致和議候處、遊擊隊之者共其機ニ乘シ、追々關内へ入込、城下ヘ罷越候ニ付、心ナラス三四日逗留爲致候様相成、奉恐入候、尤私儀ハ一旦遂和談候次第等、後ニ承リ驚入申候、是全了叟不埒之取計ヨリ事發候儀ニテ、畢竟私儀兼々申付方不行届、重役共迄俱々偏ニ奉恐入候、此段申上候、以上。久

家記

本條上申ノ日ヲ佚ス、書中去月及ヒ一昨二十九日等ノ語アルヲ見レハ、六月朔日ノ上申ニ係ルニ似タリ。

○池田輝知家記ニ云、五月廿四日、相州大磯驛ニ進ム、是ニ於テ小田原藩重臣禮服ニテ同驛ニ出迎、參謀本陣ニ推參、謝罪歎願ニ及候ヘトモ、一々條理不相立ニ付、直チニ追返シ、尙攻取ノ策ヲ定メ、各藩道ヲ分チ、我兵ハ官道ヨリシ、酒匂川ヲ濟リ、城下ニ進入ス、同藩ノ者精服路傍ニ相迎、官軍即時城内ヘ繰込候處、加賀守ハ既ニ退城シ、菩提寺ヘ謹慎ニ付、參謀軍監右加賀守ヲ呼ヒ、一應糾問ノ上、改メテ菩提寺ヘ謹慎申渡シ、尙重臣ヲ詰問シ、同城銃砲器械、四藩立會點檢ノ上、悉ク之ヲ受取ル。

○岡山藩記ニ云、五月中旬過、相州箱根邊賊徒蜂起ニ付、小田原へ出張被仰付、直ニ兵隊繰出シ、同二十五日大磯驛ヘ進軍、事情及探索、同二十六日拂曉、酒匂川上流飯泉之渡ヘ相廻、斥候隊ヲ以城下ヘ差迫リ候處、士庶狼狽ノ體ニ相見ヘ候ニ付、外郭迄進入致シ候處、重役トモ上下着用、或ハ脱刀ニテ罷出、哀訴歎願仕、右箱根路之賊徒ハ當一手ヲ以討取、實効相立候間、暫時搏掛之義見合吳候様頼談ニ付、彼是應接之内、伊州藩相見ヘ、引續キ因、長兩藩之隊長等、續々繰込、諸藩諸共城内點檢、城上ニテ暫時休憩致シ候内、小田原藩討賊之兵差出候。

○大久保忠良家記ニ云、五月廿一日、林昌之助以下遊擊隊脱走之賊徒、箱根關門近邊へ襲來之節、速ニ出兵進撃爲仕候處、兵士之内賊徒之情實ヲ斟酌致シ候者有之、兵隊中彼是議論相發、兵勢不進、隊長共甚心痛仕候段、小田原表ヘ罷在候重臣ヘ

申達候處、其節城中へ居合候重臣筆頭渡邊了叟、岩瀬大江進兩人之裁決ニテ、外ニ申談モ無之、一時策略ヲ以致和解候様差圖仕候ヨリ、賊徒ハ其機會ニ乘シ、城下へ闖入致シ、闖藩危疑ヲ懷キ、方向取失、不束之事ニ立至候ニ付、忠禮始重臣共、大議論ニ及ヒ、賊徒掃撃可致旨決定仕候處、加賀儀反狀顯然之由ヲ以、御問罪之師被差向、徹底奉恐入、加賀儀ハ伏罪之赤誠ヲ以速ニ開城、累世之菩提寺へ幽蟄恐縮謹慎罷在、藩士一同ハ勿論、末々民庶ニ至迄、加賀恭順謹慎之情實ヲ體認シ、懼伏屏息仕候而已。

廿三日、問罪之師被差向爲御總督穗波三位殿、參謀河田左久馬殿始、因州、長州、備前、伊州之兵隊御出張ニ付、奉恐入、爲歎願平塚宿へ渡邊了叟、山中湊、中垣齋宮罷出翌廿四日大磯宿へ岩瀬大江進罷出、謝罪之歎願書面ヲ以奉哀訴候處、御取揚無之、仍テ參謀河田左久馬殿、伊州藩隊長藤堂仁右衛門、若林一郎右衛門へ手寄、伏罪之上速ニ脱走打拂、奏實効可申段歎願仕候處、同廿五日御軍監ヲ殺害仕候始末、其外廉々御尋之趣、以書面御答申上、蒙御譴責、官位、城地被召放、奉恐入、伏罪仕候處、爲謝罪闖藩奮勵、賊徒速ニ打拂、實効相立申度、猶歎願仕候處、御聞届ニ相成、官軍小田原城へ御繰入ニ相成候。

○按スルニ、朝廷忠禮ノ官位ヲ褫キ、封土ヲ沒スルハ六月三日ニ在リ、家記本日ノ事ト爲スハ誤ナリ。

○長門以下四藩兵へ達書

大久保加賀守儀悔悟致シ、居城、器械、彈藥差上謝罪之實効相立度段及歎願、賊徒誅討トシテ出兵及戰爭候義ニ付、先當城原註、此處倉卒中相立、加賀守儀寺院ニ謹慎、御沙汰相待候様申渡置候、右ニ付市民鎮撫之儀急務ニ候間、兼テ 御沙汰之寫誤リ、不分明、モ有之候ニ付、當藩士乍諱慎相勤、速ニ舊弊ヲ去リ、其功相立候様申付置候、此段御心得迄ニ申達候事。

五月廿六日

下 參 謂

岡山藩記

一去ル廿日箱根之事件ニ付、御詰問之趣、恐入奉拜承候、遊擊隊脱走之者、沼津ヨリ箱根路ニ向居候由相聞候ニ付、御軍監

之御沙汰ヲ受、早速人數差出、廿日夕刻ヨリ夜ニ掛戰鬪ニ及ヒ、双方ニモ手負等餘程有之候得共、脱走共ハ從來主家ニ對シ、名義ヲ立候心組ニ相見候者ニ有之、右ヲ討取候ハ兎角難忍様ニ心取違致候處ヨリ、人心一途ニ居リ難ク、兵勢振兼、隊長之者深致心配、嚴敷及指揮、奮戰勉勵候様尙申遣、且小田原ニテモ右同様致動搖、兩地之士氣何分纏リ兼候ニ付、隊長之者一時策略ヲ以、姑ク及和議、致休砲候處、脱走之者追々關内へ入込候途中ニ於テ、御軍監中井範五郎殿ヲ致殺害、其上私家來過激之者不束ニテ、折節箱根へ詰被居候駿州御軍監附屬之者貳人討殺、其儘何方へ歎立去申候、恐入候事故、召捕方早速夫々へ申付置候得共、未行衛相知不申候、且右動搖之中故、如何様之不慮暴行有之候テハ恐入候ニ付、心得之爲迄御軍監三雲爲一郎殿へ、右之始末申達候處、折節酒匂川支ニ付、海船所望有之候ニ付、早速其筋へ申付差出候儀ニテ、決テ此方ヨリ追返等致候事ニハ無御座候、尤右騒擾中何者歎致砲發候者有之候旨相聞候故、嚴重取調申付候得共、碇ト相分不申候、是又恐入候儀ニ御座候、先達テ林昌之助、城下へ罷越候節、不都合之次第有之候處、格別之御恩典ヲ以不被及、御沙汰旨被仰出、難有奉畏候處、尚又此度右様指揮、教諭等不行居、實以深奉恐悚、以來私ハ勿論、家來共迄一同伏罪、敬慎罷在、何卒御寛宥被下度奉願候外餘意無御座、此段幾重ニモ奉哀訴候、誠恐誠惶死罪々々頓首百拜。

五月廿九日

大久保加賀守

小田原藩記

○錄小田原藩上申書

兵士銃卒之人數

七百四拾五人

家中老少總躰之人數

五千三百三拾貳人

内 男貳千七百八拾人

内 召仕百四拾人

女貳千五百五拾二人

内 召仕百三拾壹人

今度脱走之人數

五人

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十五日

二四一

城中用意米俵數 米壹萬六千百八拾九俵餘 但壹俵四斗入
内 米六拾四俵 是ハ古米虫喰受ケ米ニ御座候。

此譯

米千七百貳拾七俵	貳番	米貳千九百八拾七俵	三番	米貳千五百七拾壹俵	四番
米三千俵	七番	米拾貳俵	八番	米三千百八拾九俵	九番
米貳千六百三拾三俵	拾番	米六拾四俵	拾壹番	米拾六俵	拾貳番
小田原城下町數並竈數	町數拾九町	竈數千四百八拾七竈			
總人數五千七百五十壹人					

内 男貳千九百八拾三人 女貳千七百六拾八人

右之通御座候、以上。

五月廿七日

東征總督記

○津、大村、佐土原三藩兵へ達書

明廿六日早朝ヨリ、海路小田原表迄、出張被仰付候事。

○但、出張之上、藩々申合進退可致事。

五月廿五日

島津忠寛家記

○東征總督記ニ云、五月廿五日、伊州百人、佐土原、大村之三藩、明廿六日早朝ヨリ、海路小田原表迄、出張被仰付候事。

○

肥前孟春丸

右、今日ヨリ相州小田原陣迄爲進撃、薩州豊瑞丸一同、出張被仰付候事。

○

大總督府下參謀

鍋島直大家記

五月廿七日

大總督府

下參謀

鍋島直大家記

○按スルニ薩摩藩汽船豊瑞丸モ亦孟春丸ト同一ノ達書アリシナラン、今見ル所ナシ。

二十七日書翰

飛使ヲ以申入候、追々御盡力察申候、然ハ發軍後、其地ヨリ報知無之、甚懸念罷在候、就テハ今朝ヨリ、陸地山路ヨリ伊州兵隊百餘人繰出シ候、繼テ今日午時過ヨリ、海路ヨリ肥前孟春丸並薩州豊瑞丸、小田原港迄乘廻シ申付候、乗組ハ大村藩、佐土原藩、都合百五十人計、大村藩渡邊清左衛門乗組セ候間、明朝ハ着港ト存候、左右進撃之手都合、御賢察有之、本道モ早々御襲撃相成、速ニ滅賊致度、此段爲御心得申達候、以上。略

五月

大村益次郎

寺島秀之助

河田左久馬

及

三雲爲一郎

鍋島直大家記

右、小田原沖迄乘廻シ被仰付候處、既ニ開城之報知有之候條、出張ニ不及候事。

五月

大總督府

下

參謀

鍋島直大家記

孟春丸

○本條達書ノ日ヲ佚ス、按スルニ、豊瑞丸モ亦孟春丸ト同一ノ達書アリシナラン、今見ル所ナシ。
○東征總督記ニ云、五月廿七日、小田原開城ニ相成候由、報知之事。

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十五日

二四三

○藤堂高潔家記ニ云、五月廿五日、小田原表へ海路進軍 御沙汰ニ付、同廿六日東京發足進軍之處、軍艦御模様モ御座候付、一先引戻シ候様 御沙汰ニ付、則呼戻シ候處、尙又陸地進軍 御沙汰ニ付、同廿七日東京發足、神奈川宿迄罷越候處、箱根賊散亂ニ付、同晦日同所ヨリ東京へ引揚ケ申候。

○島津忠寛家記ニ云、五月廿五日、小田原箱根邊へ賊徒屯集シ、於宮根、豆相軍監及其附屬御牧重太郎_{原註}、土原藩、佐等戰死シ、長州、因州ノ兵、命ヲ受テ出張、佐土原兵モ應援ノ命ヲ受ケ、同廿六日江戸馬場先ヲ發シ、品川へ到ル、然ルニ豆相鎮定ノ報アリ、同廿七日馬場先ヘ歸ル。

○渡邊清事蹟ニ云、五月廿五日、小田原追討ノ命ヲ奉シ、品川驛ニ宿スト雖、此夜、小田原降伏ノ報アルヲ以テ已ム。

○中牟田倉之助事蹟ニ云、五月廿八日、大總督府ヨリ孟春艦、薩船一同、小田原攻撃奉命、既ニ出船可致之處、開城ノ報知有之候旨ヲ以テ、夫ニ不及段被相達候。

○安藝藩兵甲府ニ至ル、甲斐鎮撫府命シテ、牙營及ヒ山中村ヲ警守セシム。

○甲斐鎮撫府ヘ上申書

覺、

一兵隊 百八十七人 一手遣 五人

右、當府ヘ出張之人數ニ御座候、以上。

五月廿五日

藝 州 藩

甲斐鎮撫日誌

○濱松藩出兵ニ付、其藩兵隊六十人、御本營警衛被 仰付候旨、副總督府 御沙汰候事。

五月廿五日

藝 州 藩

甲斐鎮撫日誌

○山中ヘ斥候爲警衛、半小隊出張被 仰付候旨、副總督 御沙汰候事。

五月廿九日

藝 州 藩

甲斐鎮撫日誌

○本堂親久ノ兵、一小江戸ニ至ル。_{久家記}

二十六日、大總督府、書ヲ奥羽鎮撫總督府ニ致シテ、東叡山賊徒掃蕩ノ事ヲ報シ、且奥羽ノ形狀ヲ問フ。

暑氣炎蒸愈御勇健御在陣珍重存候、抑當府追々御平定相成候、去十五日上野山内賊徒御追討ニ相成候處、成功不出一日速掃攘候、尙追々敗散之兎徒共、掃攘被仰付、盡及平定候、則日誌五冊ツ、六迄差出候、御落手可給候、其御地之模様如何候哉相伺候、喰々御苦心令恐察、折角々々御盡力可有之候、尙追々援兵可被相廻候、先ハ官軍大御勝利、御平定之段申入候、仍如此候也。

五月廿六日

大總督府 參

謀

奥羽鎮撫總督府_{東征總記}

○甲斐鎮撫府、兵ヲ箱根ニ發シ、甲府守ニ乏キヲ以テ、尾張藩兵ノ信濃ニ在ル者ニ令シテ、速ニ入衛セシム、尋テ藩兵大山、加納、高須、岩村、苗木、高富六藩兵ト與ニ甲府ニ至ル。

相州箱根邊屯集之遊擊隊竝林昌之助等之賊徒爲追討、當府御警衛之兵隊追々御繰出シニ相成候ニ付テハ、當府御手薄ニ付、急速爲御警衛、其藩人數四百人程當府出張可有之旨、副總督 御沙汰候事。

五月廿六日

尾州藩重臣中

○別紙、

本書尾州藩ヘト有之候得共、人數之都合次第、犬山藩、高須藩之人數取合、兵隊四百人程出張可有之候、尤其外近邊之藩々、當時隨從有之候ハ、其兵モ右之内取合候テモ不苦候、此段委曲申達候。

五月廿六日

東海道副總督府 參謀

甲斐鐵撫日誌

○別紙前條ヲ指ス之通り副總督府參謀ヨリ申越シ候ニ付、犬山兵隊四十人、人見又左衛門一隊、加藤九郎右衛門一隊、甲府表ヘ雷發致シ候間、右振合ヲ以テ、御藩ニ於テモ御出兵可有之、依テ右寫相達候、以上。

五月廿八日

尾藩 寺西圖書

○苗木御藩衆様遠山友祿家記德川義宣家譜ニ云、五月廿七日、東海道副總督府ヨリ右之御達首條ノ達書ヲ指ス、ニ因テ、成瀬正肥部下四十人、大砲一門、人見高景等ノ隊ニ附屬シテ出張セシメ、六月一日高景等甲府ニ出張ス。

○成瀬正肥事蹟ニ云、五月廿八日、鹽尻ヲ發セント欲スルニ臨ンテ、甲府柳原侍從ヨリ急報アリ、相州箱根脫走ノ賊徒追討トシテ、在留ノ兵ヲ遣リ、甲府警衛ノ兵寡キヲ以テ、尾藩等ノ兵ヲ分チ、再甲府ニ送レト、正肥急ニ隨從ノ藩兵及尾藩、高須、加納藩等ノ兵ヲ分チテ、甲府ヘ遣ル。

○松平義生家記ニ云、五月廿九日、相州箱根邊屯集之賊徒爲追討、甲府表御警衛之兵隊、追々御繰出相成、右地御手薄ノ趣ニテ、人數繰込候様、柳原卿參謀ヨリ、尾州藩ヘ御達ニ付、兵隊小者九拾九人、鹽尻宿ヨリ再ヒ甲府ヘ繰込候。

○今般當御府爲御警衛出兵方之儀、尾藩ヘ御達之趣御座候ニ付、弊藩銃隊四十人、大砲一門、各藩人數ニ取合、去月廿八日信州鹽尻驛繰出、只今着府仕候、此段御届申上候、以上。

六月朔日

成瀬隼人正内

小川彦兵衛

甲斐鐵撫日誌

○六月三日上申書二通

一銃隊 三十四人

今般御達ニ付、並崎宿ヨリ今日着仕候、依之申上候。

六月三日

松平範次郎家來

長坂傳六郎

本庄宮内少輔隊長

江良左太夫

以上甲斐鐵撫日誌

○六月四日上申書

先般御達之趣ニ付、兵隊三十六人、洗馬宿ヨリ今日着仕候間奉申上候。

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十六日

○大久保忠禮、兵ヲ發シテ、林忠崇等ヲ山崎村小田原ヲ距ルコト一里許ニ討ス、問罪官軍之ヲ援ク、賊兵敗走ス、明日、藩兵官軍ト追擊シテ箱根驛ニ至ル、忠崇等伊豆ニ逃レ、遂ニ海ニ航シテ陸奥ニ走ル、

官軍乃チ師ヲ小田原ニ班ス。

○大久保忠良家記ニ云、五月廿六日、相州山崎村ニテ賊徒之者ト及戰爭、官軍御援兵有之、箱根關外迄追討、死五人銃士石川木久太郎、高橋藤太郎、下士小傷二十八人、家老渡邊了叟、吉野大炊介、番頭山本主計介、銃卒隊長松下舍人、小與頭小川小右衛門、銃士片切江並、里見糸丞、大西藤次郎、坂部彌一郎、小早川丹造、河合鍵三郎、大木鍵次郎、村山德三郎、卒浦井賢藏、鈴木宗次郎、青木勝吉、澤山卯之助、入江安次郎、横田芳太郎、太田傳治、二見喜久次郎、山崎庄次郎。

五月廿八日、林昌之助始脫走之賊徒、豆州日金道ヨリ熱海、相州真鶴村邊ニ心差候様子ニ付、討手トシテ箱根宿ヨリ三小隊分配仕、差向申候。

○戊巳征戰紀略ニ云、五月廿六日、小田原兵ヲ先鋒トシテ、箱根ノ賊ヲ擊ツ、賊嶮ニ據テ屈セス、我兵進テ其左ヲ擊、直ニ砲臺ヲ奪フ、賊走ル、追擊シテ湯本畠宿ニ至ル、傷一人輔助長官松岡梅太郎後遂ニ死ス廿七日、箱根ニ進軍ス、賊豆州ニ走リ、海ニ入ル。

○池田輝知家記ニ云、五月、大久保加賀守、悔悟謝罪ノタメ出兵、函嶺所在ノ賊ヲ討ス、實効見届トシテ四藩出兵、小田原兵三枚橋賊壘ニ對シ、砲戰終日、勝敗不決、同藩柔弱徒然、賊彈ニ傷ラル、者不少、是ニ於テ、四藩交番、進擊ニ約ス、然トモ山路狹隘、多勢進ミ難ク、宮脇縫殿助銃士半隊、井上靜雄半小隊、本道ヨリ、近藤類藏砲隊、左田徑(磨カ)ヨリ、各藩共ニ迅烈發砲、井上靜雄、我隊ヲ勵マシ、自ラ先進、賊彈ニ左翼ヲ貫カレ、永田秀藏代テ其隊ヲ率ヒ、益勇進、各隊共ニ賊壘ニ迫リ、拔刀猛擊、胸壁ヲ奪フ、縫殿助隊梶浦清藏、賊三名ト接戦、重創ヲ被リ、尙奮勇、一賊ノ肘ヲ斷チ激鬪候處、賊錯愕散亂ス、又一賊決死我軍ヲ衝ク、同隊青木政吉郎格闘之ヲ獲タリ、其他各兵奮戰殺倒、賊支フル能ハス、潰亂敗走ス、各藩尾擊、日暮山崎村ニ至リ、追逐ヲ禁シ、同所ニ小田原兵ヲ留メ置キ、長、因兩兵ハ風祭村ヘ、備、伊兩兵ハ小田原ヘ引揚、傷三人小隊司令官井上静雄近藤類藏隊砲

長佐々木永之丞、宮脇分捕數品、縫殿助銃士梶浦清藏分捕數品。

廿七日、箱根驛屯集ノ賊掃擊トシテ、小田原兵先行、我兵及備前兵トモ其後ヲ詰メ進軍、然處小田原兵前日ノ戰爭ニ恐怖シ、躊躇進マス、種々說諭ヲ加ヘ、鼓舞作興シ、漸ク箱根驛ニ至レハ、賊既ニ一小隊許ヲ驛外ノ要地ニ殘シ、餘ハ豆州三島、熱海兩道へ逃走ス、依テ小田原兵ヲ督責シ、驛外ニ進マシメ候處、賊ノ發砲ニ怖レ、戰ハスシテ退ク、我兵大ニ怒勵シ、再ヒ小田原兵ヲ進マシメ、兩藩烈シク砲擊、續テ拔刀衝突ス、賊暫時防戰、熱海路へ退走ス、尙餘賊掃除トシテ三島、熱海路へ小田原兵繰出シ探偵候處、賊悉ク真鶴、熱海各所ヨリ海ニ航シテ去ル、兩藩暫ク箱根驛滯陣、近地平定ニ付、小田原ヘ引揚、此役我兵賊七人ヲ斬獲シ、四人ヲ生擒ス。

○藤堂高潔家記ニ云、五月廿六日、小田原藩爲謝罪出兵仕候處、如何様成戰爭仕候モ難計奉存候付、右爲吟味點檢銃手一小隊ヲ以尾行進軍爲仕候處、九時頃長、因、備竝弊藩砲隊共、三枚橋筋ヘ相進ミ、尙戰爭之模様見及、時宜ニ寄賊徒攻撃仕候様被仰出候付、四藩同様ニ相進申候、小田原藩戰爭之模様、掛リ猶豫之躊躇ニ相見、敵合モ餘程相隔リ候様見及候付、弊藩ヨリ物見差出候テ、敵合迄相進可然旨申間候テ、小田原藩追々相進、風祭村邊ニテ戰爭ニ相成候、七半時前小田原藩段々戰勞レ候付、四藩申合、小田原藩ニ相代リ攻撃仕候、大砲手ハ長州藩同様本道ヨリ相進ミ、小銃手ハ因州藩同様田中下道通相進申候、何レモ猛進且放發仕、入生田村繩手ヨリ下道通り之兵隊モ一所ニ相成、賊營入生田村、山崎村等ヘ討入申候、同所ニ討取生捕等仕候、殘兵敗走仕候付、四五町追擊仕候テ、暮六時頃兵隊一同ニ引揚申候、猶同所ヘ小田原藩差置、番兵巡邏等仕候様申付置候。

○岡山藩記ニ云、五月二十六日、小田原藩討賊之兵差出候ニ付、戰爭之虛實爲見證、四藩戰地ニ赴キ見聞致シ候處、賊徒要地ヨリ搏立候ニ付、小田原兵苦戰之體ニ相見、死傷不少、遂ニ救應之賴談有之候ニ付、四藩一舉ニ進擊、追立申候、尤其節當藩遊奇隊之内半小隊計、賊之橫矢ヘ相廻り激發致シ候處、賊前後ニ敵ヲ受、甚々苦戰、悉ク及敗走、死傷多分ニ御坐候、賊徒遁逃之蹤跡致探索候ヘトモ、一向行衛相知不申、其後箱根關門屯戍相勤居申候。

○因幡藩隊長足立勘四郎戰報

去ル廿七日進軍之次第、廿六日殘賊追討之都合ニ候處、兎角大久保藩兵氣甚鈍ク、全前日之戰爭ニ恐縮仕候様子ニ見請候得共、實効成丈ヶ相建爲申度存寄ニテ、種々說得仕候テ、分隊爲致、一小隊ハ間道ヨリ蘆湯方へ爲進、餘ハ本道ヨリ押揚候様相諭置候得共、兎角延引致候ニ付、尙又催促申候得共、種々故障申出候ニ付、終ニ及暴言、漸々十一字ニテ烟宿進發爲致居申候處、備州藩着ニ相成リ、右申合、兩三輩死戰爭振り見届旁籠向候處、前條之通、兎角相進不申、漸々四字ニ至リ箱根宿へ着仕候處、賊兵ハ九字頃ニ右箱根迄引揚ケ、兵糧等相遣ヒ、三島宿、アタミ之兩道へ分隊爲致繰出候處、殘賊之内ニ林昌之助一手進故、跡々ニ相廻リ、實ニ殘念之至ニ候、尙又其ヨリ右三島、アタミ之兩道へ分隊爲致繰出候處、殘賊之内ニ至リ箱根宿ト相見ヘ候物、箱根宿外レ山上ニ三拾人計、大砲壹門、小銃壹挺宛相携ヘ休息致居候様子ニテ、右小田原藩へ向ケ砲發仕候處、散々馳歸リ候ニ付、尙又跡ヨリ追建、押テ山上へ爲進候處、人數之内兼テ強壯之者ト被存候者兩三輩モ拔刀、真先ヘ相進ミ候處、跡ヨリ追々相進候者モ有之、生捕兩人及打取六人、處持之器械等ハ不殘分捕相成申候、尤ア付、打出不申、小銃而已ニテ御座候、其後モ大島ト申處三島道之由、賊徒一小隊計屯集之由ニ付、直様夕方繰出置申候、尤アタミ路ヘモ同様之事、其夜ハ備、伊三藩申合、箱根へ宿陣仕、嚴重ニ番兵等差出置、右分捕之内少々手掛リ之書面モ有之ニ付、直様小田原表へ備藩同斷罷歸申候。

五月廿八日

手負覺書、

手負 長藩	松 岡 梅 太 郎
因藩銃頭	井 上 靜 雄
同組士	梶 浦 清 藏

右三人ハ、昨廿七日、横濱病院ニ相送リ申候。

淺手 因藩兵隊 佐々木永之丞

以上東征總
督記

○林忠崇私記ニ云、五月廿六日、未ノ刻頃、湯本邊ニテ戰爭始マリシ由報知アリ、
申ノ刻頃ヨリ本營引拂、全軍關門ヲ守衛ス、

夜ニ入、子ノ刻頃、伊庭八郎手負シテ引取來ル、

此時伊庭ニ手負セシハ、小田原ノ卒高橋藤太郎ナリ、八郎湯本ノ邊ニテ短兵接戦シ、敵ノ首級ヲ提ケ、引揚來ルニ、飛丸一發、腰ノ邊ニ中リ、少シク弱シ所ヲ、長州ノ隊長某追來リ討留ントセシヲ、流丸ニ中テ斃ケレハ、藤太郎續テ駆來リ、後ヨリ切付シト也、

此夜、伊能矢柄ヲ長トシテ貳拾人、山中へ出兵ス、無程湯本ノ手敗シニヨリ、引揚ヘキノ令アリ、逸見靜馬外九人ニ託シテ引揚來、

五月廿七日、朝六ツ時比、蘆ノ湯道竝畑邊へ出兵ス、

四ツ時過ヨリ、幽嶺保チカタキニヨリ、引揚ノ議一決、

晝九ツ時比ヨリ、漸々幽嶺ヲ退去シ、午ノ下刻比、全軍悉ク退散ス、

山中出張ノ兵幽嶺退去ノ報ヲ聞キ、速ニ引揚來シカトモ、既ニ全軍退去ノ後ニシテ、驛内ニ入ントスルトキ、ハヤ小田原ノ兵進來リ、遂ニ苦戦ニイタリシト云、

同日夕七ツ時過、熱海ニ着シ、薄暮全軍次第ニ乗船シ、網代ニ着シ、直ニ大船ニ乗込ム、夜五ツ時過出帆ス、

此日人見勝太郎開陽艦ヨリ歸リテ、熱海ニ着、
廿八日、拂曉館山港へ著、

四ツ時比咸臨丸へ乗込、

兼テ榎本泉州へ頼談セシニヨリ、長崎、千代田、大江ノ三艦、館山ニ著港ス、

今度奥州航海ノ議一決セルニヨリ、老衰竝病兵等悉ク暇ヲ遣ス、

六月朔日、全軍長崎艦へ乗込、即夕出帆、

同三日夕、八ツ時比、奥州小名濱ニ着、即時上陸、當所守衛ノ仙藩山本丹後ニ面會シ、驛舍ニ入テ一泊ス、

四日小名濱出立、湯元宿中喰平城着。

○按スルニ至リ、忠崇平潟口總督ノ軍門ニ就テ降ヲ乞フ、事ハ平潟口戰記ニ詳カナリ。

二十七日、鎮將三條實美、手詔ヲ親子内親王ニ傳ヘテ、徳川氏處分既ニ畢ルヲ告ケ、其去住ヲ問フ、内親王恩命ヲ謝シ、暫ク西上ノ期ヲ緩クセント請フ。

○二十五日大總督府徳川家達へ達書

明後廿七日巳刻 和宮御方へ爲 勅使、三條大納言、橋本少將參入被致候間、相達候事。

○二十六日大總督府達書

大監察使、靜寛院宮御方へ爲 勅使被參向候間、警衛百人、明廿七日辰半刻可相揃事。

五 月 黒田長
知家記

○宸翰
徳川家名相續以下夫々寛典相施シ候間、御安心可被遊候、尤御身上之儀案勞致候邊、三條へ委細申含置候、尙又御歸洛否之儀御趣意承リ度候。静寛院宮日誌

○静寛院宮日誌ニ云、五月廿五日酉刻、明後廿七日巳刻、勅使三條左大將、橋本少將、當邸に入來の事、書取に而留主居に達し有之。

廿七日、午刻前入來、扣所前迄藤少玉出迎に出、扣所より對面所下段口迄藤誘引、夫より予案内、上段下に扣、勅使著座の上、予上段に進、三條、勅書御書筥渡され、猶御口上に而、此度 御寛典仰出され候に付、予上京願候や、申上候様との御沙汰伺、猶勘考にて、後日御請申上候趣申入、上段を退れ、初の所迄送候事、猶扣所にて兩頭よりの狀箱藤に渡され、猶又願の義も候は、申候様申聞れ、差掛願出候事も無由藤より返答申入置、勅答の節此兩所入來のよし三條申され候事、午刻兩所歸れ、今日の 勅使は、勅書給り候事、錦より田安に申聞置、即刻 勅書拜見す、三條御口上通の御沙汰也、兩頭よりも同様仰文也。

廿九日、勅答の事に付、少將へ内談の文藤認、今朝出す、右寫、

御口上何も御伺遊はし、宸筆も御拜見遊はし候處、御口上御同様の御沙汰に有らせられ、御厚き 敝慮、深くかしこまり存り、とくも御勘考にて、御内存、先御まへ様迄御相たん遊はし候、

一御上京の御事御願も有らせられ候は、仰出され候 敝慮伺れ、かしこまりり、全躰の處 仁孝天皇様御廟參の御爲、且は此度の御禮御直に仰入れ度思しめし候に付、御上京の御事宮様より御願遊はし度は思しめし候へ共、御當家も轉封、竝に龜之助殿御禮御上京の事も仰出され、萬端疲弊の折柄に付、宮様御一分の事は可成丈は御省畧の思しめし、表方へも仰出され候まゝ、此場合にて宮様より御上京御願遊はしては、御家の御爲に御省畧仰出され候思しめしも相違致し候ては御不本意に思しめし、且又宮様より御願故に仰出されと相成候は、ケ程の事を龜之助殿初夫々に御示談無、御一存に而御願遊はし候譯柄にても御座無候のへ、仰出され候上にてかれ是申出候半、無據筋を申立御願さけの様、表方より申出候は、當時機に依ては是非とも仰れ難場合にも至り候ては御殘念に思しめし、先一通は疲弊の折柄故、此場合にて御願兼の趣を仰せられ候は、當地人心居合も宜敷候半哉、御まへ様にも粗御承知の通の氣合に候まゝ、行末の御見込も有らせられず候

まゝ御内實は御願遊はし度思しめしに有らせられ候まゝ、御自由ヶ問しき御事乍、宮様には此場合にては御願有らせられぬ御事仰上れ候へ共、段々の御禮とか御程よく名目立、朝廷より仰出され候はゝ、人き居合もよろしく、宮様へも勅命御遊はし難由を仰れ候はゝ、かれ是も無御都合思しめし候まゝ、恐入り、さ様御願遊はし度思しめし候事。

一一昨日勅使、定めて御上京の御事に候半と、當地の者共一同心配の様子に候まゝ、昨日は御處置濟にて、勅書進らるの御使にて、別の御用は有らせられすと仰置れ候へ共、此後 勅答の後、御上京仰出され候はゝ、宮様御願をは仰出されすとも、勅使の節御願に成候半と、人々存候半と思しめし候まゝ、此後 勅答の節、當地の人々に仰られ候には、實は此間勅使の節御處置濟に付ては、宮様御進退の御事も御沙汰蒙られ候へ共、此所にては御上京御願遊はさぬ思しめし、勅答遊はし候趣を仰聞され置候てはいかゝや、其上にて朝廷より仰出され候はゝ、御都合と思しめし候事。

一勅書御請並に御口上御請は一通御上京御願遊はさぬ趣を仰上れ、前條の思しめしは、三條殿御まへ様の御内存はケ様と仰られ御取成御頼の方、御よろしくや、右御内存 勅書御口上の御請に仰上れ、猶又御兩所へも御頼の方御よろしくや。一萬一思しめし之通仰出れに候はゝ、御道中堂上方御付添無ては御心細く候まゝ、表向仰出され候はゝ、御願遊はし度思しめし候、御高官の御老卿恐入思しめし、御當人も御苦勞様乍橋本大納言様に候はゝ、一入忝く思しめし候、前條之通 勅答にて御よろしくは、其節此事も三條様へ御頼置遊はし度思しめし、先御まへ様迄御内談遊はし候、御返事次第御入來仰入られ候。

申刻過返事表より来る、文意分り兼候、明日、明後日のうち入來致され候まゝ、兩日の中答候様申來る。

晦日、少將より中將轉任の吹聽申來る。

六月朔日、申刻過中將入來、予所存尋られ、三條内存は此度上京否御沙汰乍、龜之助移を見、届候まで御猶豫願候方可然旨申され候よし、其方に決定す、付ては 勅書の御請案、中將持歸られ、烏丸へ相談のよし也、申半刻歸られ、同刻田安へ面會、勅使にて上京の様御沙汰蒙り候へ共、龜之助移見届迄御猶豫願候心得、内々申聞、錦仲へも同斷申聞す。原註、後日藤崎來り候節、右の事、天御方へ申入置。

三日申刻過、中將より昨日の案文よろしき由申越さる、三條右府轉任の事申越さる、明日中將京師へ出帆のよし申越さる。四、日勅答申上候間、七日、八日のうち入來の様三條へ申入、使用人午刻歸り、八日と返答也、其節中將ひる後入來のよし承り歸る、申刻過入來、勅答の大體承り度旨三條頼にて入來也、猶願の事も候はゝ、申出られ候様との事乍、先何も無之旨答ふ、大納言へ直書言傳す、藤よりも頼、昨日出帆の由、京師に兩三日逗留のよし、申半刻歸られ候。原註、中將留主中、頼事何れ西四辻、外は烏丸と答る。八日辰刻、三條今日入來の處、中暑にて斷使來る、猶全快の上案内の様返答す。

九日、三條に見舞の使用人出、申刻歸り。

十二日巳刻、三條より使にて、十三、十四の内入來の事尋合せられ、十四日巳刻と返答す。

十四日辰刻、三條より使にて附屬萬里小路左少辨も來られ候事、書取にて申來る、巳刻、兩所入來、上段に於て 勅答、今度の御禮并に上京の事御猶豫願の事。

勅書の御請文 同様三條に申述る。原註、但兩帝様御廟拜參の事は口上計、文宮渡す、兩頭へ藤返事入狀宮も渡す、直書も入、三條より兩寺は多分此儘に仰付られ候半と申さる、女向駿州へ移り急速にも及間敷やと承る、龜之助は早々可移、女向は急には及不申由、兩寺此儘に給り候はゝ、予當地に住居致度は 朝廷へ願候ても宜旨答られ、終而退座、三條取扱は總て上崩の事、其餘は 勅使の節同様巳刻過歸られ候事。

勅書御請寫、

勅書かしこまり拜見申上り、當春よしを事誠に不届の進退、私に置候ても深く恐入り處、謝罪謹慎致し候に付、今度格

別の御沙汰にて城地祿高仰出され、御寛大の御慮、三條左大將よりも御委しく伺、深くかしこまりり、右に付私上洛願上候や否申上候様との御事、かしこまり伺り、尤速に上京致御わひ御禮申上度心得には候へ共、龜之助駿州へ引移り、家來一同の安堵致し候を見届候上、上京致し度、暫の處御猶豫願上り、事治り候上願上候節は、願の通速に仰出され候様、兼而願上置り。

○按スルニ、内親王、二年正月十八日東京ヲ發シ、二月三日京ニ至ル。

○黒田長知家記ニ云、五月廿七日、三條殿爲勅使、靜寛院宮御方へ御出ニ付、昨日御達之通、五半時ヨリ西丸御玄關前へ繰込、御警衛申上。

○大總督府、柴岡某宗伯、備前藩醫、薩摩人大澤某宗隆、薩摩人以テ、横濱病院醫師頭取ト爲ス。

備前藩 柴岡宗伯

右、當分横濱病院醫師頭取差添被 仰付候事。岡山藩記

○口上、柴岡宗伯醫師頭取差添被 仰付候事。

右ハ、藥局諸器械出入等取締之儀、心得可申事。

右ハ、醫師頭取差添被 仰付候事。

月 日

薩州藩 大澤宗隆

館林藩 岩井元敬

右ハ、藥局諸器械出入等取締之儀、心得可申事。

六月廿八日

横濱病院 取締

東征總督記

○大總督府、軍監補木呂子某善兵衛ヲ越後口ニ遣シ、書ヲ薩摩、長門以下諸藩兵ニ下シテ、長岡城回復ノ功ヲ賞ス。

○薩摩藩兵ヘ達書

會津其外之賊徒共、北越所々之要地ニ盤踞シ、兇暴猖獗、以テ官軍ニ抵抗スル之折柄、屢遂勇戰、殊ニ去ル十日ヨリ十九日ニ至リ、連日之苦戰頻リニ賊徒ヲ掃擊シ、遂ニ十九日、千曲川ヲ打越先登シ、長岡城ヲ乘取候段、深感賞候、成功之次第ハ以下上文ニ同シ。

忠勇、勉勵盡力可有之、仍テ感狀如件。

五月江城日誌

五 月 江 城 日 誌

○尾張松代以下諸藩兵ヘ達書

會津其外之賊徒共、北越所々之要地ニ盤踞シ、兇暴猖獗、以テ官軍ニ抵抗スル之折柄、屢遂勇戰、殊ニ去ル十日ヨリ連日之苦戰頻リニ賊徒ヲ掃擊シ、遂ニ十九日、千曲川ヲ打越先登シ、長岡城ヲ乘取候段、深ク感賞候、成功之次第ハ以下上文ニ同シ。

功之次第ハ以下上文ニ同シ。

五月江城日誌、德川義宣

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十七日

○幸民家記ニ云、七月二日、於北越右之御感狀、越後監察使持參御渡。

○大總督府、龜山藩兵ノ幸橋警守ヲ罷メ、本堂親久ノ兵ヲ以テ之ニ代フ。

龜 山 藩

右、幸橋警衛被仰付置候處、被免候事。

五月

右、幸橋警衛被仰付候事。

五月以上東征
總督記

○本條本堂親久家記載スル所少異アリ、今總督記ニ從ヒ、日ハ家記ニ據ル。

○大總督府、徳川家達ニ令シテ、長崎、箱館、七島^{伊豆}及ヒ硝石、川船等、諸會所ノ簿冊ヲ市政裁判所ニ致サシム。

一箱館會所

一諸國會所

一硝石會所

一伊豆七島之會所

一長崎會所

一川船改會所

一濁酒會所

右場所々々並記録、其外委細取調、可引渡候事、

但、掛役名、人數、請負人、用達名前等可書出候事、

右之通、取調目錄書ヲ以、市政南裁判所ヘ可差出事。

五月 静岡記

○一橋茂榮、田安慶頼等、書ヲ大總督府ニ上リテ、舊幕府臣隸ヲ朝臣ニ列シ、其祿邑ヲ復セントヲ請フ、令シテ其姓名、階級ヲ錄上セシム。

此度徳川家領地下賜候段、誠以無體之天恩、難有仕合奉感謝候、然ル處徳川家之儀、二百餘年來扶助仕來候臣下之者、大凡四十萬ニ及候人員ニ御座候間、縱令一人ニ付、半口之俸ヲ與ヘ候共、逆モ扶助可仕目的無之、甚以當惑至極奉存候趣、去逆一時饑餓ニ臨候ヲ、坐視ニ難忍、悲痛之至、千萬熟慮仕候處、家來之内知行所有之候者共之儀ハ、祖先家康天下ヲ鎮定仕候節奔走仕、戰功之多少ニ寄、大小之土地ヲ割與ヘ、或ハ其以後治世之功勞有之、采地ヲ與候者共之子孫ニテ、始ヲ原ネ候得ハ、同ク、皇國之御爲ニ身命ヲ拋、兆民之爲無窮之治ヲ開候儀ニ御座候間、祖先之勤勞ヲ御眷顧被爲在、當時連綿相續罷在候者共采地之儀ハ、其儘被下置、天朝ニテ御採用被仰付候ハ、於徳川家扶助難仕、現在生計モ相成兼候ヲ、更ニ天朝之御仁慈ヲ奉蒙、所領安堵仕候ハ、一際奮勵勉力仕候様可相成、況ヤ屢勅諭モ被爲在候通、生靈塗炭之苦ヲ免レ、且旗本譜代陪從小吏ニ至迄、凍餒之患無之様トノ令旨之趣モ有之候間、前文之通被仰付候様、於私共偏奉願候、以上。

辰 五月

一 橋 大 納 言
田 安 中 納 言
松 平 確 堂

吉田溫苗聞見錄

○本條、上申ノ日ヲ佚ス。

○本日達書

徳川龜之助方ニテ扶持イタシ候分相除、朝臣ニ相願候モノ共、姓名、格式等相認、可差出候事。

五月 江城
日誌

復古外記 東海道戰記 第三十 明治元年五月二十七日

二五九

○晦日申請書

甲府城中ニ罷在候勤番之者、先達テ 御沙汰之趣モ御座候ニ付、復歸相願候者共、此程追々歸着仕、貳百人餘ニ及ヒ、妻孥共凡千人ニ餘リ可申、龜之助領地高ニテハ、已ニ當地ニ罷在候家來共スラ過半ハ、扶助仕兼候程之儀ニ付、何分ニモ撫育行届不申、現在饑渴ニ相迫リ候ヲ、座觀仕候モ不本意之次第ニテ、素ヨリ勤王無ニ念證書モ差出候者共ニモ御座候間、以來一同朝臣被仰付、相當之御扶助被下置候様、偏ニ奉願候以上。

辰 五 月

○批紙

詮議有之候間、姓名夫々相糺、差出候様可被致候事。静岡藩記

○批紙ノ日ヲ佚ス。

○六月十三日達書

○七月四日再達書

今般、於其方扶助難行届者共、姓名夫々取調、來ル廿日限差出候様可致旨、御沙汰候事。鎮臺日誌 德川家達家記

先達テ扶助願出候者、格式、居所並是迄之勤向相記シ、人別、年齢等細ニ取調、來十日限可差出候旨、御沙汰候事。但、脫走之者、姓名、自職竝子弟之差別、夫々片書ヲ以相記シ、同様差出可申事。

七 月 鎮臺 日誌

○七月十一日上申書

兼テ被仰出候趣モ御座候間、別紙名面之者共、朝臣相願度旨申出候付、願之通御聞濟被成下候様奉願候以上。

松 平 確 堂

德 川 龜 之 助

德川家達家記

○七月十四日上申書

七 月

後見 德川龜之助
松平確堂

德川家達家記

○別紙ハ之ヲ佚ス、之ヲ徳川家達ニ質スニ、亦存セスト云、今徳川氏ノ達書數條及ヒ海舟日記ノ一條ヲ下ニ附錄シ、以テ参考ニ供ス、又八月二日ニ至リ、鎮將府、家達ニ令シテ舊旗下士ノ朝臣ニ列セント欲スル者ハ、本人ヲシテ直ニ之ヲ申請セシメ、尋テ申請ノ期限ヲ定ム、事ハ本記ニ詳ナリ。

○徳川氏達書五條

今般、御領高ノ儀被仰出候處、御旗本ノ面々御扶助ノ道御見据モ付兼、知行取ノ義ハ、東照宮天下萬民ノ爲、諸侯ト共ニ國家御鎮靜被遊候砌、各々祖先達、何レモ身命ヲ不惜御奉公申上候其功勞ニ寄、多少ノ采地ヲモ被下置候儀ト存候間、不取敢我等共連名ヲ以、別紙ノ趣歎願申立候處、鎮臺宮ヨリ御沙汰ノ次第モ有之候ニ付、此上面々安堵相成候様取計申度、就テハ別紙書類一覽ノ上、存意無腹臓、頭、支配迄可申立、尤於頭支配モ明了ニ貫通致候様可被致候事。

六 月

一橋大納言
田安中納言
松平確堂

右ノ通、一橋大納言殿、田安中納言殿、松平確堂殿被相達候ノ間、御旗本、御家人中ヘ不洩様、早々可被相觸候。吉田溫苗聞見錄

○按スルニ、本條所謂別紙ハ前ノ申請書ヲ指ス、別紙書類ハ詳ナラス。

○御領地高相定候ニ付テハ、多人數之御家來御扶助御行届難相成候間、不便至極ニハ思召候得共、無御據御切米御扶持方御役金等、都テ諸手當向迄、當六月ヨリハ御渡方相成兼候ニ付テハ、銘々進退之儀勘辨イタシ、朝臣相願候共、御暇相願候共、

決着之處、頭、支配ヨリ速ニ承リ糺申聞候様可被致候。

但、知行取ノ向モ同様可被心得候。

右之趣、組支配有之面々へ、不洩様可被達候。

六月五日

○此度格別之朝恩ヲ以、御所領ヲ賜リ難有御請被爲遊候得共、是迄ノ多人數之御家來ハ、逆モ御撫育難被遊候ニ付、以來ハ銘銘之高ハ不被下、御役相勤候者ヘハ御役金被下、御役御免相成候者ヘハ御扶助米被下候積、其外ハ御行届難相成分ハ、此程相達候通り、鎮臺府ヨリ被仰出候旨モ有之候間、御扶助之儀ハ猶御歎願被遊候品モ被爲在候間、其段相心得候様可被致、右之趣御旗本、御家人中ヘ不洩様可被達候事。

六月以上苟生日記

○朝廷御扶助之儀ニ付テハ、兼テ相達候趣モ有之候處、猶別紙之趣被仰出候、畢竟勤王之御赤心御貫徹故之儀ト、深ク難有被思召候儀ニ付、一同無心得違、朝命遵奉致シ候様被仰出候間、朝臣之御沙汰、又ハ相應之御用被仰付候ハ、萬忠勤可致候、左候ハ、尊王之御趣意ニモ相叶、御満足ニ被思召候間、銘々其心得ヲ以、頭、支配承糺、早々可願出候、萬一右御扶助難相願向ハ、是又早々可被申聞、且無祿ニテ御家臣之名籍ニ列度趣、此程中ヨリ願出候向モ有之、右ハ多年之御厚恩ヲ辨ヘ、何レモ決心願出候條、一應殊勝ニハ候得共、即今之御場合、朝廷ヘ之御勤入用、其他之御國用スラ御取續如何可有之哉ト、深ク御心配之折柄、逆モ銘々祿高ハ勿論、先達テ中朝臣御暇之外、其身生活之見込モ無覺束分、凍餒之患ニ及候モ御不便ニ被思召、天朝御扶助御願被遣候處、總督府ヨリ御内沙汰モ有之、御扶助被下候上ハ、矢張朝臣之儀ト相心得、御扶助可奉願候、畢竟右様御配慮被爲遊候儀ハ、當今世上之形勢一變之時、陪臣草莽ニ至迄、器用才能御用相

成候御主意ニモ有之候間、御家來之内ヨリ朝臣相願候儀ハ、自然勤王之御素志ニモ被爲叶、御満足被思召候間、篤ト勘考之上早々可被申聞候。

六月

○文意ヲ按スルニ、別紙ハ蓋六月十三日ノ達書ヲ指ス。

○道中費用、御領地住居之御手當等モ難被下、且向後世祿之制御廢止可被遊候間、當時勤仕之者ニテモ、御役金被下候迄ニテ、別段祿高ハ不被下候、此度無祿ニテ罷越候ハ、暫時ハ相支候共、妻子ヲ養ヒ、永ク生計可相立理ハ無之、假令金鐵之志候共、往々可及、飢餓ハ必然之事ニ付、難被爲忍候得共、御暇被下候儀ハ、前書之理合厚ク御洞察被爲在、却テ銘々之爲可相成トノ御事ニ付、右之御主意了解イタシ、無祿ニ候トモ決シテ御手數ヲ蒙ラス、碇ト生活可相立見込有之者共、御領地中ヘ夫々移住御差免可相成候、農工商ニ歸スヘキ見込之者ハ、是亦御趣意ヲ奉戴イタシ候事ニ付、右邊厚勘辨之上、御暇相願度者ハ早々可願出候、右之趣篤ト勘辨致シ、朝臣相願候トモ、御暇相願候共、又ハ無祿ニテ御手當等一切無之御領地移住相願候共、三ヶ條之内、來ル廿六日迄ニ可被申聞候。

右之通寄合頭御用人ヘハ相達候間、其外御家來中ヘ不洩様可被達候。

六月以上勝安芳日記

○己巳夏取調、

朝臣頤濟 四千四百七拾五人

同不濟分 九拾八人

十一月取調

朝臣被仰付候者

一等 貳百三拾貳人 二等 千六拾八人 三等 三千六百貳拾九人

メ四千九百貳拾九人 海舟日記

朝臣ニ列セシ者ノ姓名ハ、本記五月廿七日ノ條下ニ載セリ、參看スヘシ。

○甲府勤番之者ニテ、當地へ罷歸り候者、扶助難行届候ニ付、朝臣被仰付度旨、去五月晦日、松平確堂ヨリ以書面奉願候處、六月十四日、右勤番之者一同、甲府表へ被差遣候旨、以御書付被仰渡候ニ付、追々出立申付候處、已ニ彼地着之者共ヨリ、其筋之御向へ罷出此度令旨ニヨリ急速歸甲致シ候様、同藩掛リ之者ヨリ申聞候ニ付、歸甲仕候段申上候趣、乍去右ハ固ヨリ確堂ヨリ歎願仕候様之儀ト申事ハ、勤番組頭齋田左衛門、伴孫太郎其外勝手小普請ニ至迄、數名之者ヘ篤ト申聞、無心得違様申諭、猶其外之者共ヘモ早々申傳ヘ候様申聞候儀有之候處、全ク勤番之者心得違仕候哉、右様不都合之儀申上候儀ニテ、甚以奉恐入候、此段御承知被成下度奉願候、以上。

七月四日

德川龜之助家來

白戸石介印

德川家達家記

○書中所謂六月十四日ノ達書ハ之ヲ佚ス。

○附七月十六日徳川家達申請書

飯田町九段坂下 元林昌之助屋敷内 假抱小筒組 四百貳拾壹人

竹橋御門外 大砲方屯所内 抱大砲組 百五拾壹人

右之者トモ、於大總督自然御入用ニ相成候筋モ被爲在候ハ、於其筋御請取被成下候様仕度、尤今度駿府移轉仕候ニ付テハ、右之者共所詮抱置候餘力モ無御座候間、一同暇差遣候儀御座候、此段御届旁奉伺候、以上。

辰七月

○批紙

於總督府入用無之事。東征總記

復古外記 東海道戰記 第三十 終

二十一年七月九日

掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

復古外記 東海道戦記 第三十一 明治元年五月二十八日

二六六

東海道戦記 第三十一

自明治元年五月二十八日至同月三日

五月二十八日、甲斐鎮撫府、書ヲ大總督府ニ致シテ、急ニ精兵ヲ甲府ニ發遣センコトヲ請フ、時ニ府下見兵甚タ寡シ、督府乃チ復書シテ、他日ヲ俟テ之ヲ發スルヲ告ク、是日、督府、安藝藩兵ヲ甲府ヨリ召還ス。

別紙、當地出張人數書入高覽候、尙又此中林昌之助猖獗ニ付、昨廿五日、參謀助役伏谷又左衛門大將トシテ、真田一小隊、濱松二小隊半、沼津二小隊、高遠一小隊等繰出シ申候、何分當地之處、兵員ハ相應ニ御座候得共、小藩弱兵中情反覆難計、其上彰義隊林昌之助黨等何時來襲難計、困入候仕合、何卒強兵二百人計、早速御繰込願上候、緩急之節、如何ニモ手薄困居候、萬御亮察願上候、大亂筆御宥恕願上候也。

五月廿六日

尙以監軍和田藤之助不慮之儀有之候哉之趣、其御地へ相聞へ候由、是ハ訛傳ニテ、即昨日弊陣へ馳參リ、事情承及候、就テハ右之通四藩兵繰出申候、尙捷報追々言上可仕候也。

前

光

大總督府 參謀御中督征總記

○別紙人數書ハ之ヲ佚ス。

○復書

一援兵貳百人計急速繰込候様御申越承候、於當府モ甚以御無人、諸所出張モ有之、差當當今繩合セ候兵隊モ無之候ニ付、御都合次第可繩込候、尤此度從京都被差下候援兵、唐津、柳川、筑前三州、刈谷、大洲加藤、阿州家老都合八百人計、過日大井川ニテ川止、頃日小田原ヘ繩込候旨モ相聞候間、不日ニ小田原モ可及平定、林昌之助已下賊徒箱根麓ニテ及戰爭候由、今曉報知有之候、其都合ニ寄、早速援兵可繩込候、賊兵モ貳百位之由ニ付、格別之儀モ無之哉ニ被存候。畧

五月廿八日

柳原侍從 殿東征總記

藝州兵隊

五月廿八日

右忍表ヨリ甲府表へ出張被仰付置候處、歸府被仰付候事。

大總督府

參

淺野長勲家記

○大總督府、將ニ諸藩ノ戰死者ヲ弔祭セントス、因テ東海、東山兩道服役ノ諸藩ニ令シテ、其戰死者ヲ錄上セシム。

○東海、東山兩道服役諸藩へ達書

追々兩野、總、房、武、奥州之ヶ所ニテ令戰死、或ハ深手ニテ療養中死去致候輩、諸藩々不洩様、明廿九日限り書付可申出旨、被仰付候事。

但、僕隸之者迄モ可申出候事。

復古外記 東海道戦記 第三十一 明治元年五月二十八日

二六七

同 斷 草野直太郎 永徵 助 六番隊
同 内藤金治兼吉 十九歳 廬

同 斷 同 年四月總州
夫卒 繼助經德 進攻ノ際戰死
原田敬助 真雄 三十六歳

同 斷 同 年四月總州
田中藤五郎 資雄 二十九歳
廣瀬喜兵衛 景則 三十六歳

同 斷 同 年四月總州
上野東叡山 戰死 同年五月一日陸奥
兵具隊 田中清右衛門 綱記 五番隊
二番隊 古後七之丞 秋 菩
兵具隊 田中清右衛門 綱記 五番隊
一番大砲隊 小野藤吉 吉吉風
同 斷 同 年四月總州
上野東叡山 戰死 同年五月一日陸奥
兵士 有馬早八郎 純熙 二十八歳

同 斷 同 年四月總州
岩下半之助 英 順
兵士 有馬早八郎 純熙 二十八歳

同 斷 同 年四月總州
竹下猪之丞 盛 二十歳
兵士 有馬早八郎 純熙 二十八歳

同 斷 同 年四月總州
奧新五左衛門 良 順
兵士 有馬早八郎 純熙 二十八歳

同 斷 同 年四月總州
同年五月廿五日陸奥 同年五月廿六日陸
國大田川 戰死 奥國白川 戰死

同 斷 同 年四月總州
元棚倉三街道應援ノ節戰死 同年五月廿六日陸
福岡藩 伊地知惣吉 秀材 二十歳

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同 斷 同 年四月總州
和歌山藩 同年五月廿六日陸
東京大川橋 戰死 同年五月廿六日陸

同斷ノ節重傷歸營後死 櫛導内山久之進弘範
二十五歲

佐賀藩 明治元年戊辰五月十五日東士分中地藤太宗清
京上野東叡山ニ於テ戰死 三十二歲

同上 鳥取藩 同上 武藏國神奈川夫卒常吉

同斷 明治元年戊辰五月二十六日相模國箱根ニ於テ戰死

同上 津藩 同上 中井範五郎正勝
明治元年戊辰四月三日下組士菅鉤三郎道泰
總國葛飾郡市川ニテ戰死十十八歲

右同日同所ニ於テ戰死 雜人新助三十歲

同年五月十五日東京上野東叡山ニテ戰死 小銃隊森川治右衛門貞實

同上 同上 同上 太田萬治正作則直三十四歲

同年五月十五日東京上野東叡山ニテ戰死 銃隊花房喜三太義忠
日下總國八幡ニテ戰死十九歲

同上 同上 半大隊令官太田萬治正作則直三十四歲

同上 同上 同上 同上 同上 同上 同上

同上 同上 同上 同上 同上 同上 同上 同上

彦根藩 明治元年戊辰四月十七日下野國小山驛ニテ戰死

高知藩 明治元年戊辰四月十九日下野國日光小佐越ニテ戰死

復古外記 東海道戰記 第三十一 明治元年五月二十八日

宮崎代助安禮
年實不知名

高室重藏同上

北小路萬之助
同上

安塙戰爭之節即死
同上

島波坂藩桑田郡山屬
同上

復古外記 東海道戰記 第三十一 明治元年五月二十八日

二七六

同 善作信廣四十歲 同 橫倉善作信廣四十歲 同 小西久兵衛行義

高崎藩 明治元年戊辰閏四月二十四日上兵卒 深田竹次郎義次

宇都宮藩 明治元年戊辰四月十九日下野士分

同 國河内郡宇都宮二十於テ戰死 徒 高宮奏三郎四十六歲

同斷 同 國河内郡宇都宮二十於テ戰死 徒 平山惠介四十六歲

同斷 同 國河内郡宇都宮二十於テ戰死 同 屠見豊吉政信二十歲

同斷 同 國河内郡宇都宮二十於テ戰死 同 山本松三郎安知四十歲

同斷 同 國河内郡宇都宮二十於テ戰死 定 次四十五歲

同所ニテ戰死 同軍江下野國河内郡夫姓

同年四月廿三日 豊橋藩 明治元年戊辰五月廿七日上總

同 國大多喜ニ於テ重傷即日死 松本藩 明治元年戊辰四月廿二日

同 國下野國安塚ニテ戰死 猪股一三二

同 國下野國小山驛二十日夫卒 館林藩 明治元年戊辰四月十六日

同 上 國下野國沼津ニテ戰死 徒士山本富八道春

同 國下野國小山驛二十日夫卒 隊長石川喜四郎四十五歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 定 次四十五歲

同 國下野國沼津ニテ戰死

同 國下野國沼津ニテ戰死 尾花忠兵衛成善二十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 同斷

同 國下野國沼津ニテ戰死 兵卒山澤與四郎則義二十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 兵卒進藤常吉信勝二十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 小西令作氏聰二十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 松澤銀齋重次

同 國下野國沼津ニテ戰死 同

同 國下野國沼津ニテ戰死 兵士山田慎造正義二十九歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 夫卒已之助

同 國下野國沼津ニテ戰死 战兵青木德左衛門宣雪四十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 战兵蓑毛次右衛門直行二十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 小林忠助喜行三十六歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 鈴木庄作正勝三十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 長棹速巳長貞三十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 同士

同 國下野國沼津ニテ戰死 新江壽三郎克成二十歲

同 國下野國沼津ニテ戰死 結城藩 明治元年戊辰五月廿五日東

同 國下野國沼津ニテ戰死 佐土原藩 明治元年戊辰五月十五日東

同 國下野國沼津ニテ戰死 日駿河國沼津ニテ戰死

同 國下野國沼津ニテ戰死 同士

同 國下野國沼津ニテ戰死 黑羽藩 明治元年戊辰五月廿五日東

同 國下野國沼津ニテ戰死 白川堀田ノ役ニテ銃丸ニ當死農夫

同 國下野國沼津ニテ戰死 同士

同 國下野國沼津ニテ戰死 同士

復古外記

東海道戰記 第三十一 明治元年五月二十八日

二七七

同年五月廿六日陸奥國白坂驛ニ於テ戰死 同日同所ニ於テ重傷病院ニテ死

明治元年戊辰四月廿四日上野國三國嶺ニテ戰死

明治元年戊辰四月十九日下野國宇都宮ニテ戰死

明治元年戊辰五月廿一日相模國箱根山中ニ於テ戰死

明治元年戊辰五月二日下野國大田原城下ニテ戰死

明治元年戊辰四月十六日下總茂呂村ニテ戰死

明治元年戊辰四月廿一日相同斷

明治元年戊辰五月廿一日相野國大田原城下ニテ戰死

明治元年戊辰五月廿一日相同斷

明治元年戊辰五月廿一日相大田原藩

明治元年戊辰五月廿一日相模國箱根山中ニ於テ戰死

明治元年戊辰五月廿一日相荻野山中藩

明治元年戊辰五月廿一日相岩村田藩

明治元年戊辰五月廿一日相小野木守三幸寬

明治元年戊辰五月廿一日相使番大田原鐵之進晴親

明治元年戊辰五月廿一日相戰士久島惣太郎重義

明治元年戊辰五月廿一日相銃手長岡傳四郎秀久

明治元年戊辰五月廿一日相長岡彦右衛門長久

明治元年戊辰五月廿一日相士分土屋要助慶永

明治元年戊辰五月廿一日相竹村源九郎知足

明治元年戊辰五月廿一日相藤澤八作信正

明治元年戊辰五月廿一日相小林要右衛門

明治元年戊辰五月廿一日相足輕銃隊吉田善

明治元年戊辰五月廿一日相吉政明

明治元年戊辰五月廿一日相平士原田留三郎重義

明治元年戊辰五月廿二日下野國安塚村ニテ戰死

明治元年戊辰五月廿二日同斷

明治元年戊辰五月廿二日鹿奴藩

明治元年戊辰五月廿二日吹上藩

明治元年戊辰五月廿二日同斷

小室新一郎時教 吉重次
二十八歲

小林音一郎時教 吉重次
二十八歲

栗田左二右衛門定吉 吉重次
四十四歲

吉田勘兵衛盛一歲 吉重次
四十一歲

早川雄太郎永宣 吉重次
四十三歲

雨宮六五郎茂春 吉重次
三十八歲

寺村好太郎尙忠 吉重次
三十七歲

熊倉元吉 吉重次
三十五歲

田中伍右衛直 懇 吉重次
四十四歲

新井兼吉道成 吉重次
三十一歲

田中淺太郎利政 吉重次
二十三歲

高室治兵衛宗昌 吉重次
三十二歲

石脇鼎元繁 吉重次
三十二歲

岡山力之助延勝 吉重次
三十三歲

寺村好太郎尙忠 吉重次
三十九歲

熊倉元吉 吉重次
二十五歲

田中伍右衛直 懇 吉重次
四十四歲

新井兼吉道成 吉重次
三十一歲

高室治兵衛宗昌 吉重次
三十二歲

石脇鼎元繁 吉重次
三十二歲

岡山力之助延勝 吉重次
三十三歲

寺村好太郎尙忠 吉重次
三十九歲

熊倉元吉 吉重次
二十五歲

田中伍右衛直 懇 吉重次
四十四歲

新井兼吉道成 吉重次
三十一歲

高室治兵衛宗昌 吉重次
三十二歲

石脇鼎元繁 吉重次
三十二歲

岡山力之助延勝 吉重次
三十三歲

寺村好太郎尙忠 吉重次
三十九歲

熊倉元吉 吉重次
二十五歲

田中伍右衛直 懇 吉重次
四十四歲

新井兼吉道成 吉重次
三十一歲

高室治兵衛宗昌 吉重次
三十二歲

石脇鼎元繁 吉重次
三十二歲

岡山力之助延勝 吉重次
三十三歲

寺村好太郎尙忠 吉重次
三十九歲

熊倉元吉 吉重次
二十五歲

田中伍右衛直 懇 吉重次
四十四歲

新井兼吉道成 吉重次
三十一歲

高室治兵衛宗昌 吉重次
三十二歲

石脇鼎元繁 吉重次
三十二歲

岡山力之助延勝 吉重次
三十三歲

寺村好太郎尙忠 吉重次
三十九歲

熊倉元吉 吉重次
二十五歲

田中伍右衛直 懇 吉重次
四十四歲

新井兼吉道成 吉重次
三十一歲

高室治兵衛宗昌 吉重次
三十二歲

石脇鼎元繁 吉重次
三十二歲

岡山力之助延勝 吉重次
三十三歲

寺村好太郎尙忠 吉重次
三十九歲

熊倉元吉 吉重次
二十五歲

田中伍右衛直 懇 吉重次
四十四歲

新井兼吉道成 吉重次
三十一歲

圭山縣

明治元年戊辰五月廿三

武州高麗郡下
御用人足

馬場松吉三十歲 同斷

日飯能村戰爭之節死

於テ戰死

烟村農人足

馬場松吉十三歲

松下嘉兵衛家來

明治元年戊辰五月二十一

相模國箱根ニ

吉井顯藏之光
四十一歲

○諸道先鋒總督ヲ罷メシヲ以テ、大總督府白河口出征諸藩兵ニ令シテ、金穀ヲ本府會計局ニ仰ガシム。

東海、東山兩道先鋒總督府被廢、大總督府併合相成候ニ付テハ、白川口出張會計之儀モ、萬事大總督府會計局へ可被申出候、仍此段申達候以上。

五月廿八日

大總督府 下 參 謂

白川口出張 諸藩各中

慶應出軍雜記

○甲斐鎮撫府、書ヲ水野忠敬ニ下シテ、其林忠崇等ヲ逸スルノ罪ヲ責ム、尋テ、忠敬書ヲ上リテ、其亡狀ヲ陳謝ス。

○甲斐鎮撫府達書二通

自今甲府城代被 免候事。

○

水野出羽守

○

水野出羽守

白川口出張 諸藩各中

慶應出軍雜記

兼テ反賊林昌之助、其餘黨類被預置有之候處、遂ニ脱走、奉對官軍梗命猖獗而已ナラス、剩ヘ軍監和田藤之助宿所へ暗襲爲致候始末等、不取締ハ申迄モ無之、其方閻藩與賊徒内通候哉ニ相聞候、就テハ今般 大總督府ヨリ甲府城代被免候間、速ニ歸邑、向背相決、早々當府且東海道筋出張之官兵へ、可申出候事。

五月廿八日

東海道鎮撫府

以上甲斐鎮撫日誌
水野忠敬家記

○忠敬家記ニ云、五月廿九日、甲府公用向廣島藩へ引渡、即發足六月一日歸邑。

○先達テ私在所へ御預ケ被成置候反賊林昌之助、其餘黨類、遂ニ脱走仕、梗命猖獗而已ナラス、御軍監和田藤之助宿所へ暗襲仕候始末、不取締ハ勿論、閻藩與賊徒内通仕候哉ニ達 御聞候ニ付テハ、今般甲府御城代被 免候間、速ニ歸邑仕、向背相決、早々御當府へ申上、且東海道筋出張之官軍ヘモ可申出旨御沙汰之趣、誠以奉恐懼候、私儀當春勤 王遵奉之儀奉誓約候上ハ、家來共ニ於候テモ、毛頭右賊徒等ニ志ヲ相通シ候儀ハ無之筈ニ候得トモ、自己之見而已ヲ以テ申上候ハ、輕卒之段御差咎之程モ奉恐縮候間、速ニ歸邑仕候上、重臣ヲ始、弊藩一同、末々ニ至迄、篤ト糾問仕候處、始終一途之外異心之者ハ更ニ無之候、賊徒御預申脱走、御軍監宿所へ暗襲等之始末ニ及候不取締之儀ハ、家來共不束トハ乍申、畢竟私申付方不行届之次第ニテ、蒙御尋問可申上様無御坐候、實以恐懼至極奉存候、此上謹慎仕 御沙汰奉待候外他事無御坐候、且東海道筋下向之官軍柳川、阿州、唐津等へハ既ニ援兵ヲ乞、速ニ進軍之處、賊徒散亂、此程追々城下通行仕候間、都度々々家來共ヲ以始末申述候、右ニ付、向背之次第別ニ可申上儀モ無之、殆苦慮仕候、右等之件々宜御洞察可被成下候様奉懇願候、此上ハ右賊徒巢穴相分リ候ハ、速ニ出兵、先鋒被 仰付被下置候ハ、今日之不始末實效相立、一同御託奉申上度存念ニ御坐候間、此段御含被下置、宜 御恕察被下置候様奉歎願候、恐惶頓首。

慶應四戊辰年六月十四日

水野出羽守

甲府鎮撫府 柳原侍從殿 甲斐鎮撫日誌
水野忠敬家記

○先達テ出羽守在所ヘ御預被成置候反賊林昌之助、其餘黨類遂ニ脱走仕候付テハ、闖藩與賊徒内通仕候哉之奉蒙 御沙汰候段、誠以奉恐愕候、出羽守儀、當春勤 王達奉之儀奉誓願候上ハ、闖藩中賊徒ト同志内通仕候儀ハ素ヨリ無之、只管方轄一途之外、更ニ異心之者モ無御座候ニ付、今般出羽守證書ヲ以奉申上候得共、右賊徒御預以來既ニ數日ニモ相成、旁鎮靜ニ泥ミ、家來ハ萬一日用雜事之書通贈答仕候儀可有之哉モ難計、右様之儀御座候テハ奉恐入候間、此上私儀立歸、藩中再三嚴敷取糺、右等之儀御座候節ハ、出羽守方ニテ處置仕、御届申上候様可仕候、此段内々申上候間、愈御差含御執成之程奉懇願候、以上。

辰 六 月

甲府御鎮撫府 參謀

御役所 甲斐鎮撫日誌

○六月十七日ニ至リ、大總督府、忠敬ノ罪ヲ責メテ、謹慎ヲ命ス、參看スヘシ。

○總、野鎮撫府、下總、下野諸藩ニ令シテ、傍近ノ舊幕府領、及ヒ舊旗下士采邑ノ戸口、租入等ヲ檢覈錄上セシム。

○總、野鎮撫府管内諸藩へ達書

舊幕領並旗下之采地戸口稅入等之筋迄、藩々寢寄々タヨリ委敷取調、早急差出相成候様之事。

五 月 古河佐倉藩記

○諸藩ノ錄上書ハ之ヲ佚ス。

水野出羽守内 水野伊織

○甲斐鎮撫府參謀助役伏谷惇、沼津軍監和田勇ト俱ニ、松代、濱松、沼津、高遠、佐土原五藩兵及ヒ松下重光ノ兵ノ三島驛ニ戍スル者ヲ部署シ、三道並進シテ、箱根ニ至ル、賊兵既ニ潰散スルニ會フ、乃チ佐土原藩兵ニ令シ、東進シテ江戸ニ赴カシメ、明日、松代、濱松、沼津、高遠四藩兵ヲ率キテ、甲府及ヒ沼津ニ凱還シ、重光ノ兵ヲ三島ニ班ス、佐土原藩兵乃チ進テ小田原ニ至ル、豆相軍監三雲種方、令シテ本地ニ屯戍セシム。

○真田幸民家記ニ云、五月二十七日、駿州沼津城下到着之處、參謀伏谷又左衛門、軍監和田藤之助等ヲ初、列藩軍議之上、持口分配左之通、尤屯集之賊徒無之候ハ、豆州山中村へ相進ミ、猶軍議ニ可及旨口達、

豆州三嶋口 沼津藩 濱松藩

豆州桑原邊

松代藩

佐土原藩

駿州佐野口 高遠藩

松下加兵衛兵隊

○井上正直家記ニ云、五月廿七日、沼津表へ着、軍議之上、翌二十八日、諸藩ト齊ク函嶺へ進軍之處、賊先ニ散亂。

○内藤賴直家記ニ云、五月廿八日、相州神山村迄進軍之處、松下加兵衛様隊長吉田研之助ヨリ達、和田藤之助殿附屬ヨリ申聞候ハ、箱根屯集之内ヨリ、貳十人程伊豆佐野村へ落來候間、松下加兵衛様御人數、原田熊太郎様御人數、高遠人數ト合併、伊豆佐野村へ脱走之者追討、夫ヨリ箱根山へ進撃候様達有之、直ニ用意合併ニテ同所ニ致進入候、二十九日箱根宿へ着之旨、三藩一同ニ監軍和田藤之助殿參謀伏谷又左衛門殿へ申達候。

○島津忠寛家記ニ云、四番銃隊五月二十五日、吉原驛ニ到ル、然ルニ甲府ヨリ松代、濱松兩藩ノ兵隊、甲府總督ノ命ヲ受、富士川ヲ下リ、同ク此驛ニ陣ス、此ニ於テ共ニ參謀ノ陣ニ會議シ、同廿六日進テ沼津へ陣ス、夜又參謀ノ陣ニ會シ、則軍議ニ

隨ヒ、翌廿七日晚沼津ヲ發シ、松代藩ト合シ、三島驛ヨリ韋山道ヲ經テ桑原村ニ到ルニ、賊既ニ遁逃シ、一人ヲ見ス、日暮山中宿ニ到テ宿ス、補備役有馬彌左衛門、箱根ニ至リ、今日ノ始末ヲ參謀ニ告テ、尙兵ノ進退ヲ問フ、參謀曰、其隊ハ東行ノ兵也、今此ノ地稍無事、徒ニ此ニ日ヲ送ランヨリハ、速ニ東スルニ如スト、此ニ於テ廿八日拂曉、山中宿ヲ發シ、小田原ニ到レハ、豆相軍監ヨリ滯陣スヘキノ令アリ、滯陣中軍監ノ令ヲ受テ、城中ノ兵器等ヲ改ム。

○

松代藩
高遠藩
沼津藩
謀印
參
甲斐
眞田幸民
内藤賴直家記
水野忠敬家記
東海道副總督府
參
甲斐
眞田
内藤
水野
忠敬
家記
東海道副總督府
參
謀印
沼津藩
松下加兵衛

右、賊徒爲追討出張之處、賊及散亂候間、兵隊甲府表へ可被引取候事。

辰五月廿九日

○按スルニ濱松藩兵モ亦、松代、高遠二藩兵ト同一ノ達書アリシナラン、今見ル所ナシ。

○

右、賊徒爲追討出張之處、賊及散亂候間、兵隊沼津表へ可被引取候事。

辰五月廿九日

○
其兵隊、賊徒爲追討出張之處、賊及散亂候間、兵隊豆州三島驛ヘ引上ケ、同表可有嚴衛候事。

但シ、近傍廻方精々相心得、賊見掛次第可被打取候事。

辰五月廿九日

○二十九日鎮撫府達書
東海道副總督府
參
謀印
沼津藩
甲斐
眞田
内藤
水野
忠敬
家記
東海道副總督府
參
謀印
沼津藩
甲斐
眞田
内藤
水野
忠敬
家記

右、賊散亂ニ付、諸藩退軍候間、三島驛迄之人馬兵食賄方世話外、兩家申合可取計、其餘相心得候ニ不及旨申達候事。甲斐鎮撫日誌

○按スルニ、達書中、所謂兩家ハ江川英武、久世某郎^(三四)ヲ指ス。

○甲斐鎮撫日誌ニ云、六月三日、宮根邊屯集賊徒爲追討出張の伏谷又左衛門、今日歸陣。

○真田幸民家記ニ云、五月晦日、豆州山中村出發、六月四日甲府表へ歸陣、其段副總督府へ御届。

○井上正直家記ニ云、五月二十八日、函嶺へ進軍、一日在陣、同三十日退軍、六月四日着甲。

○内藤賴直家記ニ云、六月五日甲府表へ着之旨、參謀伏谷又左衛門殿へ申達候。

○大總督府へ上申書

過日御届申上候箱根屯集之賊徒爲追討、甲府表ニ罷在候出羽守人數二小隊、並松代藩、濱松藩、且又出羽守家來ヨリ援兵賴入候佐土原藩等、追々到着ニ付、去ル廿八日、右賊徒爲追討、卯上刻、御軍監和田藤之助殿任差圖、夫々人數繰出シ申候、然ル處弊藩人數之儀、東海道木瀬川迄前繰出シ置候兵隊連合小隊三組、大砲四門押出候處、引續三藩御人數モ繰出相成、且又石川又四郎殿人數並久世三四郎殿、安藤左京殿人數等ハ、三島宿ヨリ武器糧米等運送之護衛被申付、既ニ箱根山中迄登リ候處、賊徒共何レヘ散走致シ候哉、壹人モ不相見、^(皆カ)追々斥候之者申出候、乍併深山之儀、何レニ潛伏之程モ難計ト、一ト先山中村着陣之上、尙深ク探索爲仕候處、去ル廿七日、豆州熱海村ヨリ凡貳百四五拾人程乗船、房州の方ヲ向出帆致シ候趣、追々注進申出候付テハ、此上人數進退之儀、如何可仕哉之段、御軍監前同人へ承合候處、弊藩人數之内、二小隊丈ヶ箱

根宿迄爲相進、大砲四門、小隊一組ハ山中村へ殘置候様御下知ニ付、兩日同所へ宿陣罷在候處、夜中別紙ノ達書ノ上ノ二十九日付、今晦日箱根宿へ備置候人數悉ク相纏メ、午刻同所引拂、沼津表へ引揚申候、依之、別紙相添此段御届申上候以上。

五月晦日

水野出羽守

水野忠敬家記

二十九日、是ヨリ先、朝廷、三等陸軍將四條隆謫少、ヲ以テ駿府鎮撫使ト爲シ、親兵隊七番及ヒ津、郡山、岡、島原、杵築、人吉六藩兵ヲ率ヰテ之ニ赴カシム、是ニ至リ、徳川家達ヲ駿河ニ封セシヲ以テ、大總督府、隆謫ニ牒シテ、速ニ江戸ニ至ラシム、尋テ隆謫、岡崎藩兵ヲ留メテ駿府ヲ鎮セシメ、親兵及ヒ津以下六藩兵ヲ率ヰテ江戸ニ赴ク。

彌御安泰珍重存候、抑此度駿府爲鎮撫使御下向之由承候、大總督宮ニモ彼は御苦勞、思召候、扱德川御所置大監察使下向之上被仰渡、城地竝祿高下シ賜リ、駿府城主被仰付候間、此段爲御心得申入候、右ニ付駿河國一圓下賜候義ニ付、御鎮撫之義ニ及間敷候哉、早々當府へ御至着可有之候様、大總督宮被命候間、早々申入候也。

五月廿九日

大總督府 參謀

四條少將 駿道記概略

○四條隆謫事蹟ニ云、五月十九日、京都發途、御親兵七番隊藤堂和泉守人數、柳澤甲斐守人數、相良遠江守人數、松平但馬守人數、中川修理大夫人數、松平主殿頭人數等隨行被仰付候事。

六月四日、於金谷驛ニ、江城 大總督府ヨリ、五月廿九日出之來翰到着、仍同月六日駿府着陣、同八日同所發途。

○駿府鎮撫使達書

本多美濃守人數

此度當表へ御發向之處、箱根屯集之賊徒跋扈之趣ニモ相聞、且又兼テ三州裁判所ヨリ用意申付置候儀モ有之、旁人數出張被仰付候處、賊徒速ニ敗走、且大總督宮ヨリ 御沙汰之次第モ有之ニ付、更ニ江戸表御下向相成候、就テハ出張人數之儀、當表へ残被置候間、委細之儀ハ伏谷如水ヘ可承合様、御沙汰ニ候事。

六月七日 日本多忠直家記

○柳澤保申家記ニ云、五月、甲斐守人數、駿府城御警衛ニテ出兵仕候處、同所ヨリ尙又東京表迄、四條殿隨從被仰付、罷越候。

○六月十六日、隆謫江戸ニ至ル、參看スヘシ。

○是ヨリ先、朝廷、戸田忠友ニ謹慎ヲ命ス、是ニ至リ、大總督府、其父忠恕、越守勤王ノ實蹟アルヲ以テ、其謹慎ヲ釋ス。

御不審之儀有之、謹慎被仰付置候處、越前守儀、於國元勤 王之實效モ相立候儀ニ付、自今被免候事。

五月廿九日

大總督府 參謀

戸田忠友家記

戸田土佐守

○箱根ノ殘賊、伊豆網代村賀茂郡傍近ニ屯據スルノ聞アルヲ以テ、大總督府、江川英武ニ令シテ、

速ニ之ヲ誅夷セシメ、薩摩藩兵ヲ白河口ニ發遣ス、又箱根驛及ヒ湯本村等ノ兵燹ニ罹ル者ヲ賑恤ス。

頃日箱根邊之殘賊、豆州網代邊屯集之趣ニ相聞候ニ付、人數繰出シ、早々掃攘可致旨 御沙汰候事。

○慶應出軍戰狀ニ云、本府一番隊、五月二十九日江戸ヲ發シ、六月七日白川ニ至ル。

○

此度兵火燒失ニ付、村々へ御救米、軒別ニ一俵宛、合七十八俵被下置候事。

五月江城
日誌

○

一米七十八俵

右、先達テ湯本村始新谷、箱根宿燒失之家ヘ。

六月八日

門田九郎丞迄小田原
藩記

出張軍監

湯本村

箱根宿

同權現社領ヘ

江川太郎左衛門

○問罪使參謀河田景與、書ヲ大總督府ニ致シテ、大久保忠禮、伏罪ノ狀ヲ報シ、其處分ヲ稟請ス、批シテ軍監三雲種方及ヒ津藩兵ヲ留メテ、小田原及ヒ箱根ヲ鎮シ、速ニ師ヲ江戸ニ班サシム、景與、又沼津、岡崎二藩疑フヘキノ形跡アルヲ以テ、往テ之ヲ按問セント請フ、督府令シテ之ヲ止メ、其老臣ヲ江戸ニ召サシム。

向暑之節彌御勇壯被成御務奉大賀候、然ハ去廿五日午刻、大磯驛迄着陣、夕方加賀守家老岩瀬大江進、年寄蜂屋重太夫、留守居郡權之介、三ヶ條問罪御答トシテ罷出、謝罪之書面差出候得共、期限延刻ニ相成候上、一トシテ條理相建候儀無之、曖昧之事而已ニテ、不憚朝威次第、嚴敷叱付、御答不分明之義有之ニ於テハ、速ニ居城ヲ屠リ、加賀守始家來共不殘可致誅戮旨、御沙汰ニ候間、直ニ進撃可致間、早速罷歸リ、防禦之手當可致様申渡候處、大ニ恐縮仕、何分ニモ謝罪之實效相立候ニ付、寛大之御沙汰ヲ蒙リ度、只管嘆願仕候得共、強辨無益、速ニ立去リ候様申聞、追放申候、從是先、馬入ニ長藩、中原村ニハ備州藩小隊ヲ殘シ置、伊州、備州兩藩ヨリ一小隊宛、酒匂川之岸へ爲斥候隊進軍致候處、川役人共打寄、假橋爲懸居申最中ニテ、大ニ都合宜敷、早々進軍致シ候ニ付、諸隊不殘進軍、直ニ城下ニ入申候、備前藩ハ酒匂川上飯泉ト申處へ廻リ、夫ヨリ渡リ、同ク城下ニ入り申候、然ル處、大久保重役共正服ニテ出向、哀訴仕、暫時打入見合吳候様段々及嘆願候ニ付、攻撃見合セ入城仕候處、加賀守ハ菩提寺へ引取、謹慎罷在候段申聞候ニ付、直様參上可致旨申渡シ、彼是仕居候内罷出候ニ付、三ヶ條及糺問候處、一々奉恐入、全ク不明ニシテ奸臣ニ委任仕置、今日ニ至リ候段、重々奉恐入候、此上ハ如何様ニ被仰付候共、聊以申上譯更ニ無御座候得共、深悔悟仕、謝罪之實效相立、舉家出兵仕、先刻ヨリ賊兵ヲ追撃爲致居候ニ付、何卒寛大之御處置被仰付度旨、再三嘆願仕候ニ付、先攻擊相止メ、同人ハ菩提寺ニテ謹慎、居城請取、彈藥器械爲差出申候、且同人兵隊之者共ハ、先刻ヨリ箱根口へ出張致居候ニ付、爲點檢各藩一小隊宛尾行進軍。

一午ノ中刻ヨリ、大久保兵隊戰爭相始メ、五字二點迄砲戰致シ居候得共、勝敗不相分、同隊手負、即死、追々有之候ニ付、四藩申合、一時ニ進撃、四點之中、賊兵大敗、山崎村迄追擊致シ候處、日暮ニ及候ニ付、總軍ヲ纏メ大久保兵隊ヲ番兵ニ残シ、長、因兩藩兵隊風祭村屯集、備伊兩藩小田原迄凱陣仕候。畧

一右之次第ニテ出兵致候事故、器械取集、甚手間取り申候、依之、今日ハ大久保兵隊不殘引上、器械相揃ヘ候覺悟ニ御座候間、運送船早々御廻シ可被下候。

一謝罪實效相建候得共、家老年寄斬罪當然之儀ニ付、明日申渡候心得ニ御座候、首級ハ如何可仕哉、此段相伺候。一件々相濟候上、函嶺ニ兵隊相殘シ候哉、且軍監附屬之兵隊相殘シ不申テハ不相成儀ト奉存候、此邊モ相伺度候。

一市民撫育之儀ハ加賀守家來共、乍慎相勤、舊弊ヲ去リ、鎮撫之實效相立候様申付候。右之段御報知申上度如斯ニ御座候、昨日早々御報知可申上之處、今日ハ全功相立可申ト奉存候間、遲延候段、何共恐入申候、可然御取成奉頼候、以上。

五月廿八日

○批紙

一其地ニテ和船雇入可相廻候事、

一此方ヨリ斬罪之儀ハ先見合、加賀守ヘ三ヶ條之趣屹度及糺問、書付差出候上、當府ヘ可伺出候事、

一伊州出張之兵隊、當分之間其表ニ滯陣被仰付、三雲爲一郎爲軍監被差殘候條、小田原、函嶺等取締被仰付候事、

一今更此方ヨリ催促實功爲立候ニハ不及候得共、乍慎爲相勤不苦候事、

一家中之者一統歸家、謹慎被仰付候事、

一城中用意米其儘差置、加賀守家來共ヘ可被爲任置、官軍兵隊兵食之儀ハ是迄之通り、江川太郎左衛門ヨリ仕向被仰付候事。

五月江城日誌

○本日大村永敏、寺島直方ヨリ河田景與へ答書

別紙張書上ノ批紙ヲ指ス之通夫々御取計可被成、加賀守一通り問罪相濟候上、因、長兩藩御引揚可然候、函嶺、其外處々固所、伊州

藩ニテ手張リニ候ハ、乍慎小田原兵隊相用可被申候、其兵隊ニハ小銃渡シ不遣候テハ不都合存候、御考合之上御取計可被下候、其段申達候、已上。

月 日東征總督記

○景與ヨリ永敏、直方ニ遣ル書

當城小田原城之儀ハ降伏、脫走之賊兵ハ退散仕候得共、沼津、岡崎兩藩共、野心有之候儀判然御座候、其趣ハ昨日生捕候賊兵及白狀、其上幽嶺ニ残シ有之處之賊之書翰中ニモ、慥ニ四十人計岡崎藩出兵致居申候、右ニ付尙又當藩小田原藩家老吉野大炊介及糺問候得ハ、確證ヲ得可申ト奉存候間、家老兩人共、明日之處尙又糺問可仕心得ニ御座候、右之次第ニ付、沼津、岡崎共即今謹慎致居候共、後日之處難計奉存候ニ付、前條之次第ニ付、無之場合ニ決定致シ候得ハ、早々進軍問罪致度奉存候間、至急ニ御下知奉待候、右迄如此御座候、以上。

五月廿八日上下署○東征總督記

○永敏、直方ヨリ景與へ答書

今朝委曲御答ニ及置候處、又々御飛札到來、承知致シ候、先小田原鎮定ニ相成候ハ、沼津、岡崎兩藩之家老被召連、御歸陣可然、當府ニ於テ糺問致度候、伊豆網代殘兵ハ、江川太郎左衛門一手ニ進討被申付候間、其段御承知可被下候、爲此申入候以上。

尙以委敷ハ先書申入置、以上。

五月廿九日東征總督記

○按スルニ、沼津、岡崎ニ藩老臣召喚ノ顛末ハ、諸書見ル所ナシ、又景與、六月八日ヲ以テ師ヲ江戸ニ班ス、參看スヘシ。

○一橋茂榮、田安慶頼及ヒ東叡山ノ僧侶等、書ヲ大總督府ニ上リ、入道公現親王ノ爲ニ恩宥ヲ

請フ。

不顧恐惶茂榮、慶賴以連署奉謹白。御軍門候、抑日光。御門主御事ハ順良慈善之御性來ニ被在候段ハ、嘗テ御承知可被在御儀、然ルニ役僧之内ニテ如何之所存ニ候哉、兼テ。御門主之御賴ニ依、山内御守衛仕居候彰義隊之者共、亦ハ諸家脱籍之激徒等相結、多人數山内ヘ屯集、往々不穩舉動モ御座候由ニ付、若右輩之振舞等ヨリ、折角。御疑念相晴候慶喜赤心無ニ之實行水泡相成候テハ、臣子之情遺憾無極儀ト、私共始役方之者共深心痛仕、最前ヨリ百方往復、鎮撫手ヲ盡候得共、僧俗銘々私見ヲ主張致シ、容易承服不仕、遂ニ今般奉煩。王師候次第二立至リ、無據場合トハ乍申、微力之私共不行届之段、何共以奉恐入候儀ニ御座候、隨テ右之者共儀ハ、御沙汰之通、朝廷寛大之御趣意ヲ不奉、慶喜恭順之意ニ背、其罪不輕御座候得共、御門主御事ハ猶御若齡ト申、殊ニ前件之御性質、一時群下過激之勢炎ヨリ御鎮壓難被成、不得已御屈從相成候迄之御事ニテ、其實被對。天朝御別心不被在儀ハ、衆人之所共知ニ御座候間、此度之一舉ニテ、向來萬々一不測之御艱難ニモ被會候様ニテハ、御同所之御心情モ御傷敷、且、皇國之御不祥、蒼生之悲歎言語ニ罄兼候事共ニ付、何卒格別之御明鑒ヲ以テ、右情實、御照察、御門主御身上之儀ハ、何方マテモ御安泰被在候様、厚ク。御廟議被成下候様、茂榮、慶賴差向之懇禱、他事無御座候、依之、不憚嚴威、此段建言仕候、以上。

慶應四年戊辰五月

一橋大納言茂榮花押

田安中納言慶賴花押

德川茂榮家記

○茂榮家記ニ、五月廿九日、大總督府ヘ、徳川家達家來ヲ以テ差出ストアリ。

○當山之儀ハ爲奉鎮護國家、玉體安穩、寶祚延長、勅許之上創建有之、奏請、皇子管領之宮ト被定候御室柄之儀ニ付、奉

對公武聊御隔意不被在候ハ申迄モ無之、畢竟ハ東照宮之勳功厚被思召候間、從朝廷宮號宣下以來、連年輪王寺宮御相續之御事ニ御座候得共、勤王之儀ハ申上候迄モ無之、既ニ當二月駿府城迄爲慶喜公謝罪、宮御方御出張、直様爲御伺天機御上洛可被成思召之處、大總督宮様ヨリ一旦御歸府被成候様、御沙汰有之、其後彌御上京日限迄被仰出候處、市中其外一統動搖之次第ニ付、無餘儀暫御延日ニ相成候條ニテ、御隔意無之事ハ分明ニ御座候、且慶喜公入山之儀ニ付テハ、哀訴等厚御賴有之候得共、御境界御不案内之儀ニ付、再度迄御斷被仰入候得共、只管御賴有之、田安、一橋兩卿ヨリモ厚御賴並譖代之諸藩一統同様賴ニ付、旁諱慎恭順之道貫徹候様御配慮、深ク御盡力被爲在候儀ハ、一同敬承罷在候、然ル處去ル十五日之事件ニ及候段ハ、誠ニ意外之次第ニ立至リ候哉、宮御方思召ニハ毛頭有之間敷、學頭初一山衆徒、坊官、御家來等ハ更ニ事柄不相辨、誠ニ危急ニ相迫リ候間、御立退場所モ不相定、終ニ御行衛モ不相知場合ニ成行候ニ付、一山當惑悲歎罷在候間、右等之事情厚御憐察被成下、宮御方御安堵ニ相成候様、出格寛典、御沙汰被成下度、涕泣奉歎願候、右等之趣急速ニモ可奉哀訴候處、宮御方御在所モ不相知候ニ付、數日延引ニ相成奉恐入候得共、不得已此段奉懇願候、猶此上精々御行衛御尋可申上候間、前條之次第宜御執達之程奉願候、以上。

上野一山總中
御門主御家來 中

靜岡藩記

○以上二條並ニ批紙ヲ佚ス、本條ノ月日モ亦詳ナラス。

○大總督府參謀正親町公董、舊先鋒總督府參謀木梨恒準等京師ヨリ至リ反命ス、江戸府知事
烏丸光徳、三等陸軍將鷺尾隆聚侍、モ亦至ル。東征總督記

復古外記 東海道戰記 第三十一 明治元年五月二十九日

二九三

晦日、今市驛傍近、賊勢猖獗ナルヲ以テ、總、野鎮撫鍋島直大、從兵ヲ發シテ今市ノ官軍ニ應援セシム、因テ書ヲ大總督府ニ上リテ、其狀ヲ申ス。

野州今市邊賊徒切迫之様子ニ付、侍從内兵隊三小隊、爲應援出張爲致候條、御旗御下渡被下度奉願候、以上。

五月晦日

肥前侍從内 深川亮藏

野州今市邊賊徒切迫之様子ニ付、侍從内兵隊三小隊程爲應援出張爲致候、此段御届申上候、以上。

五月晦日

鍋島直大家記
長尾藩記

○直大家記ニ云、右之末、御旗一流被相渡候。

○林忠崇等、海ニ航シテ逃走セシヲ以テ、田中藩兵ヲ清水港ニ出シテ、之ニ備フ、是日、書ヲ大總督府ニ上リテ、其狀ヲ申ス。

當節沼津表ヘ謹慎罷在候關東脫走之徒、當十九日及暴動候ニ付、水野出羽守家來之者ヨリ兼テ申合置、注進有之候間、依之、探索之者同所迄差出、注進次第出兵之手筈申付置候處、昨廿九日參州裁判所判事補足助衛人當宿通行致、家來之者被呼出、脫走暴動之儀ニ付被相尋、手筈之儀申上候處、不取敢出兵之儀、伏谷如水ヘモ申談可取計旨被相達候ニ付、申談之上、一小隊富士川邊間道へ及出兵候處、其後暴動之徒、當廿七日豆州熱海邊ヨリ船へ乗込敗走之趣、探索差出置候家來之者ヨリ申越候ニ付、右人數不取敢清水湊へ差向置申候、此段御届申上候、以上。

五月晦日

本多紀伊守
長尾藩記

○

五月晦日御届申上候通、清水湊へ一小隊差出置候處、關東脫走之徒、總、房邊へ差向候趣、探索之者ヨリ申出候之間、右人數清水湊引揚、尙又有渡郡西島村海邊、並山之手安部郡井宮村へ分隊人數差出申候、此段御届申上候、以上。

六月五日

本多紀伊守

長尾藩記

是月、大總督府、大久保忠禮ニ命シテ、伊豆、相模二州、政令傳達ノ事ヲ管セシム。

大久保加賀守

右、豆、相兩國回達頭被仰付候事。小田原藩記

○監察使、東山道總督府軍監岩村高俊精一郎、土佐藩士、ヲ以テ、其軍監ト爲ス。

○監察使、岩村高俊事蹟、達書

○監察使府軍監被仰付候事。岩村高俊事蹟

○時ニ高俊越後關原ニアリ。

○徳川家達、書ヲ大總督府ニ上リ、舊幕府雇フ所ノ佛國陸軍教師ノ措置ヲ稟請ス。

御國兵力更張之タメ、去ル寅年中佛蘭西國帝ヘ相頼、陸軍教師上下士官共、都合拾七人、同國帝ヨリ差越有之候處、當今形勢ニ相成、於弊藩素ヨリ相雇候譯柄ニハ參リ兼候間、右教師進退之儀、於朝廷可然御處置被成下候様仕度、尤今般佛國公使新着相成申立候ニハ、當時御國之儀ハ局外中立之法ヲ取計候間、教師之儀モ先其儘差置可申上ト、佛國帝ヨリ申付越候段申聞候、就テハ教師拾壹名七力、給料別紙之通ニ御座候間、御國當四月分迄ハ於弊藩相渡申候儀ニ付、向後之處、同國公使ヘ御引合之上、可然御取計被下置候様仕度、此段奉伺候、以上。

復古外記 東海道戰記 第三十一 明治元年五月是月

二九五

復古外記

東海道戰記

第三十一

明治元年六月朔日

徳川龜之助家來 淺野次郎八 河野左門 大久保一翁

○別紙

教師給料規則、

壹ヶ月

一佛銀 三千フラン^(マ) 總督 壱人

壹ヶ月

一同 壱萬フラン^(マ) 上等 五人

但壹人一千フラン^(マ)

壹ヶ月

一同 七千七百フラン^(マ) 下等 拾壹人

合貳萬七百フラン^(マ)

右ハ、教師給料壹ヶ月分、書面之通ニ有之、當節御國四月分、西洋五月分迄相渡申候、以上。

辰五 月^{静岡藩記}

○本條、批紙見ル所ナシ、按スルニ七月二十五日ニ至リ、神奈川府知事東久世通禧、佛國公使ニ移書シテ、教師ヲ罷歸ス。

六月朔日、大總督府、金穀ヲ出征諸藩ニ下付シテ、各自藩兵ノ糧餉ヲ措辨セシム。

○諸藩へ達書

六月朔日ヨリ各藩手賄ニ焚出シ被仰出候、付テハ右金穀、來ル晦日大總督府會計局ニオイテ渡方取計候付、各藩人數書

取調、明廿八日申ニ、大總督府御使番へ可被差出事。
一人數書差出候上、人數之内上京並出兵歸國等致候者有之候ハ、都度々々届書、是亦御使番へ可被差出候、

一人數差出之節モ、前同様可被指出候、

此廻狀、早々順達留ヨリ、因州上邸預リ役所へ可被返候事。

辰五月廿七日

大總督府

會

計

局

松平乘命家記

大久保忠告筆記

岩邑藩人數書

一總人數七拾壹人 但シ中間小者迄
外ニ乗馬壹疋

右ハ今般金穀被下置候ニ付、自分焚出シ被仰出候付、總人數之儀御届申上候。

五月廿八日

岩邑藩

力丸

元長

松平乘命家記

○兵員上申書、岩村藩ノ外見ル所ナシ。

元 東海 東山 之

諸藩

ヘ

兵食之儀ハ、明朔日ヨリ藩々手賄ニ被仰付候間、早々總督府會計方へ可承合候事。

五月晦日^{大久保忠告筆記}

○是ヨリ先、奥羽鎮撫總督九條道孝、仙臺ニ次シ、副總督澤爲量位、ヲ遣シテ莊内ヲ討ス、是ニ

至リ、爲量、能代驛出ニ次シ、書ヲ大總督府ニ致シテ、莊内征討ノ狀ヲ報シ、軍艦ヲ野代港ニ發遣センコトヲ請フ、尋テ越後口總督高倉永祐等モ亦、督府ニ牒シテ奥羽ノ形狀ヲ報シ、軍艦ノ發遣ヲ促ス。

大總督王益御機嫌能被爲成、恐懼奉存候、隨テ貴君方大暑之節、御安泰ニ軍事御勤仕奉恐賀候、抑此度長藩藤村祿平ト申者差登候間、去四月以來仙臺之條々、委細御聞取願入候、實ニ何レトモ通路梗塞、誠苦心仕候、萬事御聞取願上候、何幸秋田野代ヘ蒸氣船御廻シ之様御都合奉希入度、猶可然奉待御沙汰、仍早々如此候也。

六月一日

追テ、差急亂筆高免願入候、別紙入高覽候也。

爲

量

大總督府 參謀御中

○別紙

一四月十日羽州庄内へ發向可致指揮様、總督府ヨリ御達ニ相成、此段御請申上候、

一同十二日仙臺表出立、

一同十七日羽州上之山城下へ着、

一同十九日天童城下へ着、

一同廿三日新庄城下へ着、此日酉半刻、薩、長兩藩兵隊清川口へ繰出シ、

一同廿四日卯刻ヨリ戰爭相始、未半刻兵隊繰引、

一閏四月四日庄内勢、天童城下へ押寄、放火防禦不行届之注進有之候ニ付、同七日巳刻柳澤繰出シ、賊軍追々引去リ、尤筑

一同廿九日新莊表ヲ發陣、

一五月三日仙臺、米澤之兵、新莊へ押出候事、

一同六日院内口ヨリ庄内人數少々押出シ、探索等致シ居候趣、

一同廿二日ヨリ仙臺國境嚴重ニ相固メ、總テ通行差止候事、

一同廿三日矢島秋田勢、竝生駒勢、増田邊ニテ朝四ツ時戰爭、百宅へ繰引イタシ候事、

一同廿四日上杉人數凡三百人餘、山形ニテ宿陣イタシ、廿六日上之山へ繰上候趣、尤仙臺モ合兵之風聞ニ御座候、

一同廿九日新莊表ヲ發陣、

一五月三日仙臺、米澤之兵、新莊へ押出候事、

一同十六日秋田領内大館驛へ着、此所ニテ廿七日迄滯陣、

一同十一日森岡宿へ着、

一同廿七日大館發陣、同日能代へ着仕候、此所ニテ滯在仕居候、

右ハ、荒猿之分申上候。東征總督記 鐘臺日誌

○ 大暑之節、彌御安全、日々軍務御多端御苦勞存候、抑當手賊軍強盛之處、長陣勞兵、援兵モ少ク難澁之折柄、奥羽澤三位隨從兵隊之内ヨリ、密使到着、彼地形勢切迫、其上彈藥器械困窮之旨ヲ以、當手へ合力申來候得共、於當府モ同様之仕合、依之、長藩尾川彌一郎、肥原惣助、右兩人横濱表へ彈藥器械買入旁罷越候間、猶其御地ニテ可相頤儀モ御座候ニ付、委細御聞取可給候、且又軍艦壹艘秋田近海へ御廻シニ相成候様希入候、奥羽兩國之内、佐竹家而已勤 王官軍ニ歸シ候由、猶委細ハ右兩人ヨリ御聞取可給候、此段宜早々御取計伏テ仰願候也。

六月十四日

隆
永
祐

○甲斐鎮撫府、甲府出征諸藩ニ令シテ、其兵員ヲ錄上セシム。

○諸藩兵へ達書

當所出張各藩兵隊之人員並夫方ニ至迄、委敷附印^{記力}、至急可被出旨 御沙汰候事。

六月朔日

鎮撫府

公

眞田幸民家記
謀

望

○甲斐鎮撫日誌ニ云、六月三日當地滯在之各藩ヨリ差出人數書

一兵隊 百二十三人

一小者六十二人

合百八十五人

一兵隊 小者 八人 當國古關へ出張

一兵隊 百十三人

一夫之者 二十七人

合百四十人

内兵隊 二十五人 夫方 九人 斥候 四人 原村湯治場出兵

兵隊 二十一人 夫方 八人 上小田原村へ出兵

兵隊 二十二人 同 九人 同 四人 川浦へ出兵

中

津

藩

高

島

藩

一兵隊 五百十九人

一兵隊 百七十五人

一夫人 三十二人

合二百七人

内兵隊 十一人 夫人二人 谷村へ出兵

一兵隊 百四十六人

一夫人 三十八人

合百八十四人

内兵隊 十五人 夫方 五人 上野原驛へ出張

同 十五人 夫方 五人 勝沼驛へ出張

同 百六人 夫方 二十六人 八王子驛へ出張

一兵隊 百九十二人

一夫方 七人

合百九十九人

内兵士 叴四人 山中へ出張

一兵隊 四十三人

一小者 十九人

一兵隊 二百五十六人

一夫之者 二百六十三人

合五百十九人

一兵隊 百七十五人

一夫人 三十二人

合二百七人

内兵隊 十一人 夫人二人 谷村へ出兵

一兵隊 百四十六人

一夫人 三十八人

合百八十四人

内兵隊 十五人 夫方 五人 上野原驛へ出張

同 十五人 夫方 五人 勝沼驛へ出張

同 百六人 夫方 二十六人 八王子驛へ出張

一兵隊 百九十二人

一夫方 七人

合百九十九人

内兵士 叴四人 山中へ出張

一兵隊 四十三人

一小者 十九人

合 六十二人
一銃隊 四十人

犬 山 藩

二日、大總督府、諸藩ノ戰死者ヲ江戸城中ニ祭ル。

處々戰場討死並陣中病死之者一同、招魂祭被成降之旨 大總督宮 御沙汰候條、厚思食之段、各藩隊長ヨリ其子弟へ可申通様、總督府被 仰出候事。

後四月廿八日

東海道總督府 參

謀印

先鋒十三藩 各隊長中東海道先鋒記

○從軍諸藩へ達書
今般兩野、總、房、武、奥州之箇所ニテ令戰死候輩、來月二日已刻御城内大廣間ニ於テ、招魂祭被 仰付候條、諸藩隊長、司令士登城拜禮被 仰付候事。

五月廿八日

大總督府 下 參 謂

祭式掛 河 鰐 大 夫
祭主 渡邊清左衛門

太田鉢太郎

池田庄三郎

祭式御用掛 桑 原 真 清
祭主 大久保初太郎

岡山津和野藩記

○朔日再達書

今般兩野、總、房、武、奥州數箇所ニテ致戰死候輩、明二日巳刻御城内於大廣間、招魂祭被 仰出候條、諸藩隊長、司令士、登

城拜禮被 仰付候事。
六月 日誌

○河鰐實文事蹟ニ云、兩野、奥羽戰死之輩、招魂祭御用掛被 仰付候事。

○東征總督記ニ云、六月朔日、河田精之丞、招魂祭式懸被 仰付候事。

○

招魂祭次第、

一當日早旦神座敷設、

其儀、祭主率副主祝部後取等之諸司參殿、使後取置高案敷資設靈床及諸官之版位、

次辰牌修祓禊、

其儀、祭主奉招請祓戸四柱神、讀大祓詞、以祓弔祓殿上之四方、蒔米散鹽、

次副主置神璽、建神籬、

紙莖者、插

次招魂詞、

其儀、祭主進靈床前、微音唱招魂詞、畢而後取以笏擊節兩段、

次大總督宮及公卿諸侯進著殿之北方上段版位、

神事總裁著於一之間北方隅、以下諸司及書記著於二之間北方坐、祭主副主對諸司著南方坐、諸藩隊長司令士等群集於三之間、伶人坐於一之間入口、其他參謀軍監以下分南北列坐、

次祝部執玉串授副主、々々取之奉靈前之案上、伶人發物音、

次獻供物、

其儀、祝部以下諸司各列立傳供、畢而伶人止樂、祝部以下歸坐、次、總裁捧祝詞授祭主、々々受之、直進于靈床前讀祝詞、畢歸坐、懸卷毛恐支令旨乎以宣波。天皇我大命世_{爾廣}宣久鷄我啼吾嬬乃國爾不奉仕不禮慶喜我罪乎問止_{波世}宣賜豆大總督乎始米道々乃軍乃總督爾任乃隨爾日月乃大御旗乎降令賜比將士乎依志賜倍隨留_禮。皇御軍波倭文手纏身毛棚不知勇美健良山往婆草生屍止荒山乃嶮岨支坂毛駒乃爪岩根左具久美海行波水付屍止八重浪乃逆卷灘毛大船爾真梶繁貫進爾進米野乃原乃薄乃吹風爾靡我如久其魁首慶喜波兼豆恐美悽惶豆服從婆_禮江戸乃大城爾入_{之加}道不知醜乃奴乃五月蠅成驕競豆大雪乃亂_々留如久浮雲乃散我_禮如久東乃國諸乃道此處乃隈彼處乃岳爾屯志集豆尙毛_禮。皇御軍爾射逆比奉留形勢乎聞食豆御軍乎班遣志彼乃山乃曾岐此河乃瀬爾追拂討知客豆速氣功志成勢御軍乃中波痛手負豆自罷奴_禮人等有利聞食豆兵士等乃身毛棚不知伊曾志美仕奉志功_爾如此大支業波成志得志物止當昔楠乃安曾我國乃爲爾仕奉之勞爾_{夜世}自登思保之米_{都々}歡賜比悲賜比御音哭志賜波久宣。

辭別氏宣波恐支臣等乃如此身乎捨豆勞支仕奉留事婆_禮朝夕夜晝止不久歎賜比悲賜比辛美痛美御坐爾_{麻須}依豆伊加泥其魂乃往方乎後輕久心毛安穩爾思比安息_{麻留}慰米賜比鎮米賜半爲豆此殿內乎假乃靈床止齋定米神籬成須榮志立今日乃御饗止備留物波青海原爾住物波鰐乃廣物鰐乃狹物大野乃原爾生留物波甘菜辛菜毛乃和物毛乃荒物爾至泥如橫山雜取備倍此乃千代田乃片山爾生立留五百枝榮木乎折取豆明和幣照荒幣乎取付宇頭乃太玉串止持添豆備賜布大御幣吊乎足幣吊乃豐幣吊止令請豆此乃靈床爾招奉多兵士乃幸御魂奇御魂天翔里國翔里_禮天皇我御代婆常磐爾堅磐爾守良幸比奉仕留臣等乎始豆此乃_禮大城爾集比候良御軍乃內乃人々_萬彌勤米勤米彌猛比_爾猛與止_米宣給布令旨乎宣留

次、大總督宮起坐、進靈床前拜、

次、公卿以下順次起坐拜、各藩之隊長以下者進于二之間、向靈前拜、又掛大總督宮歸坐、拜畢而宮公卿退出、總裁獨在坐、

次撤供物、

其儀、伶人奏樂、祝部以下傳供如獻供之時、畢而後取擊節亦如初、

次賜神酒乾魚等之直會物于各藩隊長司令士等、

次送神靈詞、

其儀、祭主著靈前坐、微音唱送神詞如招魂之儀、

各退出_錄。祭儀

○鎮臺日誌ニ云、六月二日、諸道戰死之者、招魂合祭、於大廣間修行、其式如左。

其日ノ平旦祭主祝部ノ諸司等、先出殿、後取等ヲシテ諸席ヲ定メ、簾薦ヲ敷シム、辰ノ刻先祓ヲ修ス、畢テ介添靈床ニ神聖ヲ居、榦ノ小枝ヲサシ、假ノ神籬ヲ造ル、造リ訖レハ祭主坐ヲ立テ靈床ノ前ニ向ヒ、微音ニ招魂ノ祝詞ヲノル、招魂ノワサ畢レハ、後取節ヲ打コト兩段、大總督宮次ニ公卿諸侯方進テ殿ノ北方ノ上段ニ列坐シ給フ、神事總裁ハ一ノ間ノ北ノ端ニ着シ、祭式掛ノ人々並書記ハ二ノ間ノ北方ニ座ス、祭主介添ハ向ヒテ南方ニ座シ、各藩ノ隊長、司令士等、三ノ間ニ群集ス、樂人ハ一ノ間入側ニ座シ、其餘下參謀、軍監等之人々南北カタ々ニ別レテ列座セリ、座定マリテ後、祝部一人玉串ヲトリテ、介添ニ渡ス、介添轉シ取テ、直ニ靈床ニムカヒ奉幣ス、捧畢テ樂人樂ヲ起ス、祝部等入側ニ順立シテ供物ヲ轉進ス、奉幣ノ儀ノコトシ、捧畢ノ祝部等二ノ間ノ入側ニ列座ス、樂人樂ヲ止ム、總裁令旨ヲ捧ケテ祭主ニ渡シ給、祭主進テ令旨ヲ奉戴シ、直ニ進テ靈床ノ前ニ立、高聲ニ令旨ヲ宣フ、ノヘ畢テ令旨ハ傍ノ臺上ニ居、本座ニ着ス、畢テ大總督宮御座ヲ立タマヒ、靈床ノ前ニ向ヒ再拜、拍手シタマフ、次ニ三條左大將以下公卿方順次ニ席ヲ立テ再拜シタマフ、畢テ各藩ノ隊長、司令士等二ノ間ニ進テ靈床ヲ拜シ、又大總督宮ヲ拜ス、衆拜シ畢テ本座ニツク、大總督宮公卿方ミナ退入シタマフ、總裁ヒトリ本座ニアリ、祝部等座ヲ立テ前ノコトク順立ス、樂人マタ樂ヲ起ス、供物ヲ撤スルコト、獻スル儀ノコトシ、撤シ畢レ

ハ樂人樂ヲ止ム、後取節ヲ打コト兩段、祭主、介添立テ退入ス、樂人亦立テ退入ス、儀式畢テ後、改メテ各藩隊長並司令士ヲ列座セシメ、神酒乾魚ノ供物ヲ賜フ、祝部後取之輩、此儀ヲ掌ル、畢テ各藩人退出ス、祭主マタ靈床ノ前ニムカヒ、微音ニ送靈ノ祝詞ヲ述ル、此儀畢テ總裁退出シ、祭式掛ノ人、自餘ノ諸司コトコトク退散ス、然シテ後祝部等マタ退出ス。

○東征總督記ニ云、六月二日、五ツ時半頃ヨリ、於大廣間招魂祭式被行候ニ付、宮様始堂上方不殘御出座有之、式終テ御拜禮被遊、夫ヨリ諸藩隊長、司令士拜禮相濟、神酒赤飯被下候事。

○大總督府、使番河田景福ヲ以テ、使番取締ト爲ス。

○河田景福へ達書

使番取締被 仰付候事。

大總督府 參

河田景福履歴書

謀

○神奈川裁判所總督東久世通禧、重ネテ書ヲ大總督府ニ致シ、精兵ヲ發シテ横濱ヲ守ラシメント請フ、督府乃チ肥後藩兵ヲ遣シ、紀伊藩ニ代リテ、本地ヲ警守セシム。

一輪呈上候、新暑難堪候、彌御清重珍重存候、然ハ先達ヨリ毎々横濱警衛兵隊之義御掛合ニ及候得共、御縕合出來兼候趣御座候處、今日京師ヨリ三國、不ニ兩軍艦多人數到着致ヘク、冲合通行見懸ケ候、右人數到着候得ハ、是非共紀州藩現存人數之上ヘ、百人御指越不被下候テハ、警衛向行届兼候、強チ横濱地所計ニ無之、肥前人數在港節ハ、横濱ヨリ十里四方地方巡邏爲致有之候處、先日來右之儀モ廢絶致、別テ脱走兵士潛伏之憂モ有之、僻地之村落ヲ脅シ、良民ヲ惱ス之訴訟等モ有之、且又外國人遊歩之地所ハ、夫々見分致置候ハステハ外國人懸合ニモ不都合ニ有之、旁右之巡邏等爲致候積リ、紀州計ニテハ行届不申、每々申上候通り、此度ハ御縕合是非共ニ百人御越無之テハ如何様之御面倒出來モ難計候、先日モ申上候通り、肥

前二天隊御取上之替リ候得共、百人計御縕合ハ是非共相願度候。中略、

一度外國人ヨリ、ドル之儀申立事、井關齊右衛門出府爲致候、御嚴令被下度、警衛人數之儀モ同人ヨリ御聞合可被下候、一先便西郷吉之助ヘ御相談、威權有之藩ヨリ役人壹人御指越可被下申上候、御相談可被下候、先ハ早々要用而已、海恕是祈。

五月廿九日

大總督府 參謀御中東征總

○東征總督記ニ云、六月二日、肥州藩三百人横濱警衛被 仰付候事。

八日横濱出張、紀州藩、肥後藩ト交代相濟、引取候旨届出ル。

○細川護久家記、七月二十二日上申書略ニ云、兵隊四百人餘横濱表爲警衛差出置候、但三百人ト御達有之候處、見張番等所々へ差出、及不足候付、追々本文之通差出申候。

○是ヨリ先、東山道總督府、壬生藩ニ命シテ、板倉勝靜ノ、臣隸ノ日光ニ在リテ降ヲ乞ヒシ者五十人ヲ、江戸ニ護送セシム、是日、江戸ニ至ル、大總督府乃チ紀伊、因幡二藩ニ命シテ、之ヲ保管セシム、尋テ降人ニ令シ、藩ニ歸リ謹慎シテ朝裁ヲ待タシム。

○鳥居忠文家記ニ云、五月二十五日、東山道總督府軍監ヨリ、曾テ御預板倉伊賀家來、江戸表因州藩屋敷迄可差出旨、參謀ヨリ達有之、同廿九日御預人板倉伊賀家來板倉内匠初筆五拾一人、本日江戸へ差立、物頭大澤齊以下四十七人警衛シ、六月朔日江戸ニ着、大總督府下參謀差圖ニヨリ糺問局へ引渡ノ儀申入、故障ノ旨ニ付、猶伺之上、同二日紀藩へ二十六人、因藩へ二十五人引渡、大小刀雜品共兩藩へ渡。

復古外記 東海道戰記 第三十一 明治元年六月二日

三〇七

○

是迄鳥居丹波守へ御預ケ相成居候板倉伊賀家來之内二十五人、今日ヨリ當分之處、其藩へ御預被仰付候事。

六月池田輝
知家記

○輝知家記ニ云、六月二日夕、右御預ノ者江戸表着、八代洲河岸副邸へ差置、致警守候事。

○七月十一日達書

因州藩
紀州藩

其藩へ御預ニ相成候板倉伊賀家來、一兩日之内海路歸國被仰付候間、此段申達候事。

○七月十二日達書

因州藩

其藩へ御預ニ相成候以下上文
同ジ。

七月東征總
督記

○七月十五日達書

板倉伊賀
家來五拾一人

右歸國之上謹慎罷在、追テ天裁ヲ可待候事。東征總
督記

○東征總督記ニ云、七月十五日、先般板倉伊賀家來五拾壹人、因州、紀州兩藩へ御預ケ相成居候處、歸國被免、五月丸乘組之

○先般日光伐入之節、板倉伊賀主從、彦藩之軍門へ降伏、依テ伊賀父子ハ宇都宮へ御預ケ、家來五拾壹人ハ壬生へ御預ケ相成居候處、其後宇都宮戰爭之節、混雜ヲ伺ヒ、伊賀父子ハ會津へ脱走、家來五拾壹人ハ壬生ヨリ江府へ送リ來リ候、依テ今般別番上ノ達書
指ス之通申渡シ、歸國爲致候間、於其御地可然御取計可被成候、以上。

七月十五日

大村益次郎

尚々四人之儀ハ、於浪花備前留主居へ御沙汰被成下御引渡可被下候、以上。東征總
督記

○新發田藩士ノ江戸ニ在ル者、書ヲ大總督府ニ上リテ、本藩、奥羽賊徒ノ脅迫スル所ト爲リ、兵ヲ出シテ之ニ黨スルノ聞アルヲ申シ、謹慎シテ罪ヲ待ツ、批シテ之ヲ停メ、後報ノ到ルヲ俟タシム。

誠之進家來井上榮之丞ト申者、去月十八日、在所新發田表出立、昨夜着京、彼地情態申越候、右ハ兼々申上置候通、主人共勤王盡力之心掛ニ罷在候處、追々切迫之時勢ニ立至リ、奥羽同盟之上、猶越後諸藩迄連合可致趣ニテ、去月十五日仙臺藩玉蟲左太夫、鈴木直記、米澤藩若林作兵衛爲使者罷越、今般奥羽一同盟約之上、眞之朝廷ヲ遵奉シ、君側ノ惡ヲ拂候決心之處、越後諸藩ニ於テモ追々同心ニ候得共、御藩而已隔論ニ相見、如何之御所存ニ候哉、速ニ同盟出兵致候様、且萬一同意無之上ハ、手始ニ相毀可申旨及強談、事實不分明之義ヲ始、朝敵之汚名ヲ蒙リ候テハ歎ケ敷ニ付、再應說得斷リニ及候ヘ共承諾無之、折柄米澤勢、庄内勢多人數、近領迄相迫り、會津之儀ハ水原邊へ人數差出、四方被相圍、一旦手切之義申出シ候ヘハ、弊藩直ニ攻撃可致勢ノ處、元來小藩微力、逆モ官軍御討入迄防禦之手段無御坐ハ勿論、是以勤王之道相立候義ニ候ヘハ、弊藩之存亡顧慮仕候場合ニハ無之候得共、兵力及兼候義ハ顯然之勢ニ相見然ル上ハ唯仇敵之勢ヲ増候而已ニテ、折角是迄盡力

罷在候勤 王之誠忠モ、却テ水滸ニ罷成候儀、乍併假令少人數タリトモ出兵、官軍へ抗シ候儀、恐懼多罪遺恨此事ニ御座候得共、差向可施手段モ無之、不得已人數少々領分境迄差出候積ニ談判相濟、乍去主人誠意之儀ハ、固ヨリ確乎トシテ相變候儀毛厘無御坐、既ニ先般勤 王心事貫徹之旨、別紙之通御賞詞ヲ蒙リ候次第、元來勤 王一途心掛罷在候外他念無御坐、就テハ兼テ差出置候當人數之義、此上勉勵勤 王之實效相立候様深重申越候義ニ御坐候、右ハ在所表之形勢實以驚愕悲歎之至、此上ハ尙以主人誠意ニ隨ヒ、粉骨碎身勤 王之道相立度、一同赤心ニ御坐候、右ハ臨機無據處置トハ乍申、官軍へ對シ出兵仕候段、重々奉恐入候次第、如何共申上方モ無御坐候、依之謹慎罷在、如何様共御處置次第可仕奉存候、此段奉待御指圖候以上。

六月朔日

○別閏四月八日京師達書

溝口誠之進家來

速水八彌

溝口誠之進

越後表賊徒亂入處々暴行ニ及候ニ付テハ、各藩如何之聞モ有之候處、其藩ニ於テハ確守一定勤 王心事貫徹致シ候趣、此節追々傳聞有之、神妙之至ニ候、猶實效相顯候上ハ、被仰付品モ可有之候間、愈以勉勵盡力可致候様、御沙汰候事。

閏四月

○批紙

越後表主人之向背、今一應報知有之候迄ハ、謹慎ニ不及候事。溝口直正家記

○甲斐鎮撫柳原前光、牙營ヲ甲府城ニ移シ、安藝、松代以下四藩兵ヲ分テ、本城ヲ警守ス。

○甲斐鎮撫日誌ニ云、六月二日巳刻、鎮撫府御城中へ轉營、前後御警衛濱松藩、藝州藩之事。

御城三ヶ所御門警衛、番兵五人宛左之通、

山手御門

柳御門

御樂屋御門

郭内外巡邏左之通、

堅近習町通東

片羽町通西

新紺屋町通北

郭内

右之通割持ニシテ巡邏等取締方無忘可有精勤候事。

六月朔日

鎮撫府參謀

甲斐鎮撫日誌
高島藩記

○高島藩記ニ云、六月朔日、副總督府城中へ御轉陣被仰出、右ニ付三ヶ所御門警衛番兵割、郭外巡邏割、右之通廻達有之。三日、是ヨリ先、大總督府、岡崎藩ニ命シテ、駿府ヲ警守セシム、是ニ至リ、刈谷、舉母二藩、參河裁判所ノ命ヲ奉シ、兵ヲ駿府ニ出スヲ以テ、岡崎藩、書ヲ甲斐鎮撫府ニ上リテ、藩兵ノ進止ヲ取ル、批シテ一藩兵ト與ニ之ヲ嚴守セシム。

復古外記 東海道戰記 第三十一 明治元年六月三日

復古外記 東海道戦記 第三十一 明治元年六月三日

三二二

去ル四月中、江尻御關門張番並駿府札之辻御番所ヨリ巡邏等モ被仰付置候ニ付、晝夜無懈怠相勤罷在候處、今般三州學母藩、刈谷藩ヘモ駿府出兵巡邏等被仰付候趣ニテ、此程到着、打合モ有之、於弊藩モ難有、彌以安心仕候、就テハ右巡邏御番所等モ、都テ三藩申談、猶此上嚴重ニ相守可申儀ニ御座候哉、此段御内慮奉伺候、以上。

本多美濃守内 大屋數馬

○鎮撫府批紙
札之辻番所之儀ハ被成 御免候、猶取締向ハ三藩申談、嚴重可相勤候事。甲斐鎮撫日誌

復古外記 東海道戦記 第三十一 終

二十一年七月九日

掌記 豊原資清纂輯

復古外記 稿本

東海道戦記 第三十二

自明治元年六月十四日至同月二十一日

六月四日、大總督府、鎮臺府判事小笠原茂敬唯八、後牧野群馬ト稱ス、土佐藩士ヲ以テ軍監卜爲シ、白河口ニ差遣ス。

奥州白川口爲軍監可致出張候事。日誌 鎮臺

○按スルニ、牧野群馬事蹟ニ、六月二日、諸道軍監其儘ヲ以、奥羽筋ヘ被差立トアリ、然レトモ達書ヲ載セス、今鎮臺日誌ニ據ル。

○大總督府、備前藩兵ノ赤坂門警守、及ヒ歩兵保管ヲ罷メ、阿波藩兵ヲ以テ之ニ代ヘ、半原藩兵ヲシテ、鎮臺補西四辻公業ヲ警守セシム。

兼テ赤坂御門警衛被仰付置候處、被免候事。

○ 六月岡山藩記

右、兼テ被預置候歩兵、自今阿州藩ヘ被預置候間、此段可相心得旨 御沙汰候事。

復古外記 東海道戦記 第三十二 明治元年六月四日

備前藩

三二三

六月以上岡山藩記

○自今赤坂御門警衛被仰付候事。

六月

阿州藩

兼テ備前藩へ被預置候歩兵司令、其藩へ被預置候、此段可相心得旨 御沙汰候事。

六月以上蜂須賀
茂韶家記

○茂韶家記ニ但警衛兵隊人數五拾名之事トアリ。

○東征總督記ニ云、六月七日、是迄備前藩預り之歩兵、今日ヨリ阿州藩請取預り候旨届出ル。

○

半原藩

西四辻殿御本陣警衛被仰付候事。

六月安部信
順家記

○今般 西四辻様 御本陣御警衛之儀、弊藩へ被仰付、難有仕合奉敬畏候、最早追々歸邑仕、殘少ニ御座候得共、在合之人數貳拾人差出可申候、右御請奉申上候、以上。

○

半原藩 久地樂丈右衛門

六日七日

下參謀 御役人衆中
順家記

○大總督府、佐土原藩兵ノ小田原ニ在ル者ニ令シテ、速ニ江戸ニ至ラシム、是日、藩兵江戸ニ至ル。

○島津忠寛家記ニ云、四番小銃隊、五月廿八日拂曉、小田原ニ到レハ、豆相軍監ヨリ滯陣スヘキ令アリ、然ルニ江戸ヨリ疾速來着スヘキノ急報アリ、之レニ依テ、六月二日、小田原ヲ發シ、同四日江戸馬場先門内一番隊ノ陣所ニ到ル。

○田野口藩、大給恒、書ヲ大總督府ニ上リ、上野南牧、郡上信分界ノ要地ナルヲ以テ、關門ヲ設ケ、藩兵ヲ發シテ、之ヲ守ラシメント請フ、之ヲ聽ス。

信州、上州兩國界碓氷御關門之儀ハ、相武之界箱根ト同様、無双要害之地、東國之咽喉ニシテ、必關門ノ御固メ無之テハ不相成御場所故、新タニ御關所之結構御振替御固メ被爲立、御番所御規則等モ、都テ御措置御座候儀ト奉存候、然ル處碓氷ト僅ニ相隔候西南ニ當リ、上州ト信州へ出候往來、俗ニ南牧通リト申候ハ、旅人往來モ有之間道故、是迄モ右道筋、上、信ノ界、南牧へ見張番所取立有之候得共、是迄ハ同所之郷士市川四郎兵衛ト申者見張承持居候様之儀故、一向有名無實ニテ、右故、碓氷ハ嚴重ニテモ手數ヲ厭候者ハ、都テ此道へ出候間、是ヘモ曉ト致候關門新タニ御取立御座候テ、兩道御關所立置不申テハ、碓氷モ無詮儀ニ御座候、右故碓氷ノ御關所被爲立置候儀ニ御座候得ハ、前文南牧之邊モ同様御關所無之テハ不相成儀ト奉存候、就テハ私領分右ニ接近仕居、信、上界道筋ノ内堅固ノ場所御座候故、萬一被仰付被下置候儀ニ候得ハ、小高ニテ諸事不行届候得共、關門御警衛勉勵可仕奉存候、前文間道へ關門御取設無之テハ不相成地形ニ取肝要之儀故、此段申上候儀ニ御座候、幸領分接近ノ儀ニ付、乍不行届懸隔候場所ニモ無之候間、此段奉願候、尤謹慎中建言仕候儀、何共恐懼之儀

ニ御座候得共、追々東北筋不穩模様、實ニ方今ノ形勢ニテハ片時モ難捨置御場所ニ付、畧地圖相添、地形ノ利害言上仕候儀ニ御座候、以上。

辰五月朔日

大給縫殿頭

○批紙

申出之趣尤之儀ニ付、關地見分之人可被差立候得共、當今御繁務之折柄、其儀ニ不被爲及候條、見込ヲ以諸事取計候様 御沙汰之事。

辰六月四日

大總督府 下 參 謀

南牧關門守衛被 仰付候事。

辰六月四日

大給縫殿頭

○恒家記ニ云、五月朔日家來田中興太郎京地出立、別紙建言書上ノ申請書ヲ指ス、持參、西丸御在住 大總督府應接方へ差出、參謀附屬大野圖南太郎殿面會、藩力ヲ以相勤候儀ニ候ハ、可被 仰付旨被申聞。

○此度南牧關門御守衛被 仰付奉畏候、就テハ如何様ニモ兵隊差出可申之處、追々北越へ人數增爲仕候ニ付テハ、昨今之形勢双方之處、小藩之儀十分之取計行届不申候間、繩合人數差出置申候、追テ規則相定候上、萬端奉窺候儀ニ御座候、右京都表ヨリ申越候間、此段御届申上候、以上。

辰七月廿日

大給縫殿頭家來 佐 藤 佐

○官軍ノ彰義隊ヲ討スルヤ、久世廣文、佐倉ニ奔ル、是ニ至リ、其老臣等、之ヲ本藩ニ迎ヘ、書ヲ大總督府及ヒ總野鎮撫府ニ上リテ、其罪ヲ陳謝ス、廣文ノ支族久世某斧三郎モ亦書ヲ督府ニ上リテ、廣文ノ爲ニ哀ヲ乞フ。

先般隱岐守事背 朝命 勅諭之趣深奉恐入候間、精々鎮靜罷在候處、去月廿三日風ト立退候折柄、上野山内へ蟄居罷在候ニ付、立戻候様再應及懸合候處、脱走之者共更ニ聞入不申、遂ニ去ル十五日之次第二罷成候條、奉輕 朝威候段、絕言語深奉恐愕候、隱岐守事幼年之儀ニ付、全私共不行届ヨリ右様之次第ニ相成候段、重々奉恐入候、何卒以願脱カ御憐察 御寛大之御處置被下置候様仕度奉歎願候、依テ一同謹慎仕罷在候間、御序之刻可然御執成被下度、伏テ奉懇候、謹言。

五月廿七日

久世隱岐守 在府 家 來 共

○隱岐守儀、去ル四月中、在所爲鎮撫、歸城可致旨御暇被成下候處、病氣ニ付、江戸屋敷ニ罷在候ヲ、姦臣共大勢ニテ巧ミ候儀有之、相擁シ歸城ヲ拒、剩分家其外所々往返爲致、住居モ相定リ不申次第ニ候處、一同ニテ探索仕、此節在所關宿へ引戻シ申候、素ヨリ幼弱ニ有之、殊ニ痼氣之症ニテ、放心同様ニ罷在候故、姦臣共却テ右ヲ幸ニ仕、不法之始末ニ及候仕合御座候、然共一旦大法ヲ犯シ候次第ニ付、如何様嚴科ニ被爲處候共、可申上様毛頭無御座、重々奉恐入候ニ付、急度謹慎爲仕置候間、寛大之 思召ヲ以、出格御仁恕之 御沙汰被成下度、在邑家來共一同、舉テ泣血奉懇願候、誠恐誠惶頓首謹言。

辰六月四日

關宿藩 富田久太夫印 龜井清左衛門印 木下源助印 山路慎十郎印 淺井多内印 加藤求馬助印

○以上二條廣業家記ニ、參謀渡邊清左衛門殿へ差出トアリ、而シテ批紙ハ見ル所ナシ、十月二十三日ニ至リ、再請アリ、參看スヘシ。

○本日上申書

久世隱岐守儀、當四月中在所爲鎮撫御暇被下候處、病氣ニテ江戸屋敷ニ致滯留居候ヲ、姦臣共巧ミ候儀有之、歸城ヲ拒、分家其外所々往返、住居モ不相定處、今般一同探索、在所關宿引戻、猶又謹慎罷在候付、寛大之、御沙汰奉歎願候段、別紙之通願出、在藩之臣下是迄格別心魂ノ碎候末ニテ、舉テ泣血懇願之事情難默止、外ニ子細之筋モ相聞不申候ハ、寛大之、御沙汰有御座度、此段御届申上候以上。

六月

肥前侍從

鍋島直大家記

○別紙ハ上ノ歎願書ニ同シ、故ニ略ス。

○遠山正功筆記ニ云、六月朔日夜四ツ半時頃、君公佐倉表ヨリ御歸城相成ル、前月十五日、上野山内御征討相成、賊徒散亂之節、輪王寺宮様奥州筋へ御立退ノ由ニテ、君公御儀モ午後八ツ時頃根岸邊の方へ落延ラレ、王子村邊某村八幡社内ニテ夜ヲ明サレ、原註、是迄御供セシモノ拾九人、其内木村正右衛門近習大久保善之助、側坊主和田芳之助ノ三人、残リ其餘ハ解散セシメシトイフ、翌十六日鳩谷驛清水ト云旅店迄御立退、此夜ハ同所ヨリ半里程脇、慈林村名主磯右衛門ト申者宅へ御一泊、翌十七日ハ同所伊之松ト申者方へ御宿替、其翌十八日夕暮佐倉表へ指シテ御落延、某町某方へ圍マヒ申由、是ハ木村正右衛門儀佐倉藩士某次男ニテ、木村家へ養子ニ來リシモノ故、舊郷里之知人ヲ頼ミシ事ナリ、然ルニ關宿ヨリ差出セシ探索掛之者之内、佐倉近傍ニテ大久保善之助、和田芳之助の兩人ニ出逢、御潛伏之場所等取糺、正右衛門ヲ召捕フヘク談セシ處、正右衛門儀ハ兼テ關宿ヨリ手入等有之節ハ、君公ト差違ヒ相果可申覺悟之趣、兩人之者申聞候得ハ、無餘儀兩人ニ計ラハセ、君公ノミ取戻シ、早追ニテ關宿表へ御供セシトナリ。

六月二日、古河表下總、野鎮撫府へ關宿ヨリ歎願書差出シ、同四日下參謀渡邊清左衛門殿へモ差出候事。

同日久世斧三郎殿ヨリ西城へ差出候歎願書、

私本家久世隱岐守儀、當春 大總督府御方、爲御鎮撫御東下ニ付、主人始家臣共一同奉恐懼、勤 王可仕ハ勿論ニ候處、右家臣共之内、奉背 王命木村正右衛門始以下奸臣共數人、幼主江戸表屋敷躊躇罷在候ヲ幸ニ存、無理非籠絡脱走仕候ニ付、追々御達章ヲ以御譴責ヲ蒙リ候段、於私實以恐怖痛哭之至、其罪可奉謝様モ無之候得トモ、右ハ全ク奸臣共之所爲顯然ニ付、只管御寛典之御處置被成下度、先日歎願書奉差上候處、此度關宿在住罷在候正義之家臣共一同會議仕、幼主之脱走暫時モ難捨置儀ニ付、歎願痛苦、所々行衛及探索漸尋出候ニ付、關宿表へ直ニ差送、急度謹慎爲仕置候旨、素ヨリ隱岐守儀幼弱且病中之儀、一時奸臣共之謀計ニ陥リ、今日ニ至リ候テハ千悔萬悟、一言之中上様モ無之、深謹慎罷在、幾重ニモ御救助之儀、猶又私ヨリ奉伏願候様、當人ヨリ達テ申越、事實本家累卵之罪、於私坐視傍観難忍儀ニ付、不顧斧鉞強テ奉歎願候、此上御愛憐被爲 垂、御寛典之御沙汰大旱之雲霓奉待候、恐惶々々頓首々々。

久世斧三郎印

十三日宇都宮鎮撫府へ差出候歎願書、

主人隱岐守儀兼テ申上置候通、全ク奸吏共壅蔽之爲、終ニ 朝命ニ背キ候次第罷成、何共可申上様無御坐、藩中一同奉恐入謹慎罷在候、就テハ種々探索ヲ遂、此程關宿へ引戻シ申候、右ニ付是迄之次第柄隱岐守へ相尋候上、書面ニ致シ差上候様御沙汰ニ候得共、兼々御承知御坐候通、幼年殊ニ元來病身御坐候處、此節疳症再發仕、放心同様之姿ニ御坐候間、事情申上候次第難相成、當惑仕候、就テハ隱岐守引戻候節、召捕候大久保善之助、和田芳之助兩人相糾申口差上候通御坐候間、可然様御酌取被成下度、且又奸吏共所業之次第ハ、先達テ御總督府へ歎願書差出候寫差上候間、委細御尊家御執成ヲ以、此上御寛大之 御沙汰被成下候様、伏テ奉歎願候、頓首謹言。

辰六月

復古外記 東海道戰記 第三十二 明治元年六月四日

關宿藩 重臣連署

三一九

○書中所謂大久保某、和田某ノ供狀ハ見ル所ナシ。

○鎮臺府、眞岡縣下野ヲ置キ、鍋島貞幹道太郎、肥前藩士ヲ以テ知事ト爲ス。

當分下野國眞岡知縣事被仰付候事。鍋島貞幹履歴書

○是ヨリ先、舊幕府、金ヲ江戸ノ商賈ニ課ス、是日、鎮臺府、錄シテ公債ト爲シ、漸々以テ之ヲ償還スルヲ令ス。

○市政裁判所達書二通

江戸町人 総代共

其方共儀、去ル丑年去卯年中舊幕府ヨリ用金竝立換金申付、銘々國恩之程ヲ相辨、身分ニ應シ用金差出有之、奇特之至ニ候、今般幕府被相廢、王政御一新ニ付、江府鎮臺差置候ニ付テハ、下々御愛憐被爲遊候御趣意モ有之候付、格別之譯ヲ以其方共ヨリ差出有之候用金ハ、鎮臺府へ御引受相成、此上年賦ニ割合下戻遣間、難有可存。

但、受取方之儀ハ、毎年盆暮兩度ニ三井組ニテ相渡可申、是迄渡置候手形ハ引替可遣間、今般相渡候手形ヲ以テ、金銀之融通ニ相用候儀ハ、勝手次第タルヘキ事。

○

酒問屋共ヨリ月々相納候稅金之儀、去ル丑年去卯年中、町人共ヨリ舊幕府へ差出候用金竝立換金、下戻遣シ候筈ニ付、以來右稅金預リ置、盆暮兩度ニ差圖次第割合、御下ケ戻方差支無之様可取計候。東京府記

○六月二十四日達書

德川龜之助家來へ

徳川家へ政權御委任之節、去ル丑年去卯年、江府下町人共へ用金竝立換金申付、銘々國恩之程相辨、身分ニ應シ用金多分ニ差出有之趣、右ハ徳川家借用金トハ乍申、全政府ニ付候入用ニテ申付候用金之儀故、此儘弃リニ相成候テハ、市民トモ難澁可致、如何ニモ憫然之事ニ付、右之分ハ一切朝廷へ御引受被遊、此上年賦ニ割合下戻遣候積、町人トモヘ申渡候付、其旨可相心得事。東京府記

○

戊辰六月、舊幕府用金高竝下戻相濟候高取調書付、

一金九拾萬三千七拾五兩

内 去卯十二月迄ニ下戻相濟候分 金貳拾貳萬千七百六拾貳兩

差引此後可下戻分 金六拾八萬千三百拾三兩

諸問屋立換金、

慶應三卯年十月廿七日納

一金拾萬兩

米問屋外六問屋立換金

同年十二月二日下戻済

内 貳萬五千兩 同年十二月九日下戻済

同年十二月納

一金貳拾萬七千兩

織綿問屋外十八問屋納

復古外記 東海道戰記 第三十二 明治元年六月四日

同四辰年正月納

真綿問屋外六十四間屋納

一金六萬四千三百八拾兩
同日
一金九千三拾兩
有德町人三十四人納

一金九千三拾八兩
同日
一金一千八百貳拾八兩
同日

一金壹萬五千三百六拾八兩貳分
質屋納

一金一千八百貳拾八兩
古着屋納

一金千三百五拾三兩三分
小道具屋納

都合金四拾四萬八千九百六拾兩壹分

内金拾貳萬五千兩
下戻相濟候分

殘テ金三拾貳萬三千九百六拾兩壹分東京府記

○按スルニ、此令宣布シテ、未タ實施セス、六年二月ニ至リ、故アリテ之ヲ廢ス。

○是ヨリ先、戸田忠行利藩主、足長門守、足利學校ヲ興復センコトヲ東山道總督府ニ請フ、是日、書ヲ總野鎮撫府ニ上リテ、其請ヲ申ヌ。

○戸田忠行申請書

方今ノ形勢ニ相成候テハ、自然文道ヲ廢シ武道ヲノミ重シ、徒ニ心ヲ橫謀術數ニ勞シ候テ、末ニハ綱常倫理ヲ斷絶シ、相殺シ、相奪ノ弊ニ至リ候モ難計奉存候間、何卒此機會ヲ不失、士民輜湊ノ地ハ申ニ不及、國ニ一个ノ學校ヲ構造被仰出、大道ヲ天下ニ御張被爲有候ハ、萬民正氣ハ内ニ充チ、外茲謀權變ニ趨ルノ弊ナク、御威武亦今日ニ十倍可仕奉存候、先頃弊邑中ニ有之候野相公學校ノ遺蹟再興之儀、東山道總督府へ願出置候得共、猶此段當府へ建白仕候、宜御執奏可被下、謹言。

戊辰六月戸田忠行家記

○忠行家記ニ、六月四日、使者ヲシテ鎮撫府ニ下總國古河ニ於テ願請ストアリ、按スルニ、七月ニ至リ、忠行書ヲ鎮將府ニ上リテ、本件ノ請ヲ申ヌ、八月其請ヲ聽シ、命シテ本校興復ノ事ヲ管セシム、事ハ本記ニ詳カナリ。

五日、江戸府知事烏丸光徳ヲ以テ鎮臺補ト爲ス。

○烏丸光徳ヘ達書

鎮臺補被仰出候事烏丸光徳履歴書

○按スルニ、光徳ノ遷官、履歴書ハ十七日ト爲シ、事蹟ハ日ヲ佚ス、今下條載スル所、官中日記六月五日出云々ノ文ニ據リ、本日ニ收ム。

○附錄一條

江戸鎮臺

補

判事

監察 丹 烏 大 総
同 岡 丸 督
社寺 清 五 宰
新 田 五 相
江 藤 三 宮
西 尾 新 平 郎 位
尾 遠 江 介 位
市政 兼會計營繕

補助	同 土方大一郎
權判事	民政兼會計 北島千太郎
	片桐省介
	民政 橫川源藏
	同 山田一郎左衛門
	島團右衛門

右之通、今般改テ被 仰出候事。

六月官中日記、津和野藩
記 松平忠恕家記

○官中日記ニ、右六月五日出ニテ、江戸鎮臺ヨリ申來ルトアリ。

○大總督府、鎮臺補橋本實梁ヲ京師ニ遣ス、使番取締河田景福之ニ屬ス。

○東征總督記ニ云、六月五日、橋本中將殿並隨從河田精之丞、御用ニテ、今早天主京、横濱表へ出張相成候事。

○田安慶頼、一橋茂榮、新ニ藩屏ニ列セシヲ以テ、前後、書ヲ大總督府ニ上リテ、攝、泉、播、備ノ舊領ヲ復セんコトヲ請フ、令シテ太政官ニ稟請セシム。

○五月二十七日申請書

今般私儀格別之 御沙汰ヲ以、自今藩屏之列ニ被加候旨被 仰出、誠ニ以重體難有奉敬承候、然ル處領知之内攝州、泉州、播州ニテ高四萬四百石餘有之、攝州西成郡南長柄村ニ陳屋御座候テ、家來共縕三四人差遣シ置候處、當正月伏見戰爭之事變ヨリ、大坂表不容易形勢ニ立至リ候節、右陣屋之儀薩州兵隊ヨリ掛合有之引渡、家來共ハ歸府仕、只今以其儘ニ相成居申候、就テハ當今ニ至リ候テハ、家來共扶養ニ必至ト差支、當惑罷在候、何卒格別之 御憐愍ヲ以右陣屋並領知トモ、早々御

辰 五 月 戻シニ相成候様仕度奉歎願候、宜 御汲察被成下、御盡力之程伏テ奉懇願候、以上。

辰 五 月

○副申書

田安領地攝、泉、播州之内ニテ、高四萬四百石餘有之、右收納爲取立、攝州西成郡南長柄村陣屋ニ代官壹人、勘定方役人三人相詰罷在候、然ル處當正月伏見戰爭事變ヨリ、大坂表不容易形勢ニ立至リ候ニ付、如何之御次第歟更ニ相辨不申候得共、諸書物取片付代官儀ハ、領知内竅寄蒲田村へ立退、跡勘定方役人三人相詰、同十日内壹人ハ市中へ罷出、兩人ハ詰合居候處、陣屋門前ヨリ淀川通東西共、薩、長、土、藝州之人數相固メ、右之内ヨリ薩州勢四人、鐵砲並短筒、拔身之鎗持參、陣屋へ罷越、重役ニ面談致シ度旨申聞候ニ付、座敷へ相通、詰合役人兩人共面會致シ候處、右隊ニテ永山彌一郎ト申者申聞候ハ、薩州勢今般 勅命ヲ以幕府附屬之者追討被 仰付候間、其段可相心得旨申渡有之候ニ付、幕府附屬追討之儀何故歟不存候得共、勅命ヲ以被 仰付候上ハ恐入候儀、乍併當陣屋之儀ハ重役ト申者モ相詰不申、代官壹人役人、三人相詰居候而已ニ有之、殊ニ代官ハ書物ニ附添、領知内蒲田村へ立退候段相答候處、同所へハ道法何程有之候哉尋ニ付、凡壹里半モ有之候、而會致度候ハ、案内可致旨相答候處、左候ハ、其儀ニ不及、陣屋引渡可申旨申聞、無是非暫猶豫相賴、夫々取片付、陣屋内案内イタシ、土藏之古書物並銘々之飯米等モ其儘引渡候處、永山彌一郎ト申書付相渡、慥ニ請取候段申聞、陣屋表門へ薩州隊ト申札ヲ張、引拂申候、役人共ニハ同所立退キ、漸々江戸表へ立歸、右之始末委細訴出申候、右之通役人共申出候、以上。

辰 五 月

田 安 中 納 言

德川慶頼家記

○四日上申書

復古外記

東海道戰記 第三十二 明治元年六月五日

三二五

上方領知

一高合四萬四百八拾四石餘

内

高壹萬三千八百八石餘	西成郡 拾ヶ村
高壹萬貳千八百拾七石餘	川島郡 三ヶ村
甲州領知	攝津國 有馬郡 拾ヶ村
一高合四萬七千九百六拾石餘	播磨郡 島下郡 拾貳ヶ村
總州領知	和泉國 大鳥郡 三拾ヶ村
一高合貳萬五千貳百七拾四石餘	加西郡 山梨郡 四拾ヶ村
總高合拾萬三千七百貳拾石餘	甲斐國 八代郡 四拾貳ヶ村
右之通是迄田安領ニ御座候、御尋ニ付此段申上候、以上。	巨摩郡 貳拾壹ヶ村
○本日慶頼へ達書	埴生郡 拾六ヶ村
辰六月	下總國 相馬郡 拾八ヶ村
○八日申請書	香取郡 貳ヶ村

攝、泉、播領知之儀ニ付歎願之趣、尤之事ニハ候得共、何分隔地之儀ニ付、其次第太政官へ被仰遣候間、重臣之者上京之上、太政官へ歎願可致候事。

六月
徳川慶家記

○十日批紙

今般私儀格別之御沙汰ヲ以、自今藩屏之列ニ被加候旨被仰出、誠以難有仕合奉存候、然ル處領知高拾萬石之内、攝、泉、播州、備中國ニテ八萬八千四百六拾五石餘有之、大阪川口藏屋敷、備中國後月郡江原村陣屋御座候間、貳ヶ所共家來共拾人餘差遣シ置候處、右川口藏屋敷之儀ハ、去卯十一月中英人へ貸渡候様致シ度旨、宗家ヨリ申談モ有之、無據相渡、替地トシテ吉川監物屋敷相渡候ニ付、藏屋敷詰之者共ハ同所ニ相詰居候處、當正月中大坂表不容易形勢ニ立至リ候ニ付、池田下村ヘ罷越居候内、泉州之儀ハ薩州、土州兵隊ヨリ改有之、主家安危定候迄謹慎可罷在旨、藏屋敷詰之者へ達有之、謹慎罷在候處、其後播州之儀ハ兵庫司農掛秦鑑一郎、多久謹吾へ引渡、攝、泉州之儀ハ、最寄領主へ御預相成候旨、池田下村ニ罷在候者共ヨリ申越、備中國領知之儀ハ、藝州兵隊ヨリ掛合有之、陣屋諸書物等引渡、同所ニ相詰居候家來共ハ、右最寄寺院へ謹慎罷在候旨申越、只今以其儘ニ相成居申候、就テハ當今ニ至候テハ、家來共扶助ニモ必至ト差支當惑仕候、何卒格別之御憐愍ヲ以、右陣屋領知共早々御戻相成候様仕度奉歎願候、宜御汲察被成下、御盡力之程伏テ奉懇願候、以上。

辰六月

一橋大納言
茂榮花押

願書之趣ハ太政官へ御達相成候間、其藩家來之者上京爲致、太政官へ可願出候事。徳川茂榮家記

○尋テ慶頼、茂榮並ニ書ヲ朝ニ上リテ、復封ノ請ヲ申ス、慶頼ハ七月十三日、茂榮ハ二十五日、之ヲ復ス、事ハ本記ニ詳カナリ。

○英、米二國商船、密ニ新潟港ニ赴キ、賊ト貿易スル者アルヲ以テ、越後口參謀黒田清隆、了介、摩藩士書ヲ大總督府ニ致シ、二國公使ニ令シテ、之ヲ禁遏シメント請フ、

越後口ヘ被差向候海陸之官軍追々進入、既ニ新潟近邊迄相進ミ候處、新潟港ニ米、英兩國之船相見得居、攻擊之節自然砲丸等可相障懸念モ有之、右場所ハイマタ開港ニモ不相成候間、砲器類ハ不致賣買、早々引拂候様於横濱表右兩國ミニストル方へ御達被下度、此段申上候、以上。

辰六月

薩州 黒田了介

東征總督記

○附錄一條

新潟ハ開港之場所ニ無之ニ付、軍艦差廻シ取糺シ之上、自然外國商船等碇泊致シ不相去候節ハ、勝手ニ掃擊ニ及ヒ不苦ト被仰越候處、新潟開港ハ兵庫開港ト去冬同期限ニ御座候處、舊幕談判ニテ、新潟ハ五ヶ月延期、當三月開港之條約ヲ相決シ居、其後 大政一新ニ付、三月開港之處、尙延期被仰付候ヘハ、從朝廷改テ其御談判可有之處、其儘ニ被差置候ニ付、已ニブロイセン、イタリヤ、兩國ハミニストルヨリ商人へ勝手ニ罷越、交易通商可致トノ布告イタシ候趣、神戸運上所ニテ外國コンシエルヨリ申出候由、今日之形勢ニ於テハ甚不條理之儀ニテ、如此之次第有之間敷事ト被相察候得共、過日被仰越候趣ヲ以、各藩軍艦ヘモ取糺シ之上、落着不致部ハ掃擊イタシ候様已申達候付、萬一齟齬之義有之候テハ、不相濟事之條爲念御尋申候付、各國ミニストル確答之處、乍御手數今一應被仰越可被成候事。

六月廿五日

横濱裁判所 刑事各中様東征總

督記

○本件前後ノ往復ハ見ル所ナシ、因テ此ニ附記ス、按スルニ、七月十七日ニ至リ、神奈川府知事東久世通禧、各國公使ニ

○箱根地方鎮定ニ就キ、出征諸藩兵、甲府ニ凱還セシヲ以テ、甲斐鎮撫府、令シテ、尾張、犬山、加納、高須、岩村、苗木、高富、七藩兵ヲ信濃ニ班ス、又高遠、高島ニ藩兵ヲ罷歸シ、藩地ノ兵備ヲ嚴整シテ、不時ノ徵發ニ應セシム。

相州宮根邊遊擊隊等變動ニ付、當府在兵追々御繰出シ、跡御手薄ニ付、火急ニ出張御達ニ相成、追々迅速ニ着到神妙之事ニ候、然ル處、右賊徒モ致散亂、當府ヨリ出兵之向モ繰戻シ候ニ付、最早差向御用モ無之候間、一先前陣信州路ヘ引取可申旨、被仰出候事。

六月五日

鎮撫府 參

謀

各長官

中甲斐鎮撫日誌、德川義宣家譜、遠山友祿、松平義生家記

○徳川義宣家譜ニ云、右ノ達ニ因テ六月六日人見高景等甲府ヲ發ス、田宮如雲附屬ノ兵隊ハ鹽尻ヲ發シ、福島驛ニ退陣ス、然ニ柳原卿ヨリ再度甲府へ進軍候様御達有之旨、成瀬正肥ヨリ相達候ニ因テ、一隊總計百二十人即便引返、甲州垂崎驛迄繰込候處、高景等之隊引揚、解兵ノ命有之旨傳承、因テ同所ヨリ軍ヲ班ス。

○成瀬正肥事蹟ニ云、甲府警衛ノ藩兵ハ、六月五日解兵、同十五日尾州ニ歸ル。

○永井尙服家記ニ云、肥前守人數出兵之内、信州路ヨリ甲府へ出張之分、彼地及鎮定候ニ付、一ト先解兵之儀、尾州藩ヨリ通達有之候ニ付、六月六日甲府表解兵、同十八日在所表ヘ歸軍仕候。

○松平義生家記ニ云、總人數九拾六人、五月廿九日柳原殿參謀衆ヨリ依御差圖、鹽尻宿ヨリ再ヒ甲府へ繰込候處、再ヒ解兵可有之旨、御沙汰ニ付、六月十八日不殘引揚候。

○遠山友祿家記ニ云、六月六日信州路へ出兵之者、甲州路へ進軍居候處、右之書面到來、同月七日甲府城へ隊長續總左衛門罷出、副總督柳原侍從殿へ面會之上歸陣候事。

○先頃徳川脱徒之遊撃隊襲來之節、火急ニ當府へ出張致シ、引續守衛向厚相心得滯陣候處、近方賊徒モ散亂致シ、且各藩ヨリ追々兵隊出張モ有之ニ付、小藩ニテ引續永陣致候テハ難澁ニモ可有之事故、一先歸兵被仰付候間、歸國之上猶鍊神養銳可有之、尤海内一定ト申ニテモ無之候間、亦々形勢ニヨリ出兵モ可被仰付候間、其豫備可有之候事。

六月五日

高遠藩 各通

高島藩 甲斐鎮撫日誌、内藤

○賴直家記ニ云、六月六日甲府出發、同八日高遠へ凱陣。

○高島藩記ニ云、右之通御達有之候付、甲府詰之兵隊六月六日同所引拂、同八日高島表へ歸兵仕候。

六日、大總督府、諸軍ニ令シテ、嚴ニ其放火ヲ戒ム。

○諸軍へ達書

賊徒追討之節、縱令巢窟タリ共、放火堅被禁候事。

六月

大總督府

下

參

謀

前橋藩記
松平忠恕家記

○賊徒、柏木村^{武藏}、及ヒ佐貫^總、地方ニ嘯聚スルノ聞アルヲ以テ、大總督府、肥後藩及ヒ稻田邦植ノ兵ヲ柏木村ニ、筑前藩兵ヲ佐貫ニ遣シテ、之ヲ討セシム。

肥後藩兵隊
稻田隊

柏木村圓照寺へ賊徒屯集ノ趣ニ付、早々出張打取候様被仰付候事。鎮臺日誌

○東征總督記ニ云、六月六日、肥後藩、稻田藩兩藩柏木村へ出兵被仰付候、肥後藩百人、稻田藩三十人之事。

○稻田邦植從軍事蹟ニ云、六月六日、柏木村圓照寺賊徒屯集ニ付、肥後藩申談打拂候様被仰付、三田昇馬人數七拾人引卒出兵仕候處、賊徒逃去行衛相分不申候ニ付、同日引揚申候。

○

筑州藩兵隊

佐貫表へ急速出張被仰付候事。鎮臺日誌

○本條、日誌五日トス、今東征總督記及ヒ黒田長知家記ニ從ヒ、本日ニ收ム。

○東征總督記ニ云、六月六日筑前藩二百人、上總佐貫へ出張致候事。

○黒田長知家記ニ云、六月七日令ヲ受テ、矢野幸衡、明石正房等五百餘人、江戸ヲ發シ、房總ノ賊ヲ平ケントテ進入。

○是ヨリ先、忍藩兵、長門藩兵ニ屬シテ、白河口ニ在リ、是日、大總督府、其長門藩兵ニ屬スルヲ罷メ、本地出征諸藩兵ト協議シテ、力ヲ王事ニ竭サシム。

忍藩兵隊

右長州兵隊へ隨從被仰付置候處、被免、以來出張之各藩申合、精々勉勵可致旨御沙汰候事。

六月鎮臺日誌
松平忠恕家記

○本條忠敬家記、二十五日ニ收ム、今日誌ニ從フ。

復古外記 東海道戰記 第三十二 明治元年六月六日

○弊藩人數長州藩へ合併被仰付、奥州表へ出兵罷在候ニ付、大隊旗御渡シ無御坐候處、右合併被免、一手之出兵相成候、就テハ大隊旗御渡被成下度段、奥州表ヨリ申越候ニ付、御渡被下度此段奉願候、以上。

九月十八日

忍藩 永田覺左衛門

松平忠敬家記

○忠敬家記ニ云、九月十八日右願書差出候處、同廿日御呼出之上、參謀卿萬里小路殿ヨリ大隊旗御渡シ相成申候。
○賊徒、上總横田村^{望陀郡}ニ嘯聚スルヲ以テ、前橋藩兵ヲ發シテ、之ヲ掃蕩ス、是日、書ヲ大總督府ニ上リテ、其狀ヲ申ス。

當二日、上總國望陀郡横田村邊ニ賊徒屯集罷在候趣相聞候ニ付、領分吾妻村へ出張罷在候家來共ヨリ、爲探索木更津村三河屋喜平治ト申者、外一人差出候處、被取押候趣ニ付、三本松富津兩陣屋ニ罷在候者共、不敢右吾妻村へ出張、賊徒屯集罷在候場所相知レ居候上ハ、人數差配置、談判ノ上、右喜平治始引戻申度心得ニテ、一昨四日曉、賊徒罷在候横田村泉龍寺ヲ差テ罷越候處、賊徒百人餘モ罷在候趣ニ付、得ト談判可及ト相心得、同寺門前へ罷越候處、彼ヨリ炮發致候ニ付、無是非及炮戰、右賊徒三人討取、其餘ハ遁去候ニ付、右寺ハ燒拂ヒ、首級ハ吾妻村へ持參、梶首ノ上取捨申付候、且其節分取仕候器械、別紙之通ニ御坐候、尤家來共之内、手負之者壹人、其外別條無之旨、註進申越候ニ付、此段御届申上候、以上。

六月六日

松平大和守家來 岩倉彌右衛門

前橋藩記

○別紙ハ之ヲ畧ス。

○甲斐鎮撫府、餉餉ノ費額ヲ更定ス。

一白米 一升
一金 豈朱

右、上下一同、兵士一人前、一晝夜之入費、尤右ニテ二度之食事、夜具、其外風呂迄モ可相賄候事。

尤、菜廻リ、右ニテ出來候丈ヶ之品可差出、萬一不足ケ間敷儀等申候向有之候ハ、其申分早々可申出候事。

右之通被相定候上ハ、市中等ヘ辨金等相掛候儀ハ、決シテ致間敷候事。

前書之通、明後八日ヨリ被相改候間、夫々ヘ可被相達置候事。

六月六日

町差配^{甲斐鎮} 撫日誌

○鎮撫日誌ニ云、右之通當地屯在之五藩へ廻達ス。

○參河、遠江鎮撫使平松時厚、刈谷、舉母二藩兵ノ駿府警守ヲ罷メ、之ヲ吉田ニ移ス。

兼テ出兵被仰付置候駿府城警衛被免、人數吉田表へ繰上ケ候様、御沙汰候事。

六月

參河兼遠江鎮撫府

謀

土井利恭家記

○本條、文成家記七日トス、今利恭家記ニ從フ、按スルニ、十二日ニ至リ、時厚鎮撫使ヲ罷メラル、ヲ以テ、令シテ二藩兵ヲ撤歸ス。

○是ヨリ先、朝廷、柳河藩ニ命シテ、兵ヲ江戸ニ出サシム、是日、藩兵、^{二十九人}下手渡藩兵^{八十人}ト與ニ江戸ニ至ル。^{立花鑑} 寛家記

復古外記 東海道戰記 第三十二 明治元年六月六日

三三三

七日、大總督府、白河口總督石倉具定、副總督岩倉具經ヲ罷メ、三等陸軍將鷲尾隆聚ヲ以テ奥羽追討總督ト爲シ、舊先鋒總督府參謀木梨恒準ヲ督府參謀補助ト爲ス。

白河口總督、願之通被 免候事。

但、當分可爲大監察使、三條左大將之附屬候事。岩倉具定履歴書

岩倉八千丸
鷲尾侍從

白河口副總督、願之通被 免候事。鎮臺日誌

○東山道總督府日記ニ云、六月六日、奥羽總督御辭表、大督府へ御差出之事、是ハ不得已御情實ニ因テナリ。

同八日ノ蓋七日誤、辭職被 聞食候事。

○

奥羽追討總督被 仰出候事。

六月鷲尾隆

聚家記

○十日ニ至リ、隆聚ヲ改メテ督府參謀ト爲シ、白河口ニ差遣ス、其條ヲ參看スヘシ。

○木梨恒準ヘ達書

東海道總督參謀被免、大總督府參謀可爲補助旨 御沙汰候事。木梨恒準

○恒準履歴書拜任ノ日ヲ載セス、然レトモ十一日ニ至リ、改メテ奥羽追討總督參謀ノ命アルヲ見レハ、則其十日以前ニ

アリシコト知ルヘキナリ、因テ此ニ合叙ス。

○鎮臺補橋本實梁、大原俊實、西四辻公業ヲ罷ム。

橋本中將
西四辻大夫

鎮臺補被 免候事。鎮臺日誌
別本官中日記

○

先達テ當分鎮臺補申付候處、今般江戸府知事下向ニ付、鎮臺補相免候事。

大原少將
西四辻大夫

西四辻殿本營警衛被 仰付置候處、被 免候事。

○東國諸藩へ達書

今春 朝政御一新之御場合、正月十五日 御元服之御大禮被爲行、御仁恤 聖慮ヲ以朝敵ヲ除ク之外、大赦被 仰出候處、

於關東ハ如何之次第ニ有之候哉、于今施行不致候ニ付、今度改テ被 仰出、正月十五日以前之罪人、朝敵、其餘大逆無道ヲ除ク之外、一切被差赦候條、速ニ施行可被旨、大總督宮 御沙汰候事。

復古外記 東海道戰記 第三十二 明治元年六月七日

六月 鎮臺日誌

過日被仰出候 朝敵ヲ除之外ハ大赦之儀、右ハ譬ハ人ヲ殺候者ハ、無論ニ命ヲタチ候外無之儀ニ御坐候處、大元朝廷之御處置方、如何之御次第ニ御坐候哉、主ヲ殺シ、親ヲ殺シ候大罪之者、其儘ニハ相成兼候へ共、其他ニ至リテハ、假令人殺仕候者ニテモ、一命ハ助ケ候方、大赦之御主意ニ相叶候哉、弊藩ニテ處置方心得モ相立兼候ニ付、奉伺候事。

六月廿三日

松平大和守家來 岩倉彌右衛門

○二十五日批紙

朝廷ヨリ御布告之御趣意ニ基キ、從來之藩律ヲ斟酌シテ、至當之處置可致事。前橋藩記

○水野勝進、書ヲ大總督府ニ上リテ、老病藩内鎮撫ノ任ニ堪ヘサルヲ陳謝シ、子・勝寛（義）ノシテ、藩主勝知ノ後ヲ承キ、鎮撫ノ事ニ服セシメント請フ。

勝進義兼テ病身罷在候ニ付、先年ヨリ隱居仕候處、此度在所表鎮撫並防禦筋 仰付ラレ候段、冥加至極、有難キ仕合存シ奉リ候、就テハ精々盡力御奉公仕度志願ニハ御座候ヘトモ、追々老年ニ及ヒ、殊ニ年來隱居ノ身分、別テ多病ニ罷在、實以當惑難澁仕候ニ付、甚以恐入存シ奉リ候ヘトモ、末男禊之助ヘ家督相續 仰付ラレ、勝進義ハ已前ノ通隱居仕度相願存候、仰キ願ハ此上ノ御憐愍ヲ以、願ノ通 仰付ラレ候ヘハ、朝恩ノ程彌以畏奉候、此段宜御沙汰希奉候也。

六月七日

大總督府 參謀御中 水野忠愛家記

○本條批紙見ル所ナシ、蓋聽サレサリシナリ、按スルニ、十二月七日ニ至リ、勝知ノ罪ヲ譴メテ退老ヲ命シ、二年二月、勝

寛ニ命シテ其家ヲ承カシム。

○是ヨリ先、久松勝慈、（多古藩主）入覲シテ京師ニ在リ、是ニ至リ、封邑傍近、兇徒出沒スルヲ以テ、假ヲ獲テ歸藩シ、管内ヲ鎮輯ス、因テ、書ヲ大總督府ニ上リテ、其狀ヲ申ス。

私在所近邊一種之兇黨致暴行候ニ付、從 御先鋒御總督卿御達御座候間、御暇奉願候處、願之通被下置、今七日多古陣屋へ着仕候間、猶又人數相増、領地竝近傍共爲鎮撫、家來之者日夜巡邏爲仕候、此段御届申上候、以上。

六月七日

久松 大藏少輔

多古藩記

○鎮臺府、徳川家達ニ令シテ、舊幕府ノ文書記錄ヲ上ラシム。

徳川龜之助

王政御一新之折柄、從前之美事良法ハ御採用可相成儀ニ付、徳川氏執政初代ヨリ一代ニ付、壹ヶ年分宛、去ル丑年ヨリ昨卯迄十五ヶ年分取揃、大小目付、奥右筆、右兩局記錄取調、早々差出可申候事。

六月別本官中日記

○十四日達書

徳川龜之助

去ル七日相達置候大小目付、奥右筆、右兩局記錄今以差出無之、不都合之事ニ候、明十五日巳之刻、鎮臺へ差出可申候事。

別本官中日記

當今 御一新之折柄ニハ候得共、先前ヨリ之美事良法ハ御採用被成候ニ付、諸局書類之儀、鎮臺府へ早々差出候様可被取

計、尤時宜ニ寄、前方勤之者呼出、承リ候儀モ有之候間、其旨可被相心得候事。

鎮臺府 判

事

○本條六月十八日ノ條下ニ載セテ、月日ヲ署セス、按スルニ、記錄上進ノ事、諸書見ル所ナシ、之ヲ徳川家達ニ質セトモ、詳ナラス。

○上野軍監、戸倉口警守ノ諸藩ニ令シテ、其兵ヲ撤シ、前橋藩兵ヲ留メテ、之ヲ守ラシム。

○松平忠恕家記ニ云、六月七日御口達、戸倉口番兵前橋藩相殘、其他各藩休兵可致之旨、軍監ヨリ達ニ付、翌七日、一ト先歸陣仕候。

○大久保教義、書ヲ豆相軍監三雲種方ニ上リテ、宗家大久保忠禮ノ爲ニ哀ヲ乞フ。

此度宗家來共不束之儀ニ付、罪條爲御糺問奉勞。王師候段、畢竟所置之不行届故之儀ト、於加賀守深懼入、悲泣痛哭謹慎之外他事無御座候、然ル處、末家之私、右等之事件不心得罷在候段、漠然之至、不堪慚愧、奉恐入、片言モ可申上様無御座、伏テ奉仰。天裁候外無之儀ニ候得共、至情難默止、奉哀訴候、抑宗家來共心得違ヨリ、萬々不都合之所爲有之、奉蒙 御譴責、駭然ト解悟憤勵仕、表微效候次第ニテ、聊ニ念無御座候、於加賀守ハ、王師遵奉之儀ヲ以、勤 王之素心、御洞察被成下度、以有罪之身歎訴仕候段、重々奉恐入候得共、私家名之儀ハ、縱令如何様相成候共遺憾無御座、宗家之儀ハ何卒繩外寛典之御所置、偏奉懇願候、以上。

六月七日

大久保中務少輔

萩野山中藩記

○萩野山中藩記ニ云、六月七日、小田原御軍監府へ家老井戸平格罷出、御軍監三雲爲一郎殿、安永又吉殿へ右之歎願書差出。

○是ヨリ先、朝廷、彦根藩ニ命シテ、甲府ヲ警守セシム、是日、藩兵四百六人、甲府ニ至ル。○甲斐鎮撫日誌 八日、議定、旨ヲ大總督ニ傳ヘテ、東叡山戡定ノ功ヲ賞ス。

大暑之砌、聖上益 御機嫌克被爲渡、恐懼不斜候、抑頃日上野山内屯集之賊徒、去月十五日兩道合兵追討之處、不出一日成功、皇軍之武威八州ニ赫然、就テハ捷奏之趣速ニ及奏 聞候處、大ニ被安 寅襟、御満足ニ被 思食候、此旨披露可有之候也。

六月八日

議

定

大總督宮 參謀御中督東征總記

○是ヨリ先、大總督府、馬匹飼養費ヲ從軍諸藩ニ給ス、是ニ至リ、軍費不貲ヲ以テ之ヲ止ム。追々軍費之御用途相嵩ミ、更ニ金穀御繰出之御目途モ無之、因テ以來馬飼料下渡シ不被 仰付候、

但、無據向ハ願出之上、御詮議之筋モ可被爲在候事、右之通、宮、堂上、諸藩へ觸沙汰被 仰付候事。

六月八日日津和野藩記

○大總督府、筑後藩兵ヲ上總ニ遣シテ、賊徒ヲ緝捕セシム。

○有馬賴咸家記ニ云、六月八日奉命出兵、於上總高師村追捕賊徒、撫恤窮民。

又云、荒村窮民ノ情態惑然ニ不堪、出兵先キニテ臨機ノ取計ヲ以、金子相與、取救申候金高書留等一切無御座候。

○問罪師參謀河田景與、長門、因幡、備前三藩兵ト與ニ、小田原藩老臣渡邊某^了、等四人ヲ監守シテ、江戸ニ凱還ス、大總督府、乃チ某等ヲ本藩ニ付シテ、江戸藩邸ニ幽ス。

○河田景與事蹟ニ云、大久保加賀守居城請取、長臣渡邊了叟始召連レ、六月八日、歸陣復命仕候事。

○池田輝知家記ニ云、六月小田原藩重臣渡邊了叟、吉野大炊介等ヲ護衛シ、江戸表ヘ歸陣ス。

○岡山藩記ニ云、六月八日小田原引拂、同十日江戸表根陣ヘ歸着仕候。

○大久保忠良家記ニ云、六月六日、渡邊了叟、吉野大炊介等ヲ護衛シ、江戸表ヘ歸陣ス。十日曉、岩瀬大江進儀、御糺問之御沙汰無之候得共、老職ヲ預リ、度支ヲ領スル罪固ヨリ不可分、死ヲ以テ主家謝罪萬分ノヲ補候旨遺托仕、割腹仕候ニ付、御軍監ヘ御届申上、爲檢使伊州藩三宅源藏被罷越、死骸假埋致置候様御指圖ニ付、城下誓願寺ヘ假葬仕候。

前書櫻送四人之者、道中二泊ニテ同八日東京著、大總督府ヘ及御届候處、小田原藩ヘ御預ニ相成、芝舊邸ヘ差置候様御差圖有之。

○關長克家記ニ云、六月八日夜戌ノ下刻頃、大久保加賀家來日下部屯、今村續方ヘ相越候ニ付、同人及面會候處、扱今度之事件ハ粗承知モ可有之、小田原表ニテ甚不行届之儀出來、家來之内重立候分四人、因州侯御軍勢ヘ小田原表ニ於テ差出候處、御同所御軍勢今日歸陣相成、右罪人モ御召連相成候ニ付、差添之儀御達ニ付、罷出候處、因州侯御屋敷ニテ、參謀河田左久馬殿ヨリ罪人四人共、日下部屯ヘ御預ケ被成候間、芝上屋敷ヘ引取爲相慎置候様御口達、然ル處右屋敷之儀ハ、當時關伊勢守方ニテ御預リ相成候、尤祈願所安祥院ト申者ハ、歸住御免ニ相成候段承知仕候、同所ヘ相越、慎居候テモ不苦哉、且關家ヘ御達等被下候譯哉相伺候處、別段關伊勢守方ヘハ相達不申候ニ付、前文之次第關家留守居ヘ左久馬殿御達之振ニ申通シ候様御指圖相成候、右御通達御案内申候旨申聞候ニ付、委細承知、即御預屋敷ヘ案内致シ、日下部屯始罪人共上下十七人、安祥院ヘ今日ヨリ住居相慎罷在候事。

○大久保加賀家來日下部屯ヨリ今度御預リ人番兵之者、別紙之通昨日着仕候段、案内有之候ニ付、此段御届申上候以上。

六月十三日

關伊勢守家來 今 村 繼

覺、

一留守居助役 壱人

一目付役

壹人

一侍

拾七人

一小頭

七人

一足輕

拾貳人

一中間

拾人

メ四拾七
ノ七蓋八人

ハ誤入

右之通御坐候、以上。

六月十二日

大久保加賀守家來 日 下 部 屯

關長克家記

○按スルニ、九月二十八日ニ至リ、督府、小田原藩ニ令シテ、渡邊某等ヲ處分セシム、其條ヲ參看スヘシ。

○大關增勤、羽藩主、泰次郎、黒書ヲ大總督府ニ上リ、兵ヲ白河口ニ出シ、軍費不貲ヲ以テ、徵兵及ヒ軍資

金貢獻ノ期ヲ緩クセント請フ、之ヲ聽ス。

先般於京師徵兵並軍資金、泰次郎高丈差出候様、同所詰家來之者ヘ被仰付候由、早速右之趣出便之處、大井川長々川留之旨、去ル四日夕刻右書面到着仕候間、直様右之兩條京師爲差登可申候處、兼テ申上候通、奥州口ヘ夫々出兵等モ仕、猶又住居之方モ嚴重守衛罷在、莫太之入費兼テ不如意之勝手向故、此上軍備等深ク心痛罷在候仕合御座候、依之、奥州御鎮定迄、前段徵兵、軍資金兩様納方、御猶豫被成下置候様仕度奉存候、何卒格別之以御仁慈、御聞濟被成下候ハ、兵備之一助ニモ相成、難有仕合奉存候、此段奉歎願候、以上。

六月六日

大關泰次郎家來 福田權九郎

○批紙

復古外記 東海道戰記 第三十二 明治元年六月八日

三四一

願之通御猶豫被 仰付候事。黑羽
譲記

○甲斐鎮撫府、府中代官中山某誠一郎ノ德川氏隸從ノ請ヲ聽シ、其代官ヲ罷メ、赤松成允孫太郎、濱松藩士ヲ以テ之ニ代フ、又高島藩兵ノ古關警守ヲ罷メ、彦根藩兵ヲ以テ之ニ代フ。

中山誠一郎へ
此度復歸願出候付、代官役被成 御免候旨被 仰付候事。

○
六月八日 鎮撫府 參 謂
赤松孫太郎

是迄中山誠一郎支配所之分、代官役被 仰付候旨被 仰付候事。

○
今般代官跡役、濱松藩赤松孫太郎へ被 仰付候間、誠一郎在武ニ候得共、手代ヨリ夫々金穀諸帳面、元帳共一字引渡シ可申候、右引渡相濟候ハ、其旨届出可申候事。

○
六月八日 鎮撫府 參 謂
中山誠一郎 手代中

當國古關警衛、今般彦根藩へ被 仰付候間、交代之上可被引上候事。

○
六月八日 鎮撫府 參 謂
赤松孫太郎

○
當國古關へ、爲警衛、高島藩是迄出兵之處、今般其藩へ右警衛被 仰付候間、兵隊二十人、至急差出、高島ト可有交代旨

御沙汰候事。

但、近傍廻方等、嚴重相心得、非常之儀有之候得ハ、速ニ當府へ可有報知候事。

○
六月八日 鎮撫府 參 謂
彦根藩以上甲斐鎮撫日誌

○高島藩記ニ云、右之通御達有之、彦根藩ト交代、六月十日古關引拂、高島表へ歸兵仕候。

九日、甲斐鎮撫府、中津、今治二藩兵ノ甲府ニ在ル者ニ令シテ、江戸ニ赴カシム、因テ、今治藩兵ノ鰍澤口警守ヲ罷メ、飫肥藩兵ヲ以テ之ニ代フ。

○甲斐鎮撫府達書

○
各通中津藩
今治藩

當府屯在之兵隊引拂、江戸表へ繰込、大總督府へ可届出旨 御沙汰候事。甲斐鎮撫日誌 中津藩記

○鎮撫日誌ニ云、七月十日、飫肥藩兵隊之内、鰍澤口見張受持、今治藩ト交代可在之旨、被 仰付候事。

○奥平昌邁家記ニ云、七月十二日甲府出立、同十八日江戸著。

○總野鎮撫府、朝旨ノ在ル所ヲ管内人民ニ榜諭シ、各其堵ニ安セシム。
上總、下總、上野、下野之國タルヤ、古 皇朝御盛之時ハ 宮様方ヨリ 御鎮守被成候程ノ重キ國柄候處、久敷武家ノ私恩

小恵ニ固着シ、大義ヲ令失却、妄ニ官軍ニ抗シ、或ハ王土ヲ掠メ、一揆徒黨等相結ヒ、小民ヲ蠱惑スルニ至ル、今般奸ヲ除キ候上ハ、忠良ヲ擧、老人ヲ尊ヒ、孤獨ヲ恤ム等之事モ漸々可被相行、都ニハ明王賢相精ヲ勵マシ玉ヒテ、日々彬々ト美政善事、目ヲ拭テ奉拜見程之御時ナリ、何レノ國、何レノ僻鄉ニテモ、王化ヲ感戴セサシム也、唯此下總野、邊ヨリ以北ニ限り、天恩ヲ不知モノ不少、豈恥ヘキニアラスヤ、近々奥羽邊モ早々御平定被成筈ニ付、能其英意ヲ體シ奉リ、人心安堵、各其職業ヲ勤メ、數百年來皇家御中興ノ御聖業、速ニ御成就、太平ヲ歓ヒ候様被成度、下々迄奉祈望者也。

慶應四年辰五月

下總野鎮撫府 執

事

別紙所々通衢之地ニ相掲、下民ヘ示諭相成候様之事。

鎮撫府 執

古河、佐倉、小見川藩記

○是ヨリ先、朝廷、長門、岩國二藩兵ヲ發シテ、東山道ノ官軍ニ應援シ、飫肥藩ヲシテ甲府ヲ警守セシム、是日、長門、兵員未詳、岩國百六十人二藩兵ハ江戸ニ至リ、飫肥藩兵百五人ハ甲府ニ至ル。甲斐鎮撫日誌岩國藩記
十日、大總督府、奥羽追討總督鷲尾隆聚ヲ改メテ、督府參謀ト爲シ、白河口ニ赴カシメ、參謀正親町公董ヲ以テ奥羽追討總督ト爲シ、吉岡某傳、市川某鍾次郎、二人ヲ使番ト爲シ、陸奥ニ差遣シ、長門藩兵ヲ白河口ニ發遣ス、明日、下參謀渡邊清、參謀補助木梨恒準ヲ奥羽追討總督ノ參謀ト爲シ、薩摩、備前、柳河之下手渡藩兵ニ属ス、大村、佐土原五藩兵ヲ率ヰテ、平潟ニ赴カシメ、泉藩ヲ以テ嚮導ト爲ス、又舊東山道總督府參謀板垣正形、佐藩士伊地知正治薩摩藩士、二人白河ニ在リ、ヲ督府參謀補助ト爲

シ、隆聚ノ節度ヲ奉シテ、白河口ノ諸軍ヲ督セシム。

鷲尾侍從

奥羽追討總督被免候事。鷲尾隆聚家記

鷲尾侍從

大總督府參謀被仰付、奥羽追討白河口出張可有之、被仰付候事。鷲尾隆聚家記

正親町中將

奥羽追討爲總督出張被仰付候事。鎮臺日誌

○按スルニ、公董故アリテ未タ發セス、七月五日ニ至リ遂ニ罷メラル、其條ヲ參看スヘシ。

○東征總督記云、六月十日、伊州藩吉岡傳衛、市川鍾次郎御出陣中、御使番被命候事。

十一日吉岡傳衛、市川鍾次郎、奥羽へ出張之事。

長州兵隊

白川口爲應援出張被仰付候事。鎮臺

○十一日渡邊清ヘ達書

奥羽追討總督參謀被仰付、奥羽進擊被仰付候事。渡邊清

○木梨恒準ヘ達書

奥羽追討總督參謀出張被仰付候事。木梨恒準

復古外記 東海道戰記 第三十二 明治元年六月十日